

西

北

菊池

津川村

菊池一族解體新章

卷之三

菊池市教育委員會
菊池文化研究所

一 菊池村の歴史
 二 菊池村の地理
 三 菊池村の産業
 四 菊池村の文化
 五 菊池村の教育
 六 菊池村の交通
 七 菊池村の歴史
 八 菊池村の地理
 九 菊池村の産業
 十 菊池村の文化
 十一 菊池村の教育
 十二 菊池村の交通

一四四九九号

序 文

菊池一族は、平安時代の後半から戦国時代の頃(1070年～1532年)まで約450年もの間、菊池地方を中心に栄えた武士の一族であり、最盛期には、九州一円に影響力を及ぼすほどの勢力を誇っていました。

市内各地には本丸跡の菊池神社をはじめ、一族の墓碑、菩提寺が点在し、その痕跡が色濃く残されています。また、その軌跡は九州一円から全国へとたどることができます。

菊池市教育委員会では、菊池一族をはじめとする菊池市の歴史・風土・文化を調査、発掘し、後世に引き継ぎ、広く市民に還元するとともに、学習活動への貢献を行うことを目的として、令和元年度に菊池文化研究所を設置しました。

その取り組みのひとつとして、菊池一族に関する研究の深化・蓄積と、菊池一族に関連する分野に携わる若手研究者を広く支援するため、菊池一族に関連する歴史・文化の調査研究事業を行っています。

この度、令和3年度の研究の成果を「菊池一族解體新章 卷ノ三」としてまとめました。

この論文集が、菊池市の歴史・文化、ひいては中世歴史文化の研究をさらに進展させるとともに、その歴史的価値を一層明らかにする一助となれば幸いです。

おわりに、菊池一族に関連する歴史・文化の調査研究事業の実施にあたり、ご理解とご協力をいただいた各研究者並びに指導及び助言をいただいた先生方に深く感謝申し上げます。

例 言

- 1 本書は、菊池文化研究所が令和3年度に公募した「菊池一族調査研究事業」により、選考された研究者による調査研究論文を収録したものである。
- 2 本書の作成にあたり、服部英雄氏、稲葉継陽氏には、研究者の選考及び調査における指導において、ご尽力を賜りましたこと厚く御礼申し上げます。
- 3 本書の作成にあたり、掲載資料の提供などで多くの機関並びに個人に御協力をいただいた。掲載した資料の出典については各章末論文ごとに記した。

目 次

第1章 隈府土井ノ外遺跡出土の土師器に関する研究	
天草市観光文化部文化課	
中山 圭	1
第2章 墓石類からみた江戸時代における菊池氏の顕彰	
九州近世大名墓研究会	
野村 俊之・美濃口 雅朗	35
第3章 石造物からみた菊池一族について	
—菊池市巨輪足山松林院東福寺を中心として—	
太宰府市教育委員会 文化財課	
高橋 学	67

菊池一族解體新章 卷ノ三

発行日	令和6年3月20日
編集・発行	菊池市教育委員会 菊池文化研究所 熊本県菊池市隈府 872-1 TEL 0968-25-1111
印刷・製本	簡 橋本印刷

限府土井ノ外遺跡出土の土師器に関する研究

中山 圭

はじめに

熊本県菊池市の中心部に位置する限府土井ノ外遺跡（以下、土井ノ外遺跡）は、県立菊池高校の校舎改築に伴い平成一七〜一八年にかけて、約四四〇〇㎡の発掘調査が実施された。その結果、方形に区画された溝の内外に掘立柱建物跡、柵列跡が検出され、中世後期の大量の土師器皿や輸入陶磁器が出土した（熊本県教委二〇〇九）。当該地近辺は、南北朝期に南朝を支え、戦国期には肥後国守護として君臨した菊池氏の本拠地があったと考えられており、東端の菊池神社・菊池公園を有する丘陵「城山」を起点に、東西軸の守護城下町が展開したと想定されている。現在の字界を見ても、「御所小路」等数本の軸的街路に面して方形区画が整然と展開しており、その名残を見ることができる。

菊池氏の居城は、元来、城山上の「菊池城跡（限府城）」と理解されてきたが、平成八年に青木勝士氏が、全国で進展しつつあった中世都市研究の成果を基に、限府町内に残る字名「屋敷」に着目、平地の守護館有力地として比定した（青木一九九六）。この「屋敷」に東接する字が「土井ノ外」であり、南北朝期に下向していた懐良親王が手植えしたとされる「將軍木」もその区画に含む。その後に行われた土井ノ外遺跡発掘で上記成果が見られたため、当然、菊池氏居館としての可能性が論じられることとなった。ただし、調査報告

書内ではその比定については慎重な見方をしており、一方、青木氏は同遺跡を守護館の一部と評価している（青木二〇二〇）。

このような中、筆者は、報告書の実測図等から青磁琺瑯形瓶など輸入陶磁器の奢侈品が出土していることを知り、これら遺物は土井ノ外遺跡の空間特性の復元上、大きな影響を与えるものとの認識を持ったが、そのことを指摘した先行研究は見られなかった。そのため、菊池市教育委員会が進めている「菊池一族の歴史文化資料の調査研究」事業の採択を受け、熊本県教育委員会が所蔵する土井ノ外遺跡の輸入陶磁器の研究を行い、成果を前稿にまとめたところである（中山二〇二一A）。

結果、限府土井ノ外遺跡の輸入陶磁器について、未報告資料の抽出・図化提示を出発点として、青磁の優品である各種瓶類や酒海壺他の奢侈品が多数含まれていること、青磁器台・青磁罇鉢・法花壺・褐釉磁器等全国的に見ても希少な輸入陶磁器が出土していること、天目茶碗以外にも、風炉・茶臼・茶入等の茶道具が過不足なく揃っている状況等を確認することができた。また、遺跡出土破片を、各地の美術館伝世品や他遺跡出土遺物と比較検討することで、その希少性・重要性が把握された。特に首里城跡京内の一括資料の組成と近い遺物を抽出できた点は、今後の比較研究の進展や南方との交易交流を考える上で、重要な基礎資料と位置付けることができたと考えている。出土した青磁瓶（花生）・水注類や茶道具等の使用状況に

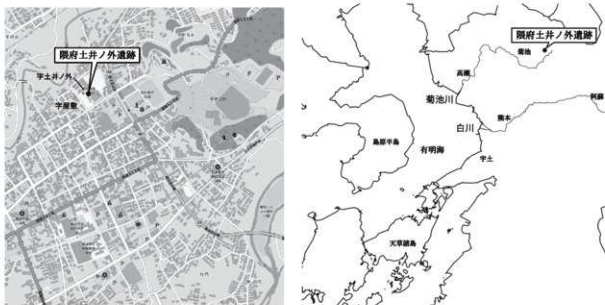


図1 限府土井ノ外遺跡位置図

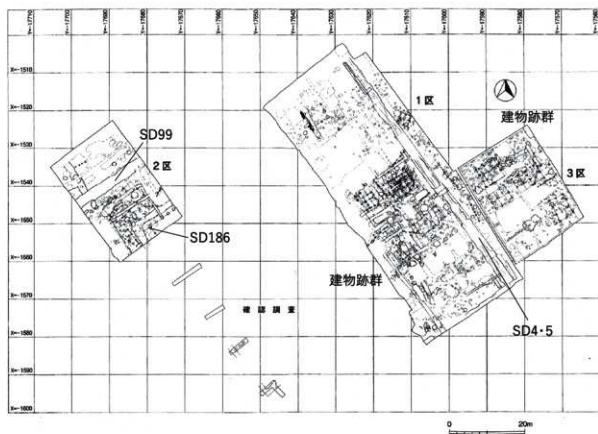


図2 限府土井ノ外遺跡調査区・遺構配置図

ついで、中世段階の花飾りの故実書『立花園巻』や座敷飾りの規定書『君台観左右帳記』の記録と対比し、限府土井ノ外遺跡には、守護館クラスの会所が存在した可能性が高いことを指摘することができた。

一方、課題として「輸入陶磁器破片の点数計測による、碗皿の出土状況を通じた遺跡の存続年代の見直し、盛期の捕捉」を掲げ、これについても、一応の見通しを別稿で論じた(中山二〇二B)。

また、もう一つの課題として、限府土井ノ外遺跡出土遺物の大部分を占める、土師器の分析の必要性も掲げた。土師器は、硬質で長期間の使用に耐える輸入陶磁器に比べ、耐久性が低く、在地で生産される特性から大量消費されることが多く、結果としてモデル更新の間隔が短い。このため編年の基準資料として優れているが、その形態変遷を追求するためには、大量の破片資料が必要となる。限府土井ノ外遺跡では出土量が多く、その要件を満たしている可能性が高い。また、土師器は様々な用途に使用されるが、特に主殿空間等における献杯儀礼での消費が特徴づけられてもいるため、輸入陶磁器と併せて、出土地点周辺の空間復元に有効な資料となり得る。本稿では、引き続き限府土井ノ外遺跡の特質をより明らかにするため、出土土師器の分析から、遺跡の時代変遷や出土空間の再構成を目指すものである。

一 輸入陶磁器の出土状況からみる土井ノ外遺跡の年代観

(一) 報告書の輸入陶磁器評価に関する問題点と未報告資料の抽出
土師器の分析の前に、まず輸入陶磁器供膳具(碗・皿)の出土状

況と沖繩編年に照らした年代観の確認作業を行っておく。

調査報告書では、龍泉窯系青磁について四〇点が図化されており、それ以外の輸入陶磁器は八点と少ない。そのうち、年代の指標になりそうな青磁碗を見ると、無文端反碗(沖繩編年、IV—〇類もしくはV—〇類)、無鎚連弁文碗(同V—一類)、雷文帯碗(同V—二類)、細線連弁文碗(VI—一類)が見られ、特に雷文帯碗と細線連弁文碗が主体として掲載されていた。

近年、豊富で多様な輸入陶磁器の出土状況を基盤として、年代観の活発な議論を重ね、編年の細密化が進展している沖繩編年から(瀬戸二〇一七)、これらの年代観を位置付けると、IV—〇類・V—〇類・V—一類は概ね瀬戸四期(二三五—一四二〇年頃)、V—二類は瀬戸五古期(一四二〇—一四六〇年頃)から瀬戸五新时期(一四六〇—一四八〇年頃)、VI—一類は瀬戸六期(一五世紀末—一六世紀前半)の基準資料として該当する。

このため、報告書掲載の輸入陶磁器からみると、少なくとも一四世紀中葉から一六世紀の前半まで遺跡が存続していると考えられる。

調査報告書では遺構の切合い関係を基軸に、遺構の消長をⅢ期に区分し、それぞれⅠ期を一四世紀後半—末、Ⅱ期を一四世紀末—一五世紀初頭、Ⅲ期を一五世紀初頭—前半と設定しており(熊本県教委二〇〇九)、この時期区分では、土井ノ外遺跡が一世紀に納まることとなり、また、各画期は三〇年程度となり、いささか窮屈となる。遺構の時期決定に関する基準が不明瞭で、本稿で取り扱う土師器は、未だ熊本地方では中世後期の詳細な編年は組まれていないため年代決定に利用しがたく、おそらく輸入陶磁器の既存の年代観を指標に年代を定めたものと推測されるが、依拠した陶磁器編年も明

らかでない。報告書の遺構年代観と、先の沖繩編年との齟齬は五〇年以上に及び、例えばⅠ期内（一四世紀代）で廃絶するとされる溝SD九九は、出土遺物の主体がV—II類の雷文帯碗であるので、沖繩編年に照らせば廃絶は早くとも一五世紀中葉以降と考えられ、報告書内の画期と相当のズレが生じる。

以上のように、報告書内の年代観は、再考が必要と思われる状況にあった。このため、これまでの調査において、未報告資料も含む全輸入陶磁器の破片を見し、沖繩分類に照らして、点数計測を行った。その結果、青磁・白磁のみならず、青花磁も一定量出土しており、数は少ないものの、青花E群碗や漳州窯産青花磁など二六世紀後半に出現する輸入陶磁器の存在も確認できた。このため、限府土井ノ外遺跡の存続年代は、ほぼ室町時代全体にわたる可能性も出てきた。

(二) 輸入陶磁器の出土数

出土している陶磁器片について、種別・器種・分類ごと、及び出土地区・遺構・グリッドごとに点数をカウントし整理したものが表一・二である。カウント作業は、土井ノ外遺跡の遺物を収蔵する熊本県教育委員会文化課文化財資料室内で実施した。収蔵コンテナ（未報告資料）は、出土地区ごとに、土師器類・瓦質土器類・石製品（石そのものも含む）・青磁類（二箱）・陶磁器類（青花・近現代含、五・六箱分あり）に分類され収蔵されており、概ね、輸入陶磁器を含むと思われコンテナを確認した上で、破片のカウントを実施したが、すべての収蔵コンテナを完全に実見できたわけではないこと、現地での作業時間が限られており分類照合にやや曖昧な点があったこと（特に青磁の無文部位破片）等から完璧に正確な点数計上・分類が成果

としてきたとは言いがたい。それでも、概ねの傾向としては、的外れなものではないと考えている。

両表左列の地区・遺構名・グリッド名は、それぞれ破片が収納されているビニール袋に同封されていたラベルの記述を第一の指標とし、ラベルがない場合は破片の注記を元に名称を復元した。表中、「I区五—E—G」等とあるものは、グリッドごとの取り上げと推察されるが、報告書にグリッド名の明記がないため、現段階では詳細な出土位置が不明である。同じ理由で、ラベルに遺構名が記してあるものの、報告書上、当該遺構の名称が見られないものもあり、これも出土地点が判明しない。このため、本稿では個別遺構の年代的評価に踏み込まず、一—三の各調査区の概ねの出土傾向を中心に検討せざるを得なかった点をお断りする。表中、左列は上から一—三区・二—三区の順に配列しているが、これは一—三区が隣接しており一体的な位置空間と考えられたためで、それに対し、二区はやや離れた調査区になるため、地域ごとの傾向を見る上で都合がよいため、このような配列とした。よつて、土井ノ外遺跡は、一—三区と二区の大きく二エリアに区分されると捉えている。

なお、分類の基準は沖繩分類（瀬戸ほか二〇〇八）、一部中世前期の遺物は大宰府分類（太宰府市二〇〇〇）を適用している。

(三) カウント結果の分析

輸入陶磁器は総計六六五点が確認された。内訳は、青磁四六五点、白磁五九点、青花一〇四点、その他三七点であり、主体は一五世紀代の龍泉窯系青磁が占める。青磁の組成で、最も多い種類は雷文帯碗（V—II類）で四六点である。次いで、細線連弁文碗（VI—I類）

が三八点、無文玉縁・直口碗三四点（V—〇類）、無鎚蓮弁文碗（V—一類）一八点となる。明瞭に、IV—〇類と確認できた破片は五点のみでV類破片よりかなり少ないため、V類段階から陶磁器が増加するのは確かであるが、主に端反口縁部の破片で、筆者の同定力不足によりIV・IV・V類分類不可としたものも二六点あり（註一）、今少しIV類もしくはIV類段階からの遺物が多くてもおかしくはない。白磁は四都窯系のD類と景德鎮窯系のE類がほぼ拮抗している。白磁D類は瀬戸四期・五古期・五新时期（概ね二三五〇～一四八〇年頃）に使用され、白磁E類は六期（一五世紀末～一六世紀前半）になり白磁の主流となる。

青花はB一群皿が二六点と最も多く、次いで端反り碗一六点、E群碗一〇点となる。B一群碗は四点と計上しているが、今回、確実にB一群碗の特徴を備えているものだけをB一群としているが、「端反碗」と計上した破片の中で、B一群に含められるものが多数あると思われる。端反り碗・B一群碗は、柴田圭子氏の整理図によれば（柴田二〇一一）、概ね一五世紀代に属すると理解して支障はない。であれば、青花類も、土井ノ外遺跡では盛期は一五世紀にあると考えられる。白磁もこの様に類属は無い。

瀬戸六期の指標となる青花C群碗・皿、七期の指標となる青花E群碗・皿、漳州窯系青花皿類の出土も、未報告資料の抽出の中で確認できた。C群碗・皿が各六点、E群碗が一〇点確認できている。このことから、瀬戸六期以降も限府土井ノ外遺跡は機能していたことが確実である。遺構との関係ではC群・E群ともSD四・五から出土がみられており、このことから同溝は一六世紀後半まで機能していた可能性がある。ただ、全体の数としては、青花C群の数量は非常

に少なく、盛期である一五世紀中葉に比べると衰微気味であったことは間違いない。

これら青磁・白磁・青花各碗皿の出土状況からは、土井ノ外遺跡の存続年代は、概ね瀬戸四期（二三五〇～一四二〇年頃）から始まり、瀬戸五古期（一四二〇～一四六〇年頃）～五新时期（一四六〇～一四八〇年）にかけてピークがあり、六期（一五世紀末～一六世紀前半）以降は衰退しつつも、細々と継続する、とみることができよう。

さて、改めて表に戻ると、青磁奢侈品（盤・瓶・壺・袋物型類）の数が七〇点にのぼり、全体の点数から見ても一割を超える比率を占める。前稿（中山二〇二一A）で確認したように、その中には、瓶・水注・鉢など列島の類例が限られる希少な破片が多く、その特殊性がうかがえる。また、青花大皿や法花壺、褐釉磁器、朝鮮象嵌梅瓶等も同じく希少な遺物といえるだろう。そのほとんどは、一区もしくは三区から出土しており、二区からは香炉や若干の盤が出土している程度にすぎない。このことから推測するに、一・三区周辺に、会所等の室礼具を多数保有する空間が展開していた可能性が高い。現段階では、個別の建物遺構のどれが会所遺構にあたるか、等については比定が困難であるが、今後、個別の遺構出土の遺物等から空間復元を検討していく必要もあるだろう。

出土遺物の多くが、包含層やカクラン層からの出土とされているので、各奢侈品が一時期にどの程度併存していたかは担保できないが、確認できた希少な遺物群を見ると、一・三区には唐物奢侈品を多数飾り立てる空間がかつて存在した蓋然性は高い。そう考えると、土井ノ外遺跡は守護館レベルの居館であった可能性は高いものと考えられる。

さて、輸入陶磁器は、全国各地の中世遺跡から出土しており、年代の物差しとして共通の編年が利用できる点で、利用価値が高い。一方で、食器としての耐久性が高いことから、入手から廃棄までのスパンが長期になる可能性が考えられる。このため、少点数の輸入陶磁器片に依拠した遺構年代は、往々にして見誤ることがある。これに対し、素焼きの土器である土師器は、もろく汚損しやすい。このため、一度から数度の利用で廃棄されることが多く、生産から廃棄までのサイクルが短い。生産年代と廃棄年代がニアコールとなり、より正確な遺構年代の捕捉に役立つのである。

しかし、土師器を編年の参考として使用するためには、当該地域における土師器の形式変遷を明らかにし、さらに絶対年代に当てはめる必要がある。このような土師器編年は全国各地で構築されているが、熊本県下においては、中世前期こそ美濃口雅朗氏により設定されているが（美濃口一九九四）、中世後期については未編成である。さらに土師器は在地性が強く、旧国単位（現在の県レベル）でも地域ごとの差異が顕著で、比較検討が難しい。本研究において、取り上げた限府土井ノ外遺跡の土師器の形状も、筆者が日常的に調査研究に携わっている天草地域の土師器とは、全く形状が異なっている。おそらく中世後期における土師器の生産と流通は、支配勢力単位や平野ごとの地理的単位、あるいは都市・集落単位の、ローカルで完結している場合が多いのであろう。以下、出土土師器の検討を通じて、菊池地域における中世後期の編年案を提示したい。

二 出土土師器の分析

(一) 出土土師器の坏の特徴と分類

報告書（熊本県教委二〇〇九）に掲載された土師器の点数は三七二点で、輸入陶磁器報告数四〇点の九倍強である。土師器は破片になると実測に耐えない資料も多いため、未報告資料分はコンテナに多数収蔵されている。収蔵状況を瞥見した印象から、輸入陶磁器の総点数六六五点に対して、土師器破片の点数総数は報告書比率である九倍以上、点数として一万点を超える可能性がある。他の出土遺物として挿鉢などの瓦質土器も多数あるが、出土遺物の大多数を土師器が占める傾向は確かである。

土師器は、概ね口径一〇～一二cmほどの坏、口径七～九cmほどの小皿の二種類があり、中世後期の各地の傾向に整合している。今回は、器形の特徴が把握しやすい坏の特徴を中心に分析を行い、遺構出土の土師器を抽出し変化の方向性を見出すこととする。限府土井ノ外遺跡では、文献記録と対比できる土層など絶対年代の手がかりに乏しいのが実状だが、共判する輸入陶磁器や広域流通品（備前焼挿鉢等）などを参考に相対年代を推定したい。通常であれば、大友氏館跡や大内氏館跡などのように、周辺地域も含めた多数の発掘調査を経て、一括性の強い遺構から出土した遺物を素材に、器形の連続性やセリエーションから、編年を構築するべきであるが、限府土井ノ外遺跡は一度の調査しか経ていないため、良好な遺構が少なく資料的制約が多い。牽強付会との批判は覚悟の上で、それでも、一応の編年案を提示しておくことは今後の菊池一族に関係する遺跡調査の発展のため

に無為ではないと思われる。今後の議論の基礎になれば幸いである。

図三は、豊後大友氏館跡から出土した土師器の系統分類図である（長二〇一・A）。中世前期から続く断面箱型の在地系土師器のA系統、工具を使用した同心円状の内面の調整が特徴的なB系統、さらに京都の儀礼受容をエポックとして導入されたと考えられる、回転台を用いない手づくねによる「京都系土師器」のC系統が確認されている。これらの土師器は、時期的変遷により消長があり、一四世紀代から一五世紀末までA系統土師器が主体であるが、一五世紀末にB系統土師器がこれを駆逐し、さらに一六世紀初頭にC系統土師器が導入され、一六世紀代はB系統とC系統が併存しながら、それぞれに器形を変化させていくことが明らかにされている（図四・五）（長二〇一・五・二〇一八ほか）。これに政治的な結びつきがあった山口の大内氏関連地から持ち込まれたと考えられる大内式土師器が加わる構成となつている。

さて、図三に見られるA系統土師器はプロポーションが多様だが、これによく類似したものが限府土井ノ外遺跡からも確認される。その理由は定かではないが、当時、地域を越えた土師器の普遍性があったものかもしれない。これらのグループは、限府土井ノ外遺跡でも坏A類と位置付けておこう。坏A類には、口径と底径の差が少なく体部が内湾して立ち上がるタイプ（Ae）、体部が直線的に開くタイプ（Ah）などが見られ（図六上）、さらに口縁部形状にバリエーションが見られる。それぞれに対応する小皿も類型がある。これらは、菊之城跡などから出土した中世前期土師器の系譜を引き継いだものと捉えられよう。

これに対し、限府土井ノ外遺跡で特徴的な土師器も見られる。体

部の中ほどが強く外へ屈曲し、外面に明瞭なナデの痕跡が残る土師器坏がそれであり、本稿では坏B類とする（図六下）。この種の土師器は、土師器を一括廃棄した土器だまり遺構である、SK八・九二〇、SK二一六・二一七や溝遺構SD一八などで数多く出土しており、限府土井ノ外遺跡の土師器の主体を占める。またプロポーションや焼成状況による変化も看取される。器形が似ているが細部に違いがある坏B_rとB_sの先後関係の把握が重要になろう。なお坏B_fは在来系のA類に位置付ける方が妥当という可能性もあるが、胎土・焼成の状況、見込みの盛り上がり方などにB_sとの接点があるように考えられたため、ひとまずB類に位置付けておきたい。

（二）坏B類の変化

坏B_rと坏B_sは共に体部が大きく折れる器形が共通しているが、異なる点も見られる。まず、胎土・焼成について、B_rは硬質焼成で堅緻ながら、内外器面に凹凸がびつりとみられる例が多い。これは、B_rの胎土がやや粗いために発生した現象の可能性があり、見込みにヒビ割れや糸切り底面に穴状の窪みが確認される事例も多い。また、外側屈曲点に対応する内器面の変化点に明確な稜が見られる例が多く、このため口縁部は鏝状の受け緑的な様相を呈している。見込み部分があるが、特に見込みが盛り上がりがないものとそれぞれが看取できる。焼成時に何らかの物質を見込みに載せて焼いたために発生した焼けムラのように思われる。いわば備前焼の「ポタモチ」的なものである（図六B_r写真）。

これに対して、坏B_sは、不純物の少ない胎土のため、器面の凹凸

が少なく、焼成はB rよりは軟質で橙色のものが多く。底面の窪みは少なく、見込みはボタン状に盛り上がるタイプが多い。その際、凸部の周縁にヘラで刻んだ圏線が二、三周廻るものが多い。この特徴は、同じ焼成の小皿でも特徴的で、坏B sとセット関係にあることを示唆している。外側屈曲部に対応する内器面の屈曲はなだらかで、稜の強いB rと異なっている。器高はB rの方が全般的に低い。

坏B fは、体部が朝顔状に外に向かつて反りながら開く。器高が高い反面、底径はやや小さい。黒色の煤もしくは使用の汚れが付着しているものが多いため、胎土や焼成色が不分明なものが少なからずあるが、概ね橙色もしくは褐色であるものが主流である。見込みは盛り上がるものとフラットのものがある。外面に強いナデが見られるものがあり、橙色の色調から坏B rに類似しており、坏B に分類した。

報告書掲載の坏について、出土遺構ごとに各分類の平均値を表にしたものが表三である。これには参考例として菊之城跡トレンチ一包含層出土の平均値を付した。菊之城跡のトレンチ出土土師器は、包含層であるので概ね一三世紀頃と、おおざっぱな年代しか言及できないが、口径二一・九八cm、底径九・六二cm、器高三・四五cmとなっている。

これに対し、例えば、SK一〇の坏二六点の平均値は、口径一〇・六八cm、底径六・〇九cm、器高二・六二cmを測る。器高については坏B fのように高いものもあるので、一概に言えないが、中世後期の平均は前期の土師器より口径・底径とも二、三cm小さくなるものと理解できよう。つまり、中世後期には土師器坏は小型化の傾向にあると考えられ、これは全国的に共通している。

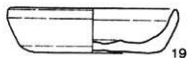
坏B rは主にSD一八から多く出土しており、出土二二点の平均は、上から口径・底径・器の順にそれぞれ、一一・二二cm、六・七〇cm、

表3 限府土井ノ外遺跡出土土師器坏の遺構・分類ごとの平均法量値一覧 単位=cm

	計測点数	口径	底径	器高	備考
菊之城跡トレンチ1包含層	24点	12.98	9.62	3.45	13世紀頃・参考値
SD33 坏Ae (内湾)	8点	11.12	8.01	2.83	
SD33 坏Bf (深端反)	1点	11.00	6.20	3.40	
SD33 坏Br(腰折/凹凸)	1点	11.81	6.00	2.50	
SD18 坏Br(腰折/凹凸)	22点	11.21	6.70	2.55	
SD18 坏Ah (逆八字)	6点	11.41	6.95	3.06	
SD121 坏B s (腰折/滑らか)	15点	11.55	6.38	2.98	
SD121 坏Bf (深端反)	5点	10.90	5.94	3.43	
SD121 坏Ae (内湾)	1点	10.80	8.00	3.30	
SD85 坏Bf (深端反)	1点	10.80	6.10	3.60	
SD85 坏Ae (内湾)	6点	10.71	7.50	2.89	
SK8 坏Bs (腰折/滑らか)	36点	10.37	5.91	2.66	
SK9 坏Bs (腰折/滑らか)	14点	10.82	6.22	2.75	
SK10 坏Bs (腰折/滑らか)	26点	10.68	6.09	2.62	
SK116 坏 大内系?	1点	12.80	4.20	3.50	
SK116 坏Bs大型 (腰折/滑らか)	1点	13.40	7.50	3.70	
SK116 坏Bs (腰折/滑らか)	20点	10.52	5.91	2.80	
SK117 坏Bs (腰折/滑らか)	1点	10.80	6.10	3.00	
SD186 坏Ah (逆八字)	4点	11.92	6.80	3.57	
SD186 坏Bf (深端反)	9点	11.33	6.33	3.60	
SD186 坏Br(腰折/凹凸)	1点	12.30	7.20	3.20	
SD272 坏Ah (逆八字)	2点	12.65	8.45	3.15	
SD99 坏B f (深端反)	1点	10.80	5.50	3.10	

坏A類

Ae SD33 出土



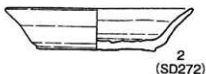
- ・口径と底径の差が少ない
- ・体部が内湾気味に立ち上がり口縁部は直立
- ・胎土は桃色が多く、赤色粒を含む

Ah SD18 出土



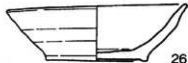
- ・逆ハ字形に開く器形
- ・体部が直線的に立ち上がる
- ・胎土は褐色形で、金雲母を含むものが多い

Aeh SD272 出土



- ・口径と底径の差が少ない
- ・体部は端反器形になる
- ・胎土はベージュ系。出土数少ない。

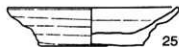
Ahh SD186 出土



- ・逆ハ字形に開く器形
- ・体部は腰部でやや張り、口縁は端反
- ・胎土は褐色形で、金雲母を含むものあり

坏B類

Br SD18 出土



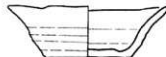
- ・腰部で強く折れ曲がる
- ・口径はBsより広く、器高は高め
- ・外部は強いナデ
- ・見込みは盛り上がりずフラット
- ・屈折部の内器面側は稜が明瞭
- ・胎土は砂粒が多く、焼成が高度のためか器面が荒れ、凹凸がある。

Bs SK8 出土



- ・腰部で強く折れ曲がる
- ・外部は強いナデ
- ・見込みの中央がボタン状に盛り上がるもの多
か、見込みの際に沈線が入るもの多
- ・屈折部の内器面側はなだらか
- ・胎土は橙色で、焼成良好のもの多

Bf SD121 出土



- ・体部は直線的に開く
- ・体部の器厚が一定
- ・器高が高い
- ・底径が小さい
- ・見込みは中央部が盛り上がるが
際に沈線が入るもの多
- ・胎土は良好で、橙色系多



坏Br



坏Bs

図6 限府土井ノ外遺跡出土土器分類案

二、五五cmとなっている。坏BsはSK八・九・一〇・一一・一二・一三の土器一括廃棄遺構から主に出土している。遺構としてSK一一六はSK八に、SK一一七はSK九にそれぞれ切られており、このため、SK一一六・一一七がSK一一七以外の複数平均値は、SK八は三六点で二〇・三七cm、五、九二cm、二、六六cm、SK九は一四点で二〇・八二cm、六、二二cm、二、七五cm、SK一〇では二六點で二〇・六八cm、六、〇九cm、二、六二cm、SK一一六は二〇点で二〇・五二cm、五、九二cm、二、八〇cmを測る。SK八・九・一〇と、SK一一六の数値には、若干SK一一六の方が器高が高いものの、他に顕著な差は見られない。

坏Brと坏Bsでは、口径・底径は坏Brが一回り大きく、逆に高さは坏Brの方がやや低いと捉えられる。イメージ的には坏Brは、坏Bsを上から押しつぶしたようなスタイルと言えようか。その先後関係の推定は、共存遺物も加味して判断する必要があり、次節で考えることとしよう。

(三) 共判事例の抽出

次に各遺構の廃絶年代の検討から土師器の年代観を考える。本来であれば、短期間で遺構が形成され廃絶した遺構を抽出することが望ましいが、隈府土井ノ外遺跡ではSK八やSK一一六などに限られている。そこで、本稿では次いで土師器がまとまって出土している各遺構(SD)も対象として分析を進めたい。本来、溝遺構は利用期間が数十年にもわたる可能性があり、廃絶の作法も徐々に埋まっていくなか、場合と一気に埋めってしまう場合があり、この点は現地で土層の堆積から判断されるものであり、本研究では言及できない。各溝から

出土した輸入陶磁器を見ると、複数の形式破片が確認されるものがあり、その場合は最も新しい遺物を廃絶年代の参考とするのが妥当である。以上の点に留意して、各遺構の土師器と共存遺物の関係を類推する。遺構の位置は図七を参照されたい。

●SD八五・一二一(図八・九・一二)

一区中央部に位置し、主要な掘立柱建物跡を区画するように約二〇mほど南北に走っている。SD八五・一二一・二二・三三九と三つの遺構番号に区分されているが、実際には一本の溝と考えられている(熊本県教委二〇〇九)。輸入陶磁器は、SD八五から無銘連弁文碗(V一類)と見込みに梅月文を描く青花碗が出土している。この種の青花碗は、一四五九年に失火で廃絶したとされる首里城京の内跡SK〇一に含まれており(図一〇)、このことから、当該遺構の廃絶は一五世紀の第三四半期頃と想定しておきたい。土師器は深皿形坏Bfや屈折良胎の坏Bs、内湾する坏Aeを主体とするが、坏Brも数点含まれている。

●SD三三三(図二・一・三三)

一区南西部の溝で、SD二九と並走する。長さ約四m分が残っているが、南側の延長は攪乱層で破壊されている。

出土遺物は内湾の坏Aeが八点あり主体となる。口径の平均値は一、二二cm、底径の平均値が八、〇一cmで、口径と底径の差が少ない。見込みのボタン状の盛り上がりが顕著である。その他の坏は、坏Bfと坏Brがそれぞれ一点ずつ確認できる。共判遺物が少なく、わずかに未報告の資料に中国天目碗破片があるが、遺構単体での年代推

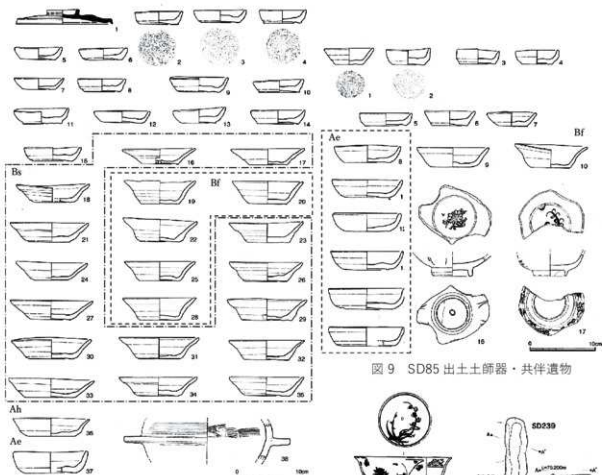


図8 SD121 出土土師器・共伴遺物

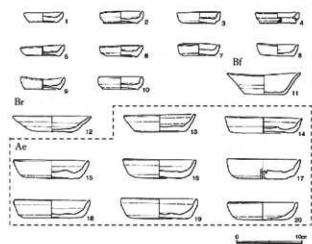


図13 SD33 出土土師器・共伴遺物

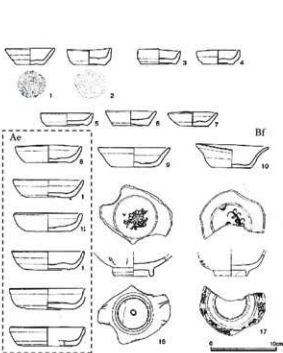
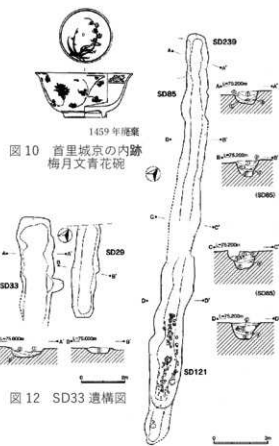


図9 SD85 出土土師器・共伴遺物



1459年産
首里城京の内跡
梅月文青花碗

図12 SD33 遺構図

図11 SD85・121 遺構図

定は難しい。

●SD一八(図一四・一五)

一区北西部に位置する溝遺構。約7m分が残っており、溝の西側肩部に石敷状の不明遺構SX一二が付属している。

屈折する坏は、すべて坏Brで統一されており、坏Bsは含まれていないが、No三五はボタン状の見込や胎土が坏Bsに類似する。No三一・三二・三三・三四・三六・三七は坏Ahでいずれも褐色系の胎土で、中世前期からの系譜を引き継ぐタイプの坏である。一部には金雲母を含むものがある。No三五は判断に迷ったが、器形から坏Ahグループに含める。

報告書に袖だまりを持つ中国天目碗が掲載されており、また未報告の遺物に、内面口縁部に雷文帯を有する青花端反碗の破片がある(写真)。大きく一五世紀中葉と捉えることができよう。

●SK八・九・一〇(図一六・一八・二二)

SK八と九・一〇は、多数の土器が出土した土器だまり遺構で、一区南西部、SD三三の付近で検出されている。SK八は長軸〇・八四cm短軸〇・六八cmの円形土坑で、より古い土器だまり遺構SK二七を切つて構築されている。同様にSK九・一〇(同一の遺構)は、より古い土器だまりSK二一六を切っている。このことから、SK二一七とSK八の土師器、同じくSK二一六とSK九・一〇の土師器には先後関係があるはずである。

SK八・九・一〇のいずれも、坏はBsがほとんどを占めるが、SK八では三点(No四四・五七・六二)、SK九では一点(No二五)、

SK一〇でも一点(No二三)とそれぞれ、坏Brが確認できた。SK一七のサンプル数が少ないのが難点だが、SK二一六・二一七はすべて坏Brで、坏Brの変遷の過渡期にあったと考えたい。

SK八・九・一〇出土遺物は、ほぼ土師器で占められるが、唯一、SK九から龍泉窯青磁が一点出土している(No三八)。この青磁は、高台付近しかない破片で、素地・釉層とも厚い。外底は蛇の目軸剥ぎで、軸色は水色である。おおよそ一五世紀代の青磁であるが、報告書では碗とされているものの、器形から皿と判断される。見込みおよび残存の外底は無文である。高台付近からわずかに腰折れして立ち上がる屈曲が認められる。沖繩分類では皿V一〇・三類とされ、腰部部位の径がおおよそ一・四cmを計測するため、大ぶりのタイプであろう。あるいは欠損している口縁付近では八角形を呈する可能性もある。無文の腰折皿V一〇類は、瀬戸四期(一三五〇〜一四二〇年)から現れるが、当該期はかなり長めの期間であり、実際には、SK二一六との関係から、やや新しく見て一五世紀前半頃としておく。

●SK二六・二七(図一七・二二・二四)

SK二六はSK九一〇によつて切られ、SK二一七はSK八によつて切られている。これはいずれも土師器の廃棄土坑であり、隈府土井ノ外遺跡では他に土器だまりは確認されていないことから、土器の処分場所が定められていた可能性が高い。

SK二一六は小皿二〇点、坏二三点が出土しており、また一点のみ口径三、二cmの極小小皿がある(No一)。坏二三点のうち、二一点は

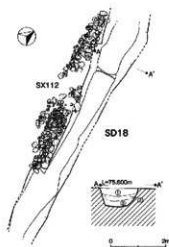


図14 SD18 遺構図

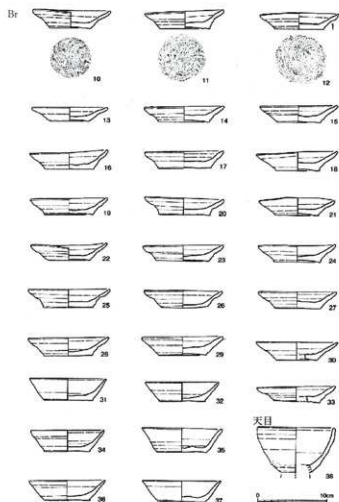
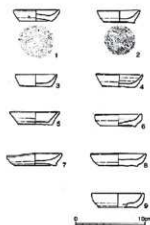


図15 SD18 出土土師器・共伴遺物

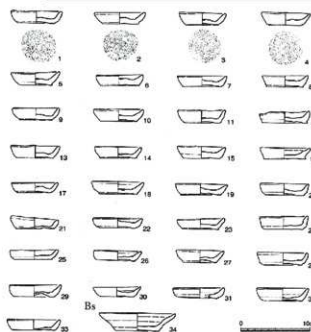


図18 SK8 出土土師器 1

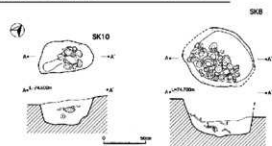


図16 SK8、SK9・10 遺構図

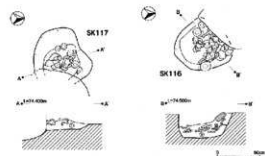


図17 SK116、SK117 遺構図

坏B₅で胎土が良質なものが多く、見込みにボタン状の盛り上がりがあるものは、ボタン部外周に沈線が廻るものがある。No.二三は特徴は坏B₅に等しいが、口径二三・四cm・底径七・五cm・器高三・七cmと通常坏B₅より一回り大きい。極小皿の存在とあわせ、法量の差は興味深い。No.二三は、他に類例のない特殊な器形で、口径は一・二・八cmを測るのに対し、底径はわずかに四・二cmに過ぎない。器壁は薄く、体部が緩やかに大きく開き、全体的に内湾気味ながら直線的に立ち上がる。総じて、ナデが丁寧である。色調は淡い桃色である。限府土井ノ外遺跡の土師器坏としては非常に特異で、他に同様の土師器は確認できていない。このため、搬入土器の可能性を考え、類例を探索したところ、プロポジションとしては山口県の大内館跡で設定されている大内II A式の坏にもっとも近似しているといえる(図二三)。ただし大内館跡の土師器皿は白色土器が多いため、色調が適合するかは不明である。あるいは、大内館跡そのものではなく周辺の町家等で用いられたタイプかもしれないが、このあたり未確認で、今後の課題である。なお、北島大輔氏の編年によれば、大内II A式は一四世紀末から一五世紀前半に該当すると設定されており、SK二一六も一応、その時期としておきたい。SK二一七からは坏はB₅一点のみ出土で、年代決定に資する共伴資料は確認できていない。SK八とSK九・一〇による遺構の改変状況を見ると、SK二一六とSK二一七はほぼ同一時期の遺構と判断してよいものと思う。

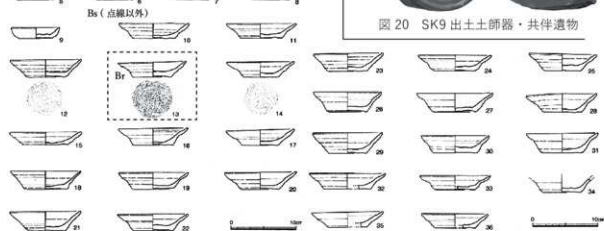
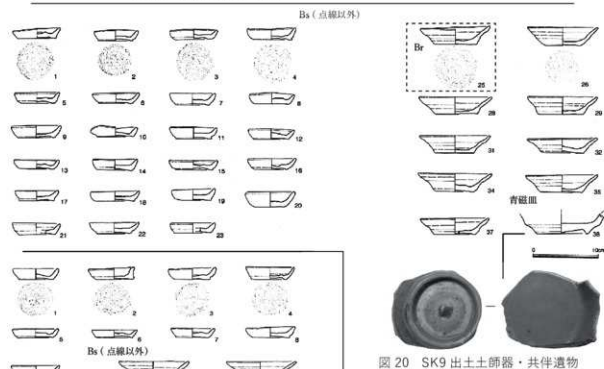
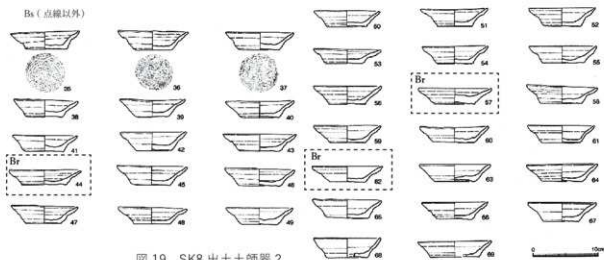
●SK五八・五九(図二五・二六)

平面プランが隅丸方形の土坑。いずれも長片が東西に長く、SK五八は掘立柱建物跡SB二二の、SK五九はSB九一の南側に平行し

て検出されている。SD四・五やSD八五・二一などと直交する向きになる。出土土師器は少ないが、それぞれに耳皿が出土している。また、報告書ではSK五九で青磁雷文碗(V―II類)の出土も明らかにされている。未報告資料では、SK五八で白磁E群皿の高台部小片、SK五九で青花C群碗の破片(写真)が確認できた。このことからいずれも瀬戸六期(一五世紀末から一六世紀前半頃)の遺構と推定する。耳皿は体部に強いナデ痕跡が線状として残っており、SD九九の坏B_fに見られるナデに類似するように看取される。

●SD一八六(図二七・二八)

調査区二区で検出された溝遺構で、九〇度の屈曲を伴う溝である。出土土師器は、坏B_fが九点、胴部が張る坏A五点等が確認されている。輸入陶磁器では、端反青磁碗・雷文青磁碗・文様型打ちの雷文青磁碗も二点報告されている。未報告資料の確認中、SD一八六から出土した備前焼鉢と青磁細線連弁文碗の破片を確認している(写真)。この備前焼鉢は、口縁部が直立化しつつ「く」の字に内傾しつつある段階のものと考えられ、乗岡実氏の編年では、中世五b期に該当するものと考えられる(図二九)。乗岡編年では中世五b期を一五世紀末としている。この年代は、瀬戸六期に該当する青磁細線連弁文碗破片と矛盾はない。SD一八六は、一五世紀末頃の廃絶と推定しておく。なお、SD一八六の坏A_h群は薄手で灰黄色に近いものが多い。また、図二八―No.二四は、やや器高が高いが、器壁に荒れがあり、見込みがフラットであり、坏B_rである。



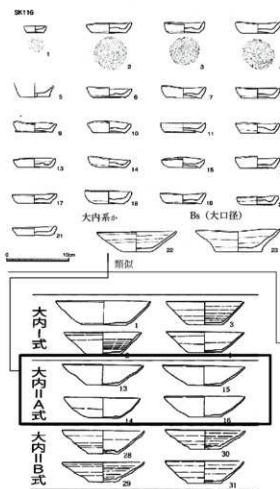


図 23 大内IIA式土師器
北島 2010 上 9

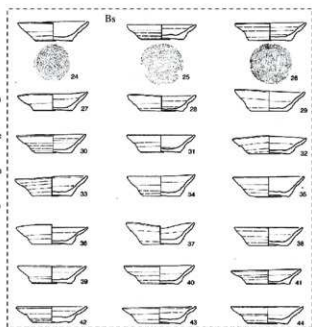


図 22 SK116出土土師器

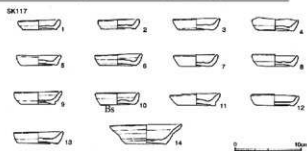


図 24 SK117出土土師器

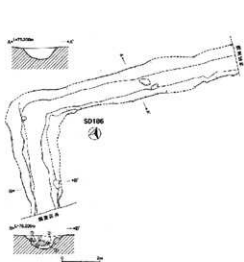


図 27 SD186 遺構図

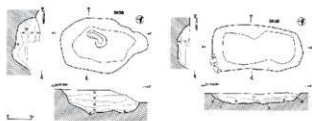


図 25 SK58、SK59 遺構図



図 26 SK58、SK59 出土土師器・共伴遺物

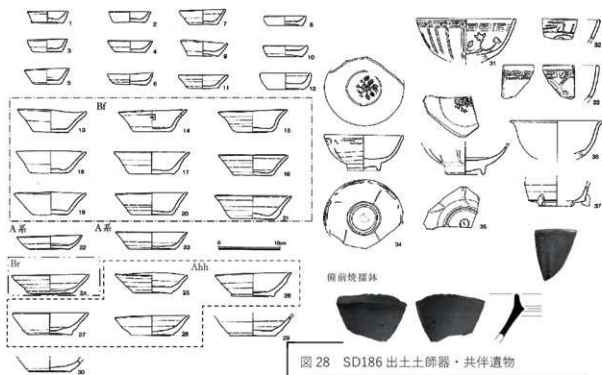


図 28 SD186 出土土師器・共伴遺物

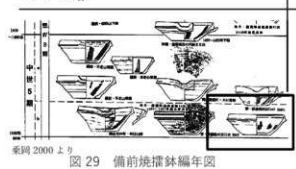


図 29 備前焼播鉢編年図

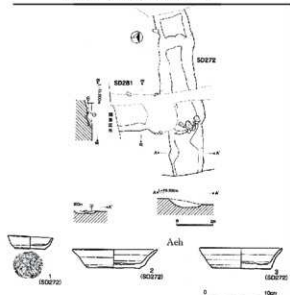


図 31 SD272 遺構図／出土土師器・共伴遺物

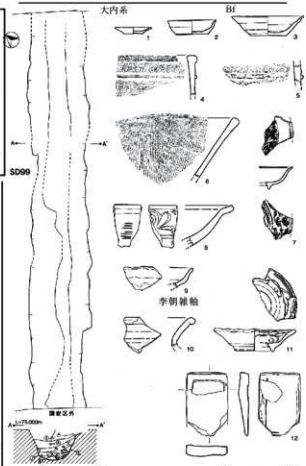


図 30 SD99 遺構図／出土土師器・共伴遺物

●SD九九(図三〇)

調査区二区を東西に貫く大型の溝遺構。報告書では、一区を南北に走るS D四・五と接続すると確認されており、屋敷地を区画する大溝と考えられている。

まず輸入陶磁器は青磁盤や朝鮮半島系雑陶器、石硯等とともに、端反の青花B一群皿、青磁VI類とされる腰折椀花皿が出土している。遺構の廃絶は瀬戸六期(一五世紀末から一六世紀前半頃)と推定される。未報告資料はこれより古い年代の破片が多い。また、この溝からは前稿で報告した茶臼が出土している。

出土土師器は少ないが、一点確認されている坏は、橙色系で外面に強いナデがある。体部は直線的に立ち上がる。見込みは盛り上がりかほとんどないが、中央部は渦巻状の回転痕跡がある。器高が低い、坏B fに位置付けておきたい。なお、薄手で体部が開き、器高がきわめて低い小皿No.一は、類例の少ない白色系の胎土で、大内系など搬入品の可能性が高い。大内III B式に実測図が類似する小皿が確認できる(北島二〇一〇)。大内III B式は一五世紀末に位置付けられており、矛盾がない。

●SD二七二(図三一)

二区の北西に南北に走る溝で、延長は約7m。南側をSD九九に切られており、また中央部をSK一六二に切られる。SD九九は、SD四・五と並んで、屋敷地の基盤となる区画の大型溝であるので、かなり長期間使用されていたはずである。とすれば、SD二七二は隈府土井ノ外遺跡の中でも、初期に位置付けられる遺構の可能性が高い。出土した坏二点は、坏Aのバリエーションとして坏A e、hと位置付

けたが、二点の法量が、それぞれ二二・八cm・八、一cm・三、〇cm、一二・五cm・八、八cm・三、三cmである。大きさからは中世前期に近いサイズで、また唯一共存する輸入陶磁器が、華南系の青磁で兜巾状の高台の破片であり、いわゆる同安窯系青磁の可能性が高い。これらの状況からはSD二七二の土師器は一四世紀以前に位置付けられる可能性がある。

(四)土師器編年の設定

ここまで見てきた溝と土器だまりの共存遺物年代から、土師器編年を図三二のとおり設定した。重ねて言うが、年代設定に用いた資料の限界から、あくまで暫定的なもので、今後、新資料の増加と共に、全く様相が変容する可能性も十分にある。

基本的には、一四世紀代および一六世紀代の確実な遺構が確認できなかつたため、ほぼ一五世紀代中での変遷と捉えた。

在来系土師器である坏A類は、類似する器形が散見される大友氏館跡のA系統土器を参考にすべきだが、長直信氏が「二四・一五世紀の坏Aの形態は極めて多様性に富み、「A期中頃と後半の土器群の時期区分については、改めて検討が必要」と指摘している(長二〇一五)。隈府土井ノ外遺跡の坏A類でも、連続性などの把握に至らなかつたため、本稿では坏B類を主体として設定した。

未報告資料も含めて、土師器の破片は大多数を閲覧したが、手づくね生産による、いわゆる「京都系土師器」は見いだせなかつた。これは、隈府土井ノ外遺跡では、大内氏や大友氏が京都系土師器を導入した時期に該当する一五〇〇年以降の確実な遺構が無いこと、あるいは菊池氏が京都系土師器の導入に積極的でなかつたこと、などの

理由が考えられるが、あくまで想像の範疇である。輸入陶磁器には一六世紀代の遺物がいくらか確認できたとは言え、当該期の遺構の存在が全く不明であり、また一六世紀代に設定できる土師器の形式が見出せなかったことは、主殿・会所の機能が別の空間に移転したことを想起させる。一六世紀に入ると、文亀元年（一五〇一）の菊池能運の島原亡命から、阿蘇武経や大友重治らの相次ぐ家督継承など変転する中で、豪奢な青磁唐物のデイスブレイや饗宴による多量の土師器消費などで股脈を極めた隈府土井ノ外遺跡も、政治中枢としての機能を喪失した可能性がある。

三 文献史料からみる土師器使用

（一）武家儀礼・饗宴と土師器

土師器の皿や坏は、戦国期の武家儀礼に主に用いられていたことが、さまざまな故実書から明らかである（脇田一九九七）。全国の守護居館遺跡、もしくはそれに準ずる遺跡でよく見られる土師器の大量出土、とりわけ一括廃棄遺構の存在は、この故実書の内容を裏付けている。居館の主殿で催される君臣の身分確認儀礼「式三献」から、それに続く会所での饗応・酒宴に至るまで、一連の儀礼にあつては、酒の器としても有の皿としても、主に土師器皿坏が使用されており（図三三三）、その使用実態は、特に朝倉氏や三好氏などの大名屋敷への將軍御成時に詳細が記録されており、把握することが可能である（堀二〇一三）。守護居館は、幕府の御所空間をモデルとして、建物配置や機能を寄せた造りになっており、また、そこで行われる儀礼・

行事もセットで模倣、ハード・ソフトひっくり返るめて空間ごと導入を図っているケースが多い。これにより武家棟梁の権威を自地域に重ね、領国経営を正当化する依り代としたのである。

破損や汚れの付着などにより役割を終えた土師器は、居館内もしくはその周辺の土坑などにまとめて廃棄され、これが土器だまりとして発掘調査により検出されることになる。

このような場において、土師器が盛んに用いられた背景として、かつては「一度きりの使用で処分し、清浄さを強調した」と考えられてきたが（藤原一九九七）、酒がしみた時に交換する給仕作法や肴を載せる際に「かいしき（掻敷）」を敷いて載せることが「酌并記」等に記されていることから、中井淳史氏はある程度の回数を使用したうえで廃棄された可能性が高いことを指摘している（中井二〇一一）。このため、可能な限りは繰り返し使用がなされたものとも認められる。とはいえ、日常の飲食器を担った漆器、中国陶磁器や瀬戸美濃系陶器等の什器に比べれば、その寿命は著しく短く、せいぜい数回の利用で汚損し、その都度、新しく補充されたものと考えられる。

先にいささか触れたが、將軍家の御座所があつた京洛では、京都系土師器と呼ばれる手づくね土師器が出土するが、一六世紀頃になると大内氏館跡や大友氏館跡でもこれを模倣した非ロクロ成形の土師器が導入されており、室町幕府に近い関係にあつた両氏が將軍家に由来する武家儀礼を自家でも実践することで、幕府の権威に接近したものと評価されている。京都系土師器の生産・消費の開始時期は、両遺跡の土師器編年から、大内氏では一五一〇年前後、大友氏では一五三〇年頃と想定され、二〇年ほどのタイムラグを以て大内氏が

先行していると考えられている(長二〇一八)。法量の細分化と共に、式三献などの儀礼を少しでも將軍家のスタイルに寄せ、その權威を再生産しようとしたものと捉えられる。

式三献に関する文献史料を確認した小野貴史氏は、大内氏に關して、大内政弘が伊勢貞藤から作法を教示された「御成次第故実」、永正六年(一五〇九)に、大内義興がやはり伊勢氏から礼法故実の指南を受けた「大内問答」の存在を挙げる。また、大友氏に關しては、同じく永正六年に大館氏から伝えられた「殿中年中行事」と大永三年(一五二四)に小笠原光清から伝えられた「小笠原光清秘聞書条々」の入手を例示する(小野二〇〇一)。概ね一五世紀末から一六世紀前第一四半期におさまり、なお、大内氏が大夫氏より先行する流れは、両氏の京都系土師器の導入と大きく齟齬は無いように思われる。

これに対して、限府土井ノ外遺跡では、今回確認した限りでは、京都系土師器の出土は確認できず、出土土師器のほぼすべてが回転台土師器で占められていた。ここまで見てきたように、土井ノ外遺跡では一六世紀の遺構は皆無であるので、京都系土師器の導入前に居館が終焉を迎えた可能性が示唆されるが、菊池氏側からの足利幕府に対する距離感についても視野に入れ、今後、検討を重ねなければならぬ。

(二) 絵巻に表現された土師器

次に、中世に描かれた絵画資料から、土師器使用の様子について確認しておきたい。

図三四は、『前九年合戦絵巻』(写本)の酒宴場面である。絵巻自体は一世紀中葉の陸奥守源頼義と安倍氏との合戦を描いたもので、

絵巻の成立は一三世紀末頃とされている。「將軍」と記される頼義を中心に、子息義家や大宅光房、藤原景通など主従が車座になって飲食に興じている場面を描くが、正面感で確認できる頼義・義家・光任らの膳を見ると、食器・酒器共に土師器皿が利用されており、また箸置も土師器皿と思われる。頼義の膳は、肴と箸が足付の膳、酒の膳は足の無いものとなっている。義家の膳は足付だが、膳はひとつのみしか配置されていない。光任もまた単膳で、こちらは足の無い膳のみである。ここからは、主従のヒエラルキーが膳の数と足の有無で表現されており、飲食器がいずれも土師器であることが理解できる。頼義の対面には、酒容器を持った小姓が控えている。

この絵巻の姿は一世紀の姿というよりも、一三世紀末の食膳状況を適用させた可能性も十分に考えられる。

図三五は『幕婦絵詞』(写本)に見られる食事及び調理の風景。『幕婦絵詞』は、西本願寺三世の覚如上人の伝記を絵巻としたもので、室町時代初期にあたる正平六年・観応二年(一三五二)の作とされる。僧の前に置かれた二膳はそれぞれ足付の大小があり、奥側の膳には料理が盛られ、箸置の上に箸が置かれる。土師器皿には大中小の法量差が確認できる。手前の膳は土師器が二点配される。いずれも、膳の器は土師器のみで構成されている。対面する客人の膳は全景が窺えないものの、やはり土師器が確認できる。台所から従僧が対面の間へ、足付折敷を運んでおり、その膳には肴が盛られた土師器が三点載る。台所では四名の僧侶が調理に励んでいる模様を描かれ、料理を盛る鉢・大皿類は、黒色と緑色のものが確認できるので、これは青磁と漆器なのであろう。液体を入れる壺類も青磁である。調理している僧たちの奥には、配膳済の折敷類が三セット用意さ

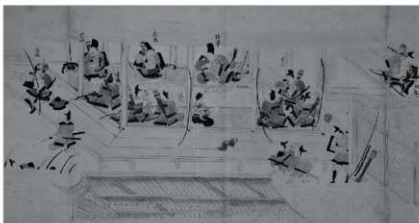
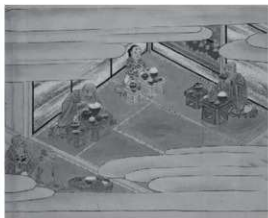


図 34 『前九年絵巻』の飲食風景



図 35 『慕婦絵詞』の飲食風景



2 飯好きの人々



1 青花皿



4 飯・酒両方を嗜む人々



3 酒好きの人々

図 36 『酒飯論絵巻』の飲食風景

れており、いずれも土師器に盛られている。箸の中央にはやはり土師器小皿を使った箸置が置かれている。周囲には重ねられた土師器類が乱雑に積まれ、一つ一つの皿に料理をよそっている最中であることが理解できる。武家ではなく寺院の様子であるが、やはり食器の主体を土師器類が担っていることが理解できる表現である。

図三六の各絵は、それぞれ『酒飯論絵巻』に描かれた飲食の様子である。下戸で飯好きの僧、酒好きの公家、両方を嗜む武家の三者が対比されて描かれ、三者の主張が、実際は仏教宗派のあり方をなぞらえたものと考えられている（三瓶二〇〇八）。成立は一六世紀中葉とされており、それ以前の絵巻で描かれることの少なかった中国青花皿の表現が確認できることから（図三六一）、一五世紀後半以降の青花の普及という時代背景と整合している点が興味深い。

三者の膳に使用された飲食物もそれぞれに対比的で、図三六一二の「飯好きの人々」は、それぞれに足付折敷二膳を前にし、いずれも赤漆の食器に飯・肴が山盛り盛られた描写になっている。これに対し、図三六一三の「酒好きの人々」は、赤ら顔で醗酩の只中という様相だが、食器類は質素で、足付もしくは平置の折敷に、それぞれ土師器一皿分のつまみが載っているだけの状況である。左手の武家は、明らかに食べ物の土師器より二回りほど大きな土師器大盃で、酒をあおっている。座には青磁香炉が置かれ、部屋の棚には、青磁の花生鉢が調度品として飾っている。図三六一四の「酒・飯両方を嗜む人々」は、各々の前に三つの膳が配され、やや低めの四方足付の折敷二膳と平置折敷一膳の組み合わせになっている。料理・食器とも多彩で、赤漆の汁椀と青磁の皿類が主に用いられている。座の中央には、おそらく酒器である土師器が一点のみ置かれ、柄付の酒容器を手にした侍

女が気を配っている。奥の棚には、軸物と青磁の花生が飾られる。

『前九年合戦絵巻』『幕婦絵詞』では、膳に使用された飲食物がすべて土師器であるのに対し、『酒飯論絵巻』では、食器類のバリエーションが豊富で、漆器・磁器類の使用もわかる。これらは時代による差もあるだろうが、それ以上に、中世では空間のあり方や違いによって、飲食物の使い分けが行われていたことを示唆しているものと捉える方が的確であろう。

（三）式三献・酒宴の内実

室町時代の武家儀礼は、まず主殿での式三献から始まり、その後、会所に場所を替え、夜を徹して酒宴を行うというのが通例であったようだ。酔いが回ると、まさに『酒飯論絵巻』に描かれた「酒好きの人々」のような饗宴が展開されていたのであろう。

將軍の御成の栄に浴した大名たちは、こぞって豪奢なもてなしを競い、永祿三年（一五六〇）に足利義輝を迎えた三好義長は十七献、永祿十一年（一五六八）に足利義昭を迎えた朝倉義景も同じく十七献、明応九年（一五〇〇）に足利義植を山口に迎えた大内義興に至っては「明応九年三月五日將軍御成雑掌注文」から二十五献以上の肴と酒を供した記録が残っている（江後二〇二二）。単に飲食を重ねるだけでなく、合間合間には、双方からの進物の応酬、御馬御覧、能の観劇等が催されていた。かような様々な趣向を実施するに恥ずかしくない舞台装置が、守護館であったと言えよう。

さて、ここでは永祿十一年に、石見の益田藤兼・元祥親子が、毛利元就を饗応した「益田藤兼・同元祥安芸吉田一献手組注文」（東大史編二〇〇三）から饗応の内容について見てみよう。藤兼は、元就

との関係強化を図るため、次子次郎の元服に際し、元就から一文字拝領を受け「元祥」と名乗らせた。そして貴重な品々の献上と祝宴の主権を行ったのである。この祝宴に関する料理の献立が当該文書に記録されている。

宴の最初は「御引渡」と記されている。これは具体的な料理内容が述べられていないが、式三献のことであろう。「宗五大神紙」では式三献の膳内容を図指する中で、「此うちあわはびをひきわたりと云」と述べている(堀二〇一三)。武家の式三献では、「敵に打ち勝ち、喜ぶ」の語呂合わせから、「打飽」「勝栗」「昆布」を並べることが通例で、「梅干し」「海月」に替わる場合もあった(二木一九九九)。「宗五大神紙」の図では、白かわらけ三点、へそかわらけ二点、大中二点、みみかわらけ(耳皿)一点が並べられており、初献だけで八点の土師器が利用されている(図三三)。

郡山饗宴では、次に、「御湯漬」として、鹽引・覆面鯛・貝鮑・酒浸(さかひて)・香の物・はむ(はんべん)・蒲鉾が出されている。同年の朝倉邸への義昭御成の場合は、式三献後に、会所へ移動して、三膳ほど飲食をしてから湯漬に至っており、饗宴により膳の順序や献数には差があった。

湯漬二献目は鮓・雉・螺貝・汁(集煮・鳥賊・鮭)。三献目は鯉子(かどのこ)・海鼠腸(このわた)・汁(羹かわうそ)・海月が供されている。その後、箸休めも兼ねたのであろう、御菓子七種が出されている(内容是不明)。再び膳に戻り、「御肴」として、小串・雉煮・削り物(鮑などを小さく削った物)が記されている。二献目として「むしむき」に白鳥を添えたものが出され、三献目はさしくらげ・鯛こうるか(子鯉鱈?)であった。四献目は鳥の足・籠羹・刺身、五献目は塩ひき・

雉・鳥賊、六献目は草片・饅頭、「はるも」と続く。終いにはん(はんべん)・鮎・からすみが七献目として出され、献立が終わっている。地方領主が大名を饗応した例のためか、膳の数かすると将軍御成に比べ控えめではあるが、それにしても海から遠い吉田郡山城にあって、あらゆる山海の珍味を手を尽くして準備したことが読み取れる。石見益田から運んだ物も多くあったのであろう。

益田元兼の饗応で興味深い点は、準備物を記したものの記録が残っていることで、特に「御かわらけの物三せん」という文言が注目値する。一回の饗応に三千点の土師器が用意されていた事実を物語るこの記述は、居館遺跡における大量の土師器出土に対し、一定の裏付けを与えてくれるものであろう。ここに記した肴の合計は四十四種を数えるが、御引渡の肴数は明記されておらず、また酒の盃も相当数が必要としたであろうことは想像に難くない。四十四にこれらを適当に加え、ひとりあたり七〇枚の土師器を使用したと仮定すると、三千枚の土師器で四〇名ほどがまかなえる計算になる。少なくとも一五・二六世紀頃においては、廃棄土師器の数量と、その空間における武家儀礼の頻度は比例するものと考えて大過はないと思われる。

(四) 耳皿について

すでに少し触れたが、式三献や饗宴における膳の配置法について言及した各種の故実書、例えば「奉公覚悟之事」「宗五大神紙」(堀二〇二三)や『山内料理書』(倉林一九八五)等において、箸置は「みみかわらけ」と記されている。「みみかわらけ」は無論、「耳皿」のことであり、土師器の小皿の両端を折り曲げ、箸置として妥当な形状にあつた土師器である。大内氏館跡、大友氏館跡、いずれの

土師器編年にも組み込まれていることが、編年図からわかるので（北島二〇一〇・長二〇一八）、守護館であったことが確実な両遺跡から一定量出土していることが理解されよう。熊本県内では山都町浜の館跡の出土遺物に耳皿を一点確認している（未報告）。浜の館跡は戦国期の阿蘇大宮司居館跡である。

限府土井ノ外遺跡の出土例としては、管見の限り、先述のSK五八・五九の二点のみであった。全ての土師器破片を確認できたわけではないものの、未報告資料も含め、大部分は通覧したので、仮に見え資料に耳皿が含まれているにせよ、劇的に数が増えるものではない。このことから、耳皿は極めて出土数の少ない希少器種と推測される。これについては『山内料理書』の次の記述が参考になる。

一 はし台はみしかわらけをく事大名さまの外あるへからず。みかわらけのうへに紙かいしきのやうにかみををく。

箸台としての「みみかわらけ」は大名以外には使用してはならない、とのしきたりがあったようである。『山内料理書』は明和六年（一四九六年）にはすでに成立しており、料理内容を相伝した山内三郎左衛門尉は管領斯波氏の家中にあったことから、幕府中枢で適用されていたしきたりとみて問題ない。考古学では「無いことの証明」は非常に困難であるが、限府土井ノ外遺跡での、全体の土師器出土量（おそらく破片数としては一万点前後）における、二点という出土例の少なさは、必ずしも大名とは限らないが、耳皿が貴人向けにのみ限定されて供されていた可能性と矛盾しないものと言える。

それぞれ一点ずつ耳皿が出土したSK五八・五九は、いずれも主要

建物（SB二・同九一）に南接する圓丸方形の土坑で、規格性が高く建物に付随する遺構とみられる（図七）。共存遺物は、すでに述べたように少なく、わずかに青磁雷文碗の破片（報告書掲載）、青花C群皿・白磁E群皿の小破片（未報告）がある程度である。式三獻に類する献盃儀礼もしくは饗宴の膳において、貴人が使用した箸置が廃棄されたものの可能性があり、土師器資料の中でも注目に値する資料である。

ただし、肥前では、島原半島の有馬氏の居城であった日野江城跡で大量の土師器皿・坏の報告の中に約四〇点もの耳皿が見られ、またまった量の耳皿出土が確認されている（南島原市二〇一一）。この事例からは、耳皿の貴人向け限定が絶対的なもの、とは断言できない。地域差や時期差により、その価値感は大大きく異なっていたのかもしれない。

おわりに

本稿ではまず限府土井ノ外遺跡から出土した輸入陶磁器の破片点数のカウントと分類から、遺跡の存続時期について言及した。日常に利用された碗皿類の出土数から、精緻な陶磁器編年が設定されつつある沖繩編年にあてはめて、遺跡の存続年代を再検討した結果、調査報告書で示された一四世紀後半～一五世紀前半という遺跡の年代観に大きく修正をすることとなり、一四世紀後半～一六世紀後半まで継続していたこと、中でも遺跡としてのピークは一五世紀中葉から後半にあったことを示した。

次に、大量に出土した土師器について、器形から個別分類を設定し、そのうち環B群の形態変化を追うことで、主に一五世紀代の土師器の変遷を提示した。不十分な面も多いが、これまで全く提示されることのなかった熊本県下での中世後期の土師器編年に一定の道筋を示すことができた。

また、出土した土師器類の用途について、故実書や絵巻の事例などを引用し、式三献や会所での宴会に利用されたものである可能性を示した。特に益田元兼と毛利元就の饗宴で、多数の料理が供され、その際に土師器皿三千枚が発注されていることに着目し、地方大名のひとつの饗宴においてどの程度の土師器が利用されたかの裏付けと考えた。また、箸置としての耳皿の希少性にも言及し、SK五八・五九における耳皿の出土と関連付けた。

土師器の大量出土は、必ずしも、儀礼的空間にのみ限られたものではなく、各地の都市遺跡や小領主の城館などでも散見されるものである。しかし、限府土井ノ外遺跡に関しては、前提として、全国的に見ても相当の優品たる青磁唐物を備えた空間が一区周辺に存在したことが重要で、このような会所や主殿と思われる建物が配置されていた空間構成の中において、多数の土師器の消費があった点は、まず式三献や宴会の痕跡と見てよいのではないだろうか。輸入陶磁器の出土状況から、限府土井ノ外遺跡を会所等が存在した空間とみなした点については、前稿(中山二〇二A)を参照されたい。

前稿と本稿により、概ね限府土井ノ外遺跡について出土遺物を通じた究明は、一定の役割を果たせたと思っている。しかし、発掘調査の限定的な範囲から、居館跡の全体像、とりわけ各建物遺構の性格やその他遺構の配置状況、土塁・堀等で区画された居館範囲等はいずれ

に包まれたままである。今後、遺構面からも限府土井ノ外遺跡の研究が進むことを期待したい。また、さらに広範に、中世守護都市「限府」の各地において、発掘調査の成果による新知見を得て、よりクリアに中世守護都市「限府」像が構築されることも切望するものである。

註

- 一 IV類、IV類・VⅠ類の青磁碗は、いずれも体部無文の端反タイプであり、口縁部の形状で同定を行う。このうち、IV類は口縁端部が尖り気味で薄軸で、VⅠ類は玉縁状の端部で軸層も厚くなると特徴が捉えられている。ただし、実際に小破片で見ると、その判断に迷うものも多くあり、このため、判断に迷ったものはIVⅠVⅠ類の範疇で同定不可、として表に反映した。

挿図・表出典

- 挿図一 右＝筆者作成 左＝open street map を使用
- 図一 熊本県教育委員会二〇〇九
- 図二 長二〇一・A
- 図三 長二〇一・B
- 図四 長二〇一・五
- 図五 長二〇一・八
- 図六～九 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図一〇 沖繩県立理蔵文化財センター二〇〇一
- 図一・二 熊本県教育委員会二〇〇九
- 図三 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図四 熊本県教育委員会二〇〇九
- 図五 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図六～八 熊本県教育委員会二〇〇九
- 図九～三 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図三三 北島二〇一〇の実測図を元に筆者作成
- 図四・四・二五 熊本県教育委員会二〇〇九
- 図二六 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図二七 熊本県教育委員会二〇〇九
- 図二八 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図二九 乗岡二〇〇〇の実測図を元に筆者作成
- 図三〇・三二 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図三三 筆者作成
- 図三三 場二〇一・三
- 図三四 国立国会図書館デジタルコレクション『前九年絵巻物』巻一
<https://dl.ndl.go.jp/informdjp/pdf/25735317?ocOpen=1>

図三五 国立国会図書館デジタルコレクション『葛婦繪々詞』巻一
<https://dl.ndl.go.jp/informdjp/pdf/25908497?ocOpen=1>

図三六 国立国会図書館デジタルコレクション『酒飯論』
<https://dl.ndl.go.jp/informdjp/pdf/2512602>

表一・三 筆者作成

引用・参考文献

- 青木勝士二九六「肥後菊池氏の守護町「隈府」の成立」『熊本史学』七二・七三合
 号号 熊本史学会
- 青木勝士三〇二〇「菊池氏の拠点 北宮・隈府」九州の中世Ⅱ 武士の拠点 鎌倉・
 室町時代」高志書院
- 五十川雄也二〇一九「大内館と大友館」『室町戦国日本の覇者 大内氏の世界をさ
 ぐる』勉誠出版
- 江後迪子二〇二二「大内氏遺跡での宴料理等「歴食」再現と地域性」「歴史的脈絡に
 因む遺跡の活用―儀式・行事の再現と地域間交流の再構築― 令和二年度 遺
 跡整備・活用研究会」奈良文化財研究所
- 大分県教育委員会二〇一五「大友氏館跡」
 沖繩県教育委員会一九九八「首里城跡―京の内跡発掘調査報告書（I）―」
 沖繩県立理蔵文化財センター二〇〇五「首里城跡―二階殿地区発掘調査報告書―」
 小野貴史二〇〇一「大友氏における「式三献」について」『大分・大友土器研究会論集』
 大分・大友土器研究会
- 小野正敏一九九七「戦国城下町の考古学」講談社
- 小野正敏二〇〇三「威信財としての貿易陶磁と場―戦国期東国を例に―」『戦国時
 代の考古学』高志書院
- 小野正敏・五味文彦・萩原三雄編二〇〇八「考古学と中世史研究Ⅴ 室の中世―場・

かわらけ・権力」高志書院

鹿児島県維新史料編さん所一九七九「鹿児島県史料 旧記雑録前編二」鹿児島県

亀井明徳編二〇〇二「現代前半陶磁器の研究」首里城京の内SKO「出土品」

鹿児島市教育委員会二〇〇二「中世菊池一族関連遺跡群確認調査概要報告書『菊之城跡』

跡」守山城跡及び内裏屋」「限府城下遺跡」

北島大輔二〇〇二「IX章 大内式の設定―中世山口における遺物編年の細分と再編―

「大内氏跡跡XI」山口市教育委員会

北島大輔二〇一九「大内氏の宴―その器と配膳方法―」室町戦国日本の覇者 大内氏の世界をさぐる」勉誠出版

熊本県教育委員会二〇〇九「熊本県文化財調査報告第二四八集 限府土井ノ外遺跡―熊本県立美術館二〇一九「日本遺産認定記念 菊池川二千年の歴史 菊池一族の戦いと信仰」菊池川二千年の歴史展実行委員会

熊本市教育委員会二〇一四「二本木遺跡群三」

楠瀬慶太二〇〇七A「土師器食膳具から見た中世博多の土器様相―博多遺跡群の土師器編年―」九州考古学」第八二号 九州考古学会

楠瀬慶太二〇〇七B「戦国期島津氏における酒食饗応儀礼―式三献とかわらけ―」比較社会文化研究」第三二号 九州大学大学院比較社会文化研究科

久米島町教育委員会二〇〇八「宇江城跡発掘調査報告書一」

倉林政次一九八五「日本料理秘伝集成 第一八巻 日本料理の起源 食物・食事雑編」同朋舎出版

三瓶はるみ二〇〇八「日中の酒にまつわる論争について―「酒飯論」を中心に―」大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書」お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」事務局

柴田圭子二〇一一「第一章 今婦仁城跡出土明代青花瓷の研究」今婦仁城跡発掘調査報告V」今婦仁村教育委員会

鈴木康之二〇〇二「中世土器の象徴性―「かりそめ」の器としてのかわらけ―」日本考古学」第一四号

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

調査報告V」今婦仁村教育委員会

鈴木康之二〇〇二「中世土器の象徴性―「かりそめ」の器としてのかわらけ―」日本考古学」第一四号

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

沖繩県立埋蔵文化財センター

大友土器研究会

坪根伸也二〇〇八「大友館の変遷と府内周辺の方形館」『戦国大名大友氏と豊後府内』高志書院

東京帝国大学史料編纂部一九一七「大日本古文書 家わけ五ノ一 相良家文書之二」東京帝国大学

東京大学史料編纂所二〇〇三「大日本古文書 益田家文書之二」東京大学出版会

中井淳史二〇一一「日本中世土器の研究」中央公論美術出版

中井淳史二〇一二「中世かわらけ物語 もっとも身近な日用品の考古学」吉川弘文館
長堂綾・島弘二〇一四「渡地村跡の概要と青磁集中部」『第三五回日本貿易陶磁研究会発表要旨・資料集 琉球列島の貿易陶磁』日本貿易陶磁研究会

中山圭二〇一九「熊本県南部の様相―沿岸部を中心に―」『第四〇回日本貿易陶磁研究会発表要旨・資料集』日本貿易陶磁研究会

中山圭二〇二二A「菊池氏関連遺跡「隈府土井ノ外遺跡」の輸入陶磁器に関する研究」『菊池一族解體新章』巻ノ二 菊池市教育委員会・菊池文化研究所

中山圭二〇二二B「菊池氏関連遺跡「隈府土井ノ外遺跡」の貿易陶磁器」『第四一回日本貿易陶磁研究会発表資料集』最近の話題の遺跡・注目される研究から』日本貿易陶磁研究会

那覇市教育委員会二〇一二「渡地村跡」並木誠士二〇一七「日本絵画の転換点 酒飯論絵巻―「絵巻」の時代から「風俗画」への時代へ』昭和堂

二木謙二一九九九「中世武家の作法」吉川弘文館

栗岡実二〇〇〇「備前」『全国シボジウム 中世窯業の諸相と生産技術の展開と編年』資料集「全国シボジウム」中世窯業の諸相と生産技術の展開と編年、資料集

実行委員会

塙保己二二〇二三『群書類従第三二輯 武家部』八木書店

藤原良章一九九七「中世の食器・考（かわらけ）ノート」『全集 日本の食文化 第九巻 台所・食器・食卓』雄山閣出版

南島原市教育委員会二〇一一「日野江城跡総集編一」美濃口雅朗一九九四「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究』X 日本中世土器研究会

吉岡康暢・門上秀敏二〇一一「琉球出土陶磁社会史研究」真陶社

脇田晴子一九九七「文献からみた中世の土器と食事」『国立歴史民俗博物館研究報告』第七一集 国立歴史民俗博物館

墓石類からみた江戸時代における菊池氏の顕彰

野村俊之・美濃口雅朗

はじめに

菊池市内には、南北朝期に活躍した菊池氏当主のものをはじめ、菊池氏に関わる墓石・供養塔・顕彰碑が各所に点在し、その数は県内他地域に比べて多い。南朝の忠臣たる菊池氏の本貫・本拠地であるから当然のことともいえるが、筆者の管見によれば、本市のように中世、特に南北朝期の領主層・武将のそれがこれほどに多いことは稀である。

本稿は、その「多さ・稀さ」の実態について、考古学的手法を用いながら九州内の関連資料との比較をもとに相対化し、明らかにすることを目的とする。なかでも注目したいのは一五代武光碑など、江戸時代後期に造立された亀趺碑・墓である。これは温厚という亀形の基礎を持つ石碑であるが、熊本県内では、現代作を除き本市だけに存在しており、菊池氏関連資料の特徴を如実に示すものといえる。その形態的特徴や造立の経緯について、文献資料にも拠りながら探りたいと思う。

なお、本稿で扱う石造資料（表1～3に列記した資料、本文中で触れた九州の資料）¹は、いずれも筆者が踏査・実見したものであるが、中世領主層・武将の墓、特に旧鹿児島藩領内については遺漏も多いことをお断りしておく。

一、中世領主・武将の墓石類としての菊池氏資料

本章では、中世九州における領主・武将といわれる人物に関わる墓石類（個々資料について墓石・供養塔・碑等の性格の弁別は難しく、これらを総称する場合「墓石類」と仮称する）を概観し、そのうえで菊池氏関連資料の位置づけを行なう。なお、個々資料の観察は第1表に譲る。

a. 中世領主・武将の墓石類の現状

歴史上、中世領主・武将といわれる人物は数多いが、全国的に見てその対象者個人が特定できる（伝承を含め）墓石類は多くない。その大きな理由は、中世から近世（江戸時代）への転換期において在地領主層の墓・墓所が荒廃したためであり、その経緯については以下二点が挙げられる。

中世においては、墓石・供養塔の造立は作善こそが目的であり、通常、これを維持管理し続けるという意識は希薄であった。江戸時代を経た現代人が持つ墓（墓石）に先祖が宿するという招魂復魂の意識は、江戸時代に普及した儒教の影響であり、中世人には乏しかったものと考えられる。このことは、中世の墓石類が多く、近世城郭の石垣築石・裏込めに、また寺社の建築材等に転用された事例が示している。前者は福知山城・大和郡山城、後者は根来寺がその代表といえる（中

近世（江戸時代）への転換期において、在地領主層が没落、あるいは幕藩体制に取り込まれ被官化するなかで、本質地・本拠地から遊離した（白石一九九三）。

こうした経緯を経て、江戸時代においては、一般層では寺檀制度の確立により地域に形成された墓地の保持が明確となる。藩主家や上級武士層については、墓域・墓石類の形態や規模が他とは隔絶した墓所が形成されるようになる。これは、墓所が当主や家の權威・継承を視覚化する装置となり、また、墓前での宗教儀礼が主催者の正統性を裏付ける行為として位置づけられたためと考えられる（野村・美濃口二〇一三）。

中世領主・武將の墓石類が不明な場合が多い理由について、今ひとつ挙げておく。近代における神仏分離令により寺院が荒廃するなど仏塔形式の墓石類が粗略に扱われたこと、その後の戦災復興に伴う都市部開発により寺社が縮小、移転するなどして散逸あるいは消滅したなどが指摘できよう。

b. 九州における中世領主・武將の墓石類

前節を踏まえ、九州における中世領主・武將の墓石類を概観する。仮に関が原の戦い（一六〇〇年）以前に没した人物のものを扱うこととする。前述のように筆者が踏査・実見した資料をもとにするが、熊本県外については遺漏が多いことをあらためてお断りしておく。

墓石類の遺立時期・場所は、それぞれの背景を反映して極めて多様であるが、江戸時代以降に供養・顕彰され、維持管理されてきた形跡が見られるものが殆どを占めている。概ね、以下の類型に分けることができる。

江戸時代における新規遺立

まず、指摘できるのは、江戸時代において新規に遺立された墓石類が多いことである。戦国期の領主・武將のものが目立ち、その経緯から三大別できる。

近世大名や交代寄合へと継続する家の先祖（藩祖・家祖など）のものが、後に藩主家の墓所や菩提寺、あるいは緑の地に遺立される事例で、数も多い。以下、その代表例を列記する（第1図1-12）。

- 福岡藩：藩祖黒田孝高（如水）祖父の小寺重隆塔（享和二年一八〇二造）、○柳川藩：初代立花宗茂父の高橋紹雲塔（江戸時代前期の型式）、○同義父の戸次道雪塔（延宝二年一六七四造か）、○三池藩：藩祖立花直次父の高橋紹雲塔（寛政元年一七八九造か）、○佐賀藩：藩祖鍋島直茂父の清房塔（一七世紀中頃の型式）、○平戸藩・松浦二代義（江戸時代後期の型式）、○同三代弘定（江戸時代後期の型式）の墓石類²⁰、○岡藩：初代中川秀成父の清秀・兄の秀政通拜塔（ともに一七世紀前半の型式）、○飫肥藩：伊東六代祐国・七代尹祐塔（ともに江戸時代後期の型式）、○交代寄合米良領・米良初代重次（嘉永四年一八五二銘）・同二代重種（江戸時代後期の型式）、○同四代重鑑（江戸時代末の型式）の墓石類、○人吉藩：下相良一八代義陽塔（標柱形、延宝七年一六七九銘）

小寺重隆塔は居城の姫路市御着城跡にあるが、福岡藩が主体となって遺立していることから扱った（福岡市二〇一一）。型式・石材とも筑前型の有角五輪塔を採っている（野村・美濃口二〇一九）。

江戸時代に大名家に仕官した家、あるいは戦国期から江戸時代への転換期において武家としては没落するものの、その後、旧領内に留まり惣庄屋・大庄屋など富農層として存続した家のものである。熊本

県内の事例を紹介する(第1図13・16)。

○和水町:由布大炊助墓石類(江戸時代後期の型式)、○山鹿市:内古閑重房墓石類(江戸時代中後期の型式)、○高森町:高森惟直塔(一八世紀の型式)、○熊本市:内田頼勝墓石類(一七世紀の型式)、内古閑基貞塔(一八世紀の型式)、城親賢(江戸時代後期の型式)、鹿子木寂心墓石類(弘化四年—一八四七路)、○天草市:木山彈正塔(江戸時代後期の型式)

由布大炊助は立花宗茂に従い肥後国衆一揆にて戦死したが、子孫は柳川藩重臣として存続している。なお、その墓石類は民間信仰の対象となっている。内古閑氏については、肥後国衆一揆後、子孫が母方の麻生姓を名乗り、正院手永の総庄屋を務めている(原口一九八二)。同手永には内古閑鎖資塔(没年から大過無い型式)もある。形態において注目されるのは高森惟直塔で、一八世紀代に肥前地方で製作した有角五輪塔を高森町含蔵寺にまで搬入したものである。子孫の高森家は高森手永の惣庄屋で、その支流は当地の豪商として栄えており(圭室一九九五)、肥前産有角五輪塔の選択は、惣庄屋としての権威、経済的威勢を示したものと見える。

今一つは、戦国期から江戸時代への転換期において没落し、後に家系は存続するものの、子孫が領内に留まらなかった家のもので、下記二名の資料を確認したに過ぎない。ともに著名な大名である(第2図17・18)。

○大分県:大友宗麟二基(ともに津久見市)、○熊本県:小西行長二基(山鹿市・熊本市)

大友宗麟の墓石類には、寛政期に遣臣の子孫が造立した笠付方柱塔と、昭和五年(一九七七)に地元顕彰会が同所に造立したキリスト

教墓石がある。小西行長の墓石類には、遣臣やキリスト教信者がその居住地に造立したと伝わるもの(一七世紀の型式)と、遣臣の子孫と伝わる家が造立した笠塔婆(昭和二十八年—一九五三路)とがある。

地生え大名家による中世墓石類の整備

地生え大名家が、領内各地にあった先祖の中世墓石類を菩提寺に集めて整備するものである(第2図19・20)。佐賀藩高伝寺・鹿児島藩福昌寺跡・人吉藩願成寺墓所に見られ、個々の没年と大過無い型式の石塔を、新たに形成した墓域に配置している。高伝寺墓所においては、かつての主君龍造寺家のものを集めており、これは廃藩置県があった明治四年(一八七二)、藩主鍋島直大が行なった事業である。福昌寺跡・願成寺墓所については、ともに藩主家に繋がる系譜の島津宗家・下相良家のものであり、後者は、三代相良頼高が、元禄年間頃、藩主家の権威高揚を図って墓所を整備した事業の一環と捉えることができる。

江戸時代における中世墓石類の供養・顕彰

中世の型式(個々の没年と大過無い型式、あるいは没年から時間を経過しているものの中世期に収まる型式の墓石類)であっても、江戸時代以降に供養・顕彰行為の形跡が認められるものである。灯籠を奉獻する、顕彰碑を造立する、囲繞施設・大形基壇・覆屋などの設えを造作するなど、多くの事例があり、その経緯から三大別できる。

江戸時代に大名家・上級武士として存続した家のものである(第2図21・24)。鹿児島県においては、管見の他にも多数の事例があり、これは鹿児島藩が中世以来の在地領主による土地支配(外城制度)

を継続したためと考えられる。

○福岡藩：小寺職隆塔（天正一三年—一五八五没頃の型式）、○鹿兒島藩：始良市豊州島津初代季久塔（文明九年—一四七七没頃の型式）、同六代朝久塔（文禄二年—一五九三没頃の型式）、出水市薩州島津初代用久七代忠辰塔（長禄三年—一四五九没〱慶長二年か—一五九七没頃の型式）、同忠兼塔（永禄八年—一五六五没頃の型式）、鹿兒島市川田義朗塔（文禄二年—一五九三没頃の型式）

小寺職隆塔について補記しておく。福岡藩祖黒田如水の父で、二百年忌にあたる天明四年（一七八四）、居城の姫路市功山城近くにおいて福岡藩が整備している（福岡市二〇一一）。覆屋も設えられ、灯籠・石柵は肉眼観察によれば石材は糸島花崗閃緑岩で、灯籠は竿に大きく傷を刻しており、その特徴は、福岡藩主家墓所において通用されるものに共通する。

武家としては没落したが、領内において惣庄屋として存続した家のもの、子孫が神官として存続した家のものである。熊本県の事例を紹介する（第2図25・26）。

○熊本市：内古閑鎮資塔（元龜二年—一五七二没頃の型式）、○山都町：阿蘇惟種塔（天正一二年—一五八四没頃の型式）

阿蘇惟種塔については、石柵の記銘が注目される。「村役人世話人／氏子中」として名字の無い四人の名前が連記されており、地元の人村が造ったことが判る。江戸時代以降、領民の階層や居住地が固定化され時間が経過するなかで、彼らの郷土意識が高まり、かつての「おらが村の殿様」・「緑の殿様」を供養・顕彰する行為があり、本例はこれを如実に示すものと捉えたい。

中世において没落し、かつ、その子孫が領内に留まらなかった氏族

のもので、数は僅かである（第2図27・28）。

○大分県：大分市長宗我部信親塔（天正一四年—一五八六没頃の型式）、○熊本県：山鹿市宇野親治塔（一四世紀の型式）

長宗我部信親塔は、戦死地近く（戸次川の戦い）にあり、四国地方には見られるものの、管見の限り当該地に類例を見ない摩尼輪塔であることが注目される。江戸時代以降の供養・顕彰の形跡としては、大形の自然石を積んだ塚状の基壇、鉄製鳥居、明治二年銘・四百年忌など二基の慰霊碑がある。宇野親治塔には近現代に設えた石柵が見られる。長宗我部氏は大坂の陣後、信親弟の盛親の家系が存続したとされ、宇野氏は隈部氏の祖で、隈部氏は肥後国衆一揆後に傍流が存続したとされるが、いずれも領内には留まっていない。信親は著名な悲運の武将として、親治は山鹿温泉を発見したとの伝承から温泉（地域振興）の祖として、地元民が主体となった「造作」と考えられる。

江戸時代における墓石類の想定・見立て

中世石塔を中世領主・武將のそれと想定、あるいは見立てて供養対象とするものである。以下、熊本県における代表例を挙げる（第2図29・30）。

多良木町蓮花寺跡には一五世紀中頃に没落する上相良氏の五輪塔群があり、二六代の地輪背面には俗名・没年銘が認められる。俗名であること、彫り方に竹彫りが見られることから江戸時代以降の追刻と考えられる。うち、四代経頼（延文三年—一三五八没か）・五代頼仲（応永七年—一四〇〇没か）・六代頼忠（正長元年—一四二八没か）塔は、それぞれの没年より半世紀以上先行する型式であり、逆修塔の可能性を含め、本来、彼らを対象としたものとは

言い難い。時代を経、その正否も判らなくなった江戸時代に、改めて供養するうえで追刻されたと考えられる。

八代市奉勝跡跡には、細川忠興の供養による織田信長塔がある。後家合せではあるが、一四世紀代の在地型式の大形五輪塔で、その地輪に「織田將軍／去遊四十九才／天正十年六月三日／□四十八」二寛永十八年六月三日／細川參議敬建」の追刻がある。中世五輪塔を信長の供養塔と見立てたもので、茶人忠興らしい仕業といえる。

以上、現存する中世領主・武將の墓石類は戦国期のものが圧倒的に多い。また、地生え大名家が先祖のそれを墓所にまとめて整備したものの他、新規に造立したものの、中世の墓石類をそれと想定・見立てたもの、奉獻灯籠や石柵などの付帯施設を造作したものと、江戸時代以降に供養・顕彰の対象となった資料が多く、それ故、現在にいたるまで維持管理されてきたといえる。

c. 菊池氏の墓石類

前節を踏まえ、菊池氏の墓石類について位置づけを行なう。中世期に没落し、かつ、江戸時代以降に子孫と伝わる家は存続するものの領内には留まらなかつた氏族としては、その数が多いことが特徴である。ちなみに、子孫として著名な家には、二三代能運からの系譜と伝わる米良家・石坂家がある。

以下、前節の類型に倣い、主な事例を紹介する。

江戸時代以降における新規造立

本項では、墓石類に加え、個人を祭神とする神社、廟とされる神社を取上げる。

顕著な事例として、まず挙げられるのは亀跌碑・墓である。中世領主・武將に対してこれが用いられるのは九州では菊池氏においてのみであり、大きな特徴といえる。一三代武重・一五代武光・一七代武朝・二三代政隆の碑・墓があり、菊池市内、それぞれの縁の地に点在する。詳細は次章に譲るが、ここでは、何故、位階制において高位を表徴する亀跌形態が、彼らの碑・墓に選択されたのかについて触れておく。武光は、懐良親王を奉じて九州における南朝勢力の最盛期を築き、百戦百勝の将と称えられたことから、楠木正成碑をもつて、安永九年（一七八〇）、菊池氏としては最初に亀跌碑をもつて顕彰された。その後、武重・政隆・武朝の順で造られ、武重は後醍醐天皇に近侍し肥後守護に任じられたこと、政隆は本家の系譜としては最後の当主であったこと、武朝は南朝退勢期にあつて託麻原の戦いに勝利し、南北朝合一後に改めて肥後国守護に任じられたことなどが理由として考えられる。

初代則隆・二〇代為邦については、有角五輪塔が選択されている（第3図31・32）。有角五輪塔は火輪の軒端が角状に伸びる、通常よりも派手な形状の異形五輪塔で、則隆塔は文化一五年（一一八八）の造立、為邦塔は一八世紀中葉・後半の型式である。ともに肥前地方で発生・隆盛した型式の系譜上にある在地産塔であるが、肥後においては江戸時代中期以降、有角五輪塔は衰退し現存数も少ない（野村・美濃口二〇一九）。その当時にあつて、通常の五輪塔ではなく、あえてこれを選択したのは、より荘厳化された形態をもつて顕彰する意図があつたためと考えられる。なお、則隆塔は渋江公正「菊池風土記」（今坂一九九六）³において居館とされた菊池市「菊之城」推定地に、為邦塔は菊池市玉祥寺墓の分墓とされ、隠居して禪の語録

「碧巖録」を学んだとされる同市碧巖寺にある。

一七代武朝については、亀跌碑のほか、菊池本城北西の防衛拠点とされる菊池市碑方城跡に方柱形の小形墓石（笠消石）がある（第3図33）。大正七年（一九一八）に城北村大字碑方の地元民が造立したものである。二三代政隆についても、菊池市安国寺の亀跌墓と同じ石柵区画内にも一つ墓石（小形の笠塔婆形）がある（第3図34）。一八世紀前半の型式で、主銘に戒名が刻される仏式塔である。江戸時代における菊池氏への供養・顕彰が武光碑造立前から行なわれていたことを示す事例といえる。

一二代武時については、彼を祭神とする天保二年（一八三二）創建の福岡市菊池神社（胴塚）、昭和七年（一九三二）創建の同市菊池霊社（首塚）がある（第3図35）。両社とも葬地とされ、神体として自然石の墓石が置かれている。その他、武時が再興した熊本県山鹿市日輪寺に供養塔（大形五輪塔）がある（第3図36）。一九世紀代の型式で、記銘には「肥後守武時入道」と俗名が刻まれている。武時を祀る神社や供養塔が三箇所（合祀された隈府菊池神社を含めれば四箇所）もあるのは、鎮西探題襲撃にみる忠誠や袖ヶ浦の別れのドラマ、楠木正成による賞賛などが、これらの創建・造立当時、彼をして南朝忠臣の象徴とされたためと考えられる。

江戸時代以降における中世墓石類の供養・顕彰

菊池市玉祥寺には、二〇代為邦・二二代重朝の菊鹿型宝篋印塔二基がある（第3図37、41）。塔身に段形を有し、当該地域を主分布域とする型式で（前川一九九五）、為邦（長享二年—一四八八）・重朝（明応二年—一四九三）の没年と大過無い時期の造立と考えられ

る。二基は同一の石柵区画にあり、この石柵には「天明七年丁未仲春日」「石工荒木治兵衛」の銘がある。天明七年（一七八七）は為邦三百年忌法要が執り行われた年である。「宗伝次日記」（嶋屋日記）収録、花岡一九八七）の安永九年（一七八〇）記事には、武光亀跌碑が完成し、その石工が「玉祥寺村次平」とあり、「石工荒木治兵衛」銘はこれと同一人物の可能性が高いとみられる。さらに、菊池氏家紋「並び鷹の羽」を陽刻した灯籠一对には「宗氏・二岡山氏」の奉獻者銘があり、これらは隈府町衆の宗伝次・岡山仙助とみられる。これらの墓所整備は三百年忌を期しての事業と捉えられる。

一八代兼朝・一九代持朝、一族の赤星有隆・城武岑の石塔は、球心宝篋印塔といわれる形態で（石田一九六九）、小異はあるものの塔身が球形、基礎に蓮華座を持つことがその特徴である（第3図42、第4図46）。九州においては鹿児島霧島神社の二例が知られており、管見の限り、熊本県内では明確なものは菊池市域にのみ認められる。兼朝塔については後家合せともみられるが、四基とも中世期の造立と考えられる。江戸時代以降の付帯施設としては、兼朝塔には石柵・灯籠・水盤（灯籠・水盤は明治二八年—一八九五銘）、持朝塔には石柵・供台（供台は「皇紀二千五百九十五年」—一九三五銘）、赤星城塔（同一区画内）には石柵（「文政七甲申春」—一八二四銘）が見られる。

江戸時代における墓石類の想定・見立て

菊池市正観寺には、一六代武政（文中三年—一三七四没）・武澄（正平二年—一三五七没）・武国（一四世紀後半没か）の菊鹿型宝篋印塔がある（第4図47、50）。いずれも後家合せで、それぞれの没年から時間が経過した一五・一六世紀の型式である。武政塔・武国塔の塔

身には江戸時代以降の俗名追刻がある。武政塔は、天明年間、正観寺の「卵塔場」で多くの石塔群のなかから発見されたという（後藤一九二六・今坂一九九六）。当時、何故それを武政のものとして認識し得たのかは不明であるが、恐らくはこの時、改めて供養するうえで俗名を追刻し、また、字形が共通することから、武国塔についても同時期に追刻したと考えられる。なお、武政・武澄・武国塔とも、それぞれに石塀が設えられている。江戸時代後期以降の造作である。

二二代能運塔は、正観寺実相院跡にある後家合せの大形五輪塔二基が並ぶもので、記銘が無いため、どちらが能運塔かは不明である（第4図51・54）。いずれにせよ空風輪・火輪については没年（永正元年一五〇四）と大過無い型式ではあるものの、後家合せであることから、後世にそれと想定し見立てたことは明らかといえる。想定する時期は、寛政六年（一七九四）刊の『菊池風土記』では所在不明としているので、それ以降、圍繞する石塀銘「安政四年（一八五七）丁巳十月建／菊池公祭連中／世話人水田長左衛門」、塔前の顕彰碑銘「安政四年五月」から、それ以前のことと考えられる。なお、「見聞録」（『鶴屋日記』収録、花岡一九八七）によれば、安政四年は、能運の法要が執り行なわれており、石塀や碑の設えは、これを期しての事業と考えられる。

神社を廟とする事例

二代経隆については、菊池市若宮神社の社殿が廟と伝わる（第4図55・57）。中世領主の廟としては、西南戦争により焼失した下相良初代長頼の金堂が知られるが、熊本県内では他には本例のみである。社殿脇に文化八年（一八一）銘の渋江公正撰文による顕彰碑があり、

これには「惟菊池二代藤原経隆公之墳塋也邑人尊崇之厚○奉祭祈豐登穫疫疾當水旱災禍變奉齊……」と記されている。この碑文で注目されるのは、儒者公正が顕彰する以前から、地元民において菊池氏が民間信仰の対象となっていたことである。

その他の供養・顕彰

前項までに指摘した他にも、供養・顕彰の形跡が認められる事例がある。奉獻灯籠・顕彰碑などに注目する（第4図58・62）。

奉獻灯籠には、初代則隆塔前（文政八年一八二五銘一対）、二代武光塔前（天明八年一七八八銘一対）、三代政隆墓前（嘉永四年一八五一銘）がある。三代武重の墓域には、ともに地元民による明治三十七年銘（一九〇四）と昭和四〇年造（一九六五）の顕彰碑二基がある。前者は、將軍木や歴代墓の整備など菊池氏の顕彰に努めた片岡家善が、初代則隆の下向八三五年（と伝わる）を期して建てたものである。正観寺実相院跡の二二代能運塔脇には二代武時・一四代武士・一七代武朝の三名を対象とした明治二十七年銘（一八九四）の「遥拝所」碑がある。その他、初代則隆をはじめ、武重・武光・武政・兼朝・持朝・能運・政隆などの墓石類の前には、「明治二十七年」（一八九四）、「菊池社前白石有志：周旋人片岡家善」、「明治六年」（一九〇三）、「菊池文化顕彰會」銘の標柱が建てられていることを挙げておく。

以上、菊池氏の墓石類については、江戸時代後期から近現代に至るまで、地元民による供養・顕彰を示す石造物が多いことが、他地域とは異なる特徴といえる。

二、菊池氏の亀趺碑・墓

菊池氏の亀趺碑・墓を相対化するうえで、まずは九州の状況を概観する。原則、江戸時代の亀趺碑・墓・塔を扱い、個々資料の観察は第2表に譲る。なお、名称「碑」・「墓」・「塔」の弁別は、現物に刻された題字(篆額・主銘など)に従っている。これらを総称する場合、本稿では「亀趺碑類」と仮称する。

a. 亀趺碑とは

既往研究の成果をもとに概述する(平勢一九九三・二〇〇四)。亀趺碑は中国に起源を持ち、韓半島でも盛んに用いられてきたもので、日本では江戸時代に発生する。碑の基礎(趺)を晶屑とするのが特徴で、晶屑とは龍の子とされ(龍生九子)、形状は亀蛇で、重きを支えることを好むとされる霊獣である。

亀趺は、形態により文字通りの亀首と、一般に耳・牙を持ち頸を明確にもたげる獸首とがあり、後者は新羅後期から高麗期の韓半島、江戸時代以降の日本に見られる。尾部は主に蛇尾形と養尾形があり、表現されないものもある。碑石には原則篆額を伴い、碑身とは画された碑首を持つものも多く見られる。

本来は、墓前に設けられる官位三品(唐代では五品)以上の被葬者の事績を伝えるもので、墓石それ自体ではない。墓前ではなく墓道に設置されたものを特に神道碑と呼ぶ。いずれにせよ墓所にあつては、被葬者を顕彰する附属施設としてみるべきものである。

中国を起源とする儒式の施設であり、儒教の葬制において形状や

あり方が規定されるが、一方、仏教においては水天や妙見菩薩等の乗騎として亀趺が用いられることがある。

日本における亀趺碑の嚆矢は、とくに正保四年(一六四七)銘の山口重信碑・永井月旦碑が大名家のものとして最古例とされ、碑文はとくに林羅山の撰である(藤井一九九二・三好二〇一一)。大名家の亀趺碑においては林家が関わる事例が多くみられる。

b. 九州における亀趺類の概観

亀趺碑類出現前の資料

まずは、亀趺は持たないものの、その出現前における関連事例二基を紹介しておく(第5図63・64)。ともに大名藩主家当主の碑文を伴う大形墓石で、没後間もない時期の造立と考えられる。

福岡市崇福寺の福岡藩祖黒田如水墓石(慶長九年一六〇四没)は、碑文を伴う形態の墓石としては九州最古の事例である。碑文の撰者景轍玄蘇は、宗家に仕え、文祿の役からその後の己酉約条など朝鮮外交において活躍し、朝鮮王朝から銅印を授けられたという禅僧で(長一九八五)、本例は韓半島の文化に精通した彼の知見・指導による造立と考えられる。

寛文七年(一六六七)没の小倉藩初代小笠原忠真墓石は、忠真開基による臨済宗黄檗派(以下「黄檗宗」)の北九州市福聚寺にあり、篆額と弧状(竹管半裁形)の笠がつく点が注目される。この弧状の笠は、碑身頭部の形状(円首)に合わせたもので、同形態は、後述する九州の事例のほか、永井月旦碑・榎川伊勢寺碑など関西の亀趺碑(三好二〇一一)に類例が見られる。

これら二例は、九州における亀趺出現前から、葬制において朝鮮

半島を含め大陸文化の影響があったことを示すものといえよう。

亀趺碑類の形態

九州の亀趺碑類における造立の目的・性格は様々である。以下、列記する。

○藩主家・上級武士層の事績顕彰碑、○墓石（黄檗宗寺院にあるなど）、○儒教的要素の強い碑（聖堂記念、儒者の事績顕彰など）、○仏教的要素の強い碑・塔（開山僧の事績顕彰、寺堂創建や中興の記念、法華経等の説読成就記念、一字一石經理納に伴う地上標微など）、○墾田事業の記念碑、○奉獻灯籠・水盤

形状は個体差が著しいものの、藩主家・上級武士層の碑については総じて大形かつ丁寧なつくりで、篆額・双龍の表現を伴うなど亀趺碑本来の形態を踏まえており、その権威を象徴している（第5図65、第6図82・84など）。

その他、以下の傾向が認められる。亀趺については、長崎県五島市毘盧蔵閣碑・佐賀県武雄市焼山の墾田碑（頭部が碑身の側面を向く）（第5図78、第6図80）を除き、頭部の向きは全て碑身・塔身正面と同方向である。頭頸は獸首が殆どで、頸部の形状から龜首としたものでも鹿兒島県始良市鳳山軒碑（第5図69）の他は全て耳や牙等を表現している。尾部は鹿兒島県資料に数例の蛇尾が認められる他、全て鬚尾である。碑首については、碑身との区画が不明瞭なもの、碑首が無いものが殆どであるが、鹿兒島県始良市においては、碑首を明確に画し、棺を吊り降ろす際に繩を通すためとされる方孔（方穿）を伴う資料が多い（第5図65・68）。同市能仁寺跡加治木島津家墓所には、亀趺は伴わないものの、塔身に同様の方孔を穿つ墓石（鳴

呼び女道之墓」銘など）が見られることを付記しておく。

最後に異形例を紹介する。唐津藩大久保初代忠職碑・佐賀鹿島支藩二代鍋島直條碑で、ともに立方形の基礎に晶貫・波濤を刻むものである（第5図70・73）。晶貫の造形は立体物ではないものの、碑文・篆額等を伴うこと、前述のように関西の事例に共通する弧状（竹管半裁形）の笠がつくことから亀趺碑と捉えられる。

亀趺碑類の時期

寛文一二年（一六七二）銘の唐津藩大久保初代忠職碑が初現で、造立者の二代忠朝が後に転封されたことから、この地を領した功績を碑として留める意図による造立とみられる。江戸時代の年記銘を持つものでは、天保一〇年（一八三九）の鹿兒島藩八代島津重豪碑・武雄市焼山の墾田碑が最新で、概ね一八世紀前半に増加する傾向が認められ、一九世紀の作例も多い。

亀趺碑類の分布と要因

九州における亀趺碑類の分布には、明らかな偏在性が認められる。佐賀県・長崎県（肥前）と鹿兒島県（薩摩・大隅西部）に多く、福岡県・大分県・熊本県には少数が存在し、宮崎県には認められない。以下、多く存在する県について、その要因を通へる。

佐賀県・長崎県については、長崎貿易を通じた中国文化の浸透、葬制の導入があったためと考えられる（第5図72・第6図81）。佐賀鹿島支藩二代鍋島直條碑がある普明寺、小城支藩六代直員墓墓石がある玉毫寺が黄檗宗寺院であることが顕著な事例であり、両寺には黄檗形式の「寿塔」墓石が見られる。これに加え、京都万福寺回廊

に掲示されている各県の黄檗寺院を見ると、佐賀県二一箇寺・長崎県七箇寺と九州では肥前地方に多く、「¹」、これらが長崎街道沿いに分布する傾向があることから、黄檗宗の教線拡大のなかで、寺院に限らず中国文化総体が地域に浸透したためと考えられる。造立の目的、性格が藩主家に関わるものだけでなく、聖堂記念、寺堂記念、寺院中興記念、経塔、墾田事業記念、水盤の奉獻など、他地域に比べて多岐に及ぶことは、その表れといえよう。浄土宗の長崎市大音寺伝上人碑の造立年銘に「大清乾隆四十一年」と中国年号が用いられていること、諫早市市杵島神社の水盤における亀趺の顔の造形、特に頸部に髭の表現があることなど、中国からの直接的な情報が看取される事例も認められる。

鹿児島県については、鹿児島藩が江戸時代初期より財政難解消のため琉球を通じて中国・朝鮮などアジア諸国と行なってきた琉球口貿易が要因と考えられる（第6図82、86）。特に、好奇心旺盛な知識人であった八代重豪が対外交渉の実用書といえる南部方言の中国語辞書を編纂するなど積極的に開化政策を推進したことはよく知られている²。こうした藩が主体となった、中国からの文物だけではない文化・情報の導入は、亀趺においてはさつま町の宮之城島津家四代久通碑における甲羅の骨状帯や手足の水かき表現において看取されるという（松原二〇一八）。この他にも、本藩八代重豪亀趺碑の基台碑文（碑陰）において、藩儒五代秀堯が造立に際して北京と福州の進士に問い合わせ、「爲石碑図様以其制」、すなわち亀趺の図面を取り寄せ、その位階制度や形態を学んだと記されていること、その成果が特に碑首における形状や双龍・瑞雲の浮彫りに反映されていることは特筆できよう。

鹿児島県における中国文化の影響は亀趺碑類だけではない。円柱に龍・瑞雲を象した龍柱は、直接的には琉球から導入された可能性もあるものの、これを良く表すものである。全国に見ても本県には多く、建築物としては著名な霧島神社や鹿児島神宮の社殿柱例をはじめ一五例があるという（橋口二〇一二）。ここでは、墓所等に見られる石造龍柱を取り上げることとする（第6図87・88）。好例は霧島市金剛寺跡にある。明治一四年（一八一）銘の西南戦争「慰霊燈」ではあるが、亀趺の上に龍柱を立てており、二つの中国的要素が合一したものである。類例として、灯籠の竿石に龍柱形が用いられるものを下記に挙げる。

○霧島市金剛寺跡真心上人の入定石室前例、○鹿児島市福昌寺跡の本藩主家墓所にある二代光久世嗣綱久・五代継豊・六代宗信のそれぞれ墓前例、○日置市にある日置島津家菩提寺の大乗寺跡例、○伊佐市南方神社例（寛延元年一七四八銘）、○同市箱崎神社例（明和元年一七六四銘）³。

前三者に年記銘は無いが、没年は真心上人が元禄一二年（一六九八）、綱久が寛文一三年（一六七三）、継豊が宝暦一〇年（一七六〇）、宗信が寛延二年（一七四九）で、特に福昌寺例については墓石との位置や並立する他の年記銘を持つ灯籠との位置関係から、没年と大過無い時期の造立とみられる。一八世紀に増加する傾向は亀趺碑類と同じである。その他、灯籠竿石と同様の龍柱形の水盤が、日置市大乗寺跡の享保一二年（一七二七）造の島津歳久墓前に見られる。これは龍柱そのものではないが、その情報が灯籠・水盤に取り込まれ、鹿児島独自の中国的形態を発生させたものと捉えられる。また、鹿児島市磯菅原神社にある亀趺を伴う灯籠についても、上記と同様の

成因と考えられる（第6図89）。

碑文に見る儒者との関係性

碑文には儒者が撰じたものが多い。ここでは亀趺碑に加え藩主・上級武士層の事績碑や碑文を伴う墓石の撰者から、造立の背景を考えた（第3表、第6図90～94）。

江戸時代前期においては、林家（鷲峰・鳳岡）の撰が見られる。松原典明が指摘するように、対象者・造立者の個人的な思惟や林家との交流を示すものといえる（松原二〇一八）。九州では唐津市大久保忠職碑・鹿島市鍋島直隼碑・さつま町島津久通碑が挙げられる。

これに対し、江戸時代中期以降は藩儒の撰による例が多くなる（美濃口・野村二〇一七）。各藩が四書五経の教育に基づく藩校を創設するなど、藩士等の教育制度を整備するなかで、教授たる藩儒が碑の造立にも関わったため、一八世紀以降の事例が増加するのはそのためと考えられる。

c. 菊池氏の亀趺碑類について

菊池市内には、一三代武重・一五代武光・一七代武朝・二三代政隆の四基が存在する。本稿では原則、江戸時代の資料を対象としているが、形態比較のため、昭和三七年（一九六二）銘の武朝碑も扱うこととする。

前節を踏まえれば、菊池氏の亀趺碑類は、上級武士層としても中世（主に南北朝期）の領主を対象としたものであることが際立った特徴といえる。以下、安永九年（一七八〇）に造立され、菊池氏における亀趺碑類の嚆矢となった正観寺の武光碑を中心に述べる。

武光碑造立の契機

まずは、武光碑に亀趺が採用された、その範となった楠木正成碑について略記しておく。正成縁の広嚴寺の請願を受けた徳川光圀が、元禄五年（一六九二）、戦死地の湊川にて造立したもので、主銘「嗚呼忠臣楠木之墓」は光圀自身の揮毫による。光圀は明暦三年（一六五七）、『大日本史』編纂に着手しており、建碑はその思想を実践した事業と捉えられる。

武光碑造立の契機は、碑文に明記されている。以下、抜粋のう

え意識する。

「菊池氏則自寂阿公首死王事二子繼興能復君父之讎；宗族子弟無不同心協力以勤皇事；楠公歿後三百餘年常藩義公聞而慕之乃建碑於其所戰歿湊川；而菊池氏之墟則寥々莫聞焉正觀公之墳在于墟之西南禪寺院中歲年遼遠無佗表識墳上獨有一大梅樹耳邑人謚江氏父子痛之喟然嘆曰菊池氏忠烈如彼而使楠氏獨專其美乎謀之豪族宗氏宗氏奮曰是我罪也我先世皆事菊池氏而被恩舊矣乃捐財建碑」

楠木正成の亀趺碑が造立され顕彰されている一方、これに劣らない南朝の忠臣である菊池氏の墓は荒廢しており、武光においてすらただ墓標とされる一本の楠の大樹があるのみであった。在野の儒者洪江公豊父子はこれを嘆き、宗伝次に語った。素封家であり、先祖が菊池氏に仕えていた伝次は、その旧恩に報いるため財を投じて碑を建てることとした。

ここで、洪江公豊・公正親子と宗伝次について補足しておきたい。公豊は菊池文教の祖とされ、家塾「集玄亭」において郷党の子弟約三〇〇人を教導し、後年、その功をもって藩から士席浪人格を与え

られている。公正は藩校時習館教官達に学び、父の公豊の遺業を継ぐとともに、後年、菊池氏を顕彰する『菊池風土記』を著している。武光碑造立の際には、楠木正成碑の「寸法」に範を求めたという（山口一九四八、今坂一九九六）。一方、宗伝次は、在町隈府の町衆を努め、地域振興や慈善活動に積極的であっただけでなく、公豊に師事し儒教・俳諧に造詣が深かった（角田一九二八）。彼らは、当時の教養人として当然のことながら『神皇正統記』や『大日本史』に精通し、南朝正統論の信奉者であったであろう。ともに菊池氏の顕彰事業に務めており、公豊親子と伝次の親交が武光碑造立の契機となったことは明らかといえる。

武光碑における亀趺形態

亀趺の形状は個体差が著しく、通常、型式的特徴を見出しにくいのが、菊池氏の亀趺碑類四基については共通性が認められ、また、他とは画される特徴がある。それは、鬚尾が大きく、高く跳ね上がり、後方から見ると目立つ尾部下面に花弁状の鬚毛表現があることで、武光碑・武重墓のものは特に大きく、別石にて作られている（第7図97、102）。

こうした特徴の理由は以下の史料から想定される。「永代御用實録日記」（嶋屋日記）収録、花岡（一九八七）に、天明二年（一七八二）三月一日、武光碑の完成記念法要が正観寺にて執り行われたとあり、次いで造立の経緯についての記述がある。これによれば試行錯誤があつて制作には六・七年もの時間がかかったという。

「最初の亀首短く、恰好不宜候故、よこ町庄兵衛、下町市左衛門、右両人八代宮ノ地妙見社へ、至極能出来候亀首有之候よしにて、写二

参候処、夫ほとよろしく無候よしにて、引取居候処、國分寺之亀、石作之由、かの地にて承候故、國分寺之様ニ参、かの寺亀写取参、只今の亀ニ切直ス：諸雜用終始七十文銭三ペ目程」

当初の「亀首」が短かったため、八代妙見宮の「亀首」（亀蛇）を参考に写したが、あまり良くならなかったで、次いで國分寺にある石製の亀を写し、これをもとに「亀首」を刻み直したというのである。國分寺の「亀」といえば思い付くのは周防國分寺亀趺碑であるが、諸経費「七十文銭三ペ目」からみて遠方まで視察に行つたとは考えづらい。「國分寺」は肥後國分寺のことと思われるが、現地踏査したところ石製の亀は確認できなかった。そのため「亀首」の原型は不明と言わざるを得ないが、ここでは、妙見宮の亀蛇を見たことに注目したい。文化年間頃の作とみられる「八代妙見宮祭礼繪巻」（八代市立博物館二〇一一）の亀蛇を見ると、赤く大きな尾が描かれている（第7図109）。実際の祭礼ではこの尾が上下に振られ、より強調されることになる。このことについては、「年々鏡」（嶋屋日記）収録、花岡（一九八七）に、武光の四百年忌翌年の安永二年（一七七三）、志満屋市兵衛が妙見祭に参詣し「跡おさえ大亀通ル」のを見たという記述から、菊池の關係者は知っていたとみられる。以上を鑑みれば、武光亀趺碑の尾的特徴的な形状は、妙見祭亀蛇の大きい尾が跳ね上がった様子が反映された可能性が高いとみられるのである。

なお「最初の亀首短く、恰好不宜」の理由は、楠木正成碑の亀趺の形状に倣つたためと考えられる（第7図95・96）。正成碑は実見したところ、亀趺が短くもたげた亀首（耳・牙無し）、蛇尾、碑身が楕円方柱形（奥行きは正面幅に比べて短い）で、武光碑との共通点は碑身の正面観のみである（武光碑の碑身はほぼ正四角柱形）。「菊池

風土記」にあるように、当初は正成碑の「寸法」に範を求めたものの、上記のような試行錯誤の結果、異なった形状になったと考えられる。武光碑造立に際しての、関係者達のこだわりが伺われるといえよう。なお、この点については次項にて補記する。

武光碑の石材

武光碑の石材は、肉眼観察によればやや青味がかった砂岩である。これについては「宗 伝次日記」(『嶋屋日記』収録、花園一九八七)、安永九年(一七八〇)の記事を参照する。伝次の「大望」であった武光碑がようやく完成したとあり、その石材・石工についての記述が見られる。

「石出所、観音嶽也、右石出方之節ハ、正くわんし村より不残参ル、石工玉祥寺村次平と申者也」

近くの観音岳の石材を正観寺村の人々が総出で運んだというのである。菊池市東部の鋒ノ甲ノ兵戸峠の山地には砂岩・礫岩からなる観音岳層が存在しており(富田一九九二)、武光碑の石材はこの砂岩と考えられる。ここで疑問となるのは、何故観音岳砂岩を使用したかである。管見によれば、県北部における江戸時代一般層(所謂庶民)の墓石は、豊富に産出し、また比較的軟質で加工しやすい凝灰岩が殆どで、観音岳砂岩は認められない。武光碑がある正観寺近くの渋江家・阿部家墓地における江戸ノ明治時代(一七世紀末〜一九世紀)の墓石を肉眼観察したところ、当主・当主と同等規模の大形墓石は凝灰岩二基・安山岩八基、中小規模の墓石は凝灰岩三基・安山岩一七基・天草下浦砂岩一基であった。通常とは異なる安山岩が多く、これは俗名を記した墓石主銘に名字が見られることから判る

ように、渋江家・安部家が土席であることから安山岩使用に高階層性を顕示したためと考えられるが、いずれにせよ観音岳砂岩は認められなかった。以上から、武光碑の石材選択には明らかな意図があったと考えられる。

ここで注目したいのは、楠木正成碑の石材である。碑身に和泉青石といわれる和泉砂岩(亀跌は白川石といわれる花園岩)を使用しており(三好二〇一一)、前述した「寸法」だけではない、正成碑に関する様々な情報が「石工次平」等にあつて、武光碑の石材において、同質のやや青味がかった砂岩が選択されたと考えられる。

以上、武光碑造立に際しては、渋江公豊・公正親子と宗 伝次が発意し、碑身の正面観と石材については、楠木正成碑の情報が採用された。八代妙見宮の亀蛇の尾の形状が取り込まれ、本亀跌の特徴となつた。「亀首」については肥後国分寺の石製の亀の形状が写された(現存せず原型は不明)という経緯があつたと結論づけた。

武光碑の碑文撰者

碑文末には「熊府府學祭酒敷塾土厚謹撰」、「澁江公豊子錫謹書」、「宗 英益傳次謹建」とある。ここでは、撰者が藩校時習館二代館長・敷孤山であることに注目する。

孤山と在野の儒者公豊・公正親子とは深い親交あり、孤山に師事した公正が撰文を依頼している。孤山は、昔年のこととはいえ幕府(室町幕府)に叛した武光の建碑に関わることは憚れるものの、三人(公豊親子と伝次)の熱意に意気を感じ、これを請けたという(山口一九四八)。地元主導で造立してきた武光碑の撰文を自らではなく、孤山に依頼したことには、公豊親子の意図があり、それは藩校時習

館長が関わることで滔をつけるだけでなく、武光の顕彰を藩が認めた公的な事業として、建碑の意義を高らしめるものであったと考えられる。

武重・政隆・武朝の亀趺碑類への継承

造立年順は、武重墓は文化二三年（一八一六）（塚二〇〇七）、政隆墓は嘉永四年（一八五二）以前、武朝碑は昭和三七年銘（一九六二）である（第7図100～108）。政隆墓については、墓前の奉獻灯籠の年記銘から想定しているが不確実であることをお断りしておく。

いずれも安山岩製であるが、亀趺の形状については、前述のように武光碑を含め、蒼尾が大きく高く跳ね上がる、下面に花弁状の蒼毛表現があるという、菊池氏碑類の独自性が共通している。亀趺については他にも、首を直にもたげる獸首、頭部が短頭、目は丸く眉上隆起が前方に張り出す、口を閉じ牙がある、耳が大きく先端が尖る、甲羅の周縁が波打つといった共通点があり、特に、目と眉上隆起の形状は菊池氏の特徴といつて良い。碑身の形状も共通しており、方柱形、頭部桶形である。これら多くの共通点は、武光碑の形状が祖形となり、武重墓以降の造立に継承されたためと考えられる。

三、まとめ

中世領主・武將の墓石類は、特に中世期に没落した氏族については、その対象者個人が特定できるものは少ない。中世から近世（江戸時代）への転換期において、中世の在地領主層の墓・墓所が荒廃したた

め、また、近代以降における神仏分離令や戦災復興に伴う都市部開発により、多くが散逸、消滅したためと考えられる。

そのようななか、中世期に没落し、かつその後胤が領内から離れた氏族であるにも関わらず、菊池氏関連の墓石類は多く、それは江戸時代後期以降、現代にいたるまで彼らが南朝の忠臣として顕彰されてきたためといえる。特に、江戸時代、在町として経済的に発展し、渋江氏による儒教教育が普及した菊池地域においては、墓石類を新造、あるいは灯籠・石柵などの付帯施設を造作するなど地元主導による事業が多く見られることが注目される。

墓石類を新造した事例として特筆されるのは、一五代武光碑など四基の亀趺碑類である。佐賀・長崎県や鹿児島県に見られるような中国文化の浸透に起因するものではなく、あくまでも菊池氏を顕彰する意図で形態が選択、造立されたと考えられる。一五代武光碑は、儒者渋江公豊親子と町衆宗伝次により発意され、試行錯誤のなか、楠木正成碑に倣って石材には砂岩が選択され、八代妙見宮の亀蛇の形状が亀趺の尾の形状に取り入れられて、その特徴となったと考えられる。後に造立された一三代武重など三基の亀趺碑類においては武光碑の形状が踏襲されており、そのインパクトを表している。また、初代則隆塔などに、造立当時、肥後においては衰退していた有角五輪塔をあえて選択したことは、より荘厳化した塔形態を用いて菊池氏を顕彰しようとする意図によるものと考えられる。

最後に付記しておきたいのは、二代経隆について神社の社殿がその廟とされ、文化八年（一八一）銘の渋江公正碑石にあるように、豊作・病氣平癒・水旱防止の験があるとして地元民の信仰対象となっていたことである。同様のことは二三代政隆墓にも見られ、本文では触れ

なかったが、多くの転礫が供えられており、これは政隆が久米原の戦いのなかで自刃した際、最後は矢尽き石を投げて戦ったとの伝承から、石を供えると歯痛が治るといふ信仰によるものという。菊池氏への顕彰が民間信仰へと拡がっていった様を示す事例として注目しておきたい。

本稿を執筆する際には、下記の方々よりご教示・ご協力をお願いいただいた。文末に記し、深甚の謝意を申し上げます。

有川孝行・永井孝宏・高橋学・永見秀徳・橋口剛士・早瀬輝美・鷲崎有紀・見学をお許しいただいた各寺社（敬称略）

註

- (1) 各資料の年代は、型式を踏まえながら記銘から判断し、石材・形態も現地観察に基づく。その他、経緯や由来などの情報は、多くは自治体等が現地に設置した案内板を参照した。
- (2) 石塔とは呼びがたい自然石を用いた地上標徴についても、前記した「墓石類」と称することとする（以下同）。
- (3) 渋谷公正著「菊池風土記」については現代訳本「今坂一九九六」を参照した。
- (4) 九州における最多は福岡県筑後地方である。柳川藩主や三池藩主の立花家が黄葉宗に帰依したことが要因であろうが、藩主家・上級武士層の墓石類（黄葉形式）を除いて、その文化総体が広く浸透することはなかったと考えられる。
- (5) 鹿児島県明館舎画展「近世薩摩藩の対外交渉」による。
- (6) 橋口尚武によれば、鹿児島県には他数例があるという（橋口二〇二一）。
- (7) 湊川神社発行のパンフレット「大楠公墓所 嗚呼忠臣楠子之墓」を参照した（発行年未記載）。

- (8) 武光碑の碑文は風化しており、幸うじて文字が刻きれているのが判る程度である。碑文は以下の掲載を参照した（後藤一九二六・角田一九二八）。
- (9) 正成碑現地には、宝暦元年（一七五二）銘を最古として尼崎藩主等が奉獻した灯笼群がある。

参考文献

- 「石田茂作 一九六九『日本仏塔』 講談社
- 今坂正哉校訂 一九九六『寛政六年渋谷公正著菊池風土記』株式会社オース・コーポレーション
- 圭室文雄 一九九五「市井の郷土史家の手記（一）」『明治大文学 教養論集 通巻二七九号』明治大学
- 後藤是山編 一九一六『森本一瑞遺稿・水島貫之校補・佐佐豊水助補増補校訂肥後國志 卷之六』『肥後國誌（一九七一）』肥後國誌・上巻・青潮社復刊
- 白石太一郎 一九九三「奈良県宇陀地方の中世墓地」『国立歴史民俗博物館研究紀要 第四九集』国立歴史民俗博物館
- 角田政治 一九二八「贈從五位宗傳次」『肥後地歴史叢書刊行会 中世葬送墓制研究会 二〇一六』第六回中世葬送墓制研究会資料 石造物の転用と中世墓の終焉（二）
- 堤克彦 二〇〇七「菊池武重墓の改修」『郷土史譚（一〇）話菊池』熊本出版文化会
- 富田宰臣 一九九二「鐔ノ甲地域の古第三系」『日本の地質九州地方』共立出版
- 株式会社
- 長正統 一九八五「景轍玄蘇」『国史大辞典五』吉川弘文館
- 野村俊之・美濃口雅朗 二〇一三「九州大名墓調査の視点」『第五回 大名墓研究会 発表資料』大名墓研究会
- 野村俊之・美濃口雅朗 二〇一九「有角五輪塔考」近世九州における異型五輪塔の発生と展開」『論集葬送・墓・石塔』狭川真一さん還暦記念会

橋口尚武 二〇二二「南九州の「龍」」 有限会社鉄脈社

花園興輝編輯・校訂 一九八七『嶋屋日記』 菊池市史編纂委員会

原口長之 一九八一「細川氏の政治」『楠木町史』 楠木町

平勢隆郎 一九九三「日本近世の亀跌碑」中国および朝鮮半島の歴代亀跌碑との比較を通して」『東洋文化財研究所紀要第二一二冊』 東京大学東洋文化財研究所

平勢隆郎 二〇〇四「亀の碑と正統」 白帝社

福岡市 二〇二一「黒田家史料」『新修福岡市史資料編近世一領主と藩政』

藤井直正 一九九二「亀跌をもつ石碑の系譜(一)(二)」『大手前女子大学論集二六号』

大手前女子大学

前川清一 一九九五「宝篋印塔」『菊鹿の石造物』 菊鹿町教育委員会

松原典明 二〇一八「近世大名葬制の基礎的研究」 石造文化財調査研究所

美濃口雅朗・野村俊之 二〇一七「九州の大名墓における儒教の影響」『第九回大名墓研究会発表資料』 大名墓研究会ほか

三好義三 二〇二一「近畿地方所在の亀跌碑における和泉砂岩の利用について」『石造文化財三』 石造文化財調査研究所

八代市立博物館未来の森ミュージアム 二〇二二「八代の歴史と文化二」 大妙見祭展「華ひらく祭礼風流」

山口泰平 一九四八『肥後澁江氏傳家の文教』(一)(二)(三)(四)(五)(六)(七)(八)『肥後澁江氏傳家の文教』 菊池市教育委員会復刊

追記

脱稿後、三代武重墓所の絵葉書(菊池神社発行)を見つけ、購入した。キヤッシュンが右横書きで、また明治三十七年(一九〇四)銘の顕彰碑が写っていることから二〇世紀前半の発行とみられる(宛名面の形式は大正七年以降)。その他に菊池市正観寺武光墓・武政墓の同様の絵葉書もある。

当時、菊池氏の墓が名所として認識され、親しまれていたことを示す資料として紹介しておく。



菊池市正観寺
武光墓(右)

第1表 中世墓石類一覽

凡例：アミかけは江戸時代以降に造立されたもの。
 「江戸以降の付葬物」は供養・地証の形跡を明確に示すもので、以下のように略記している。
 灯籠→灯、水盤→水、供養・顕彰碑→碑・石櫛→櫛、低い石塚→塚、覆屋→覆
 ※女性は原則扱わないが、近世大名等の立派に大きく関わった人物は例外として取上げている（佐賀藩の豊原・日出藩の朝日局）。

所在地	被葬者・対象者	形態（形式）	石材	没年	形式名、没年	江戸以降の付葬物	備考	
福岡県								
宗像市	伝 平仙露	笠付方柱形	砂岩	13c-a	有、江戸前期	土塚・灯	伝落人、明治21年に崩壊・撤去	
宗像市	承福寺(臨濟)遠く 宗像氏直	円筒方柱	砂岩	天正14 (1586)	無	覆屋	四国に家臣宅（古形式）あり	
宗像市	宗生寺(曹洞) 小早川隆景	宝篋印塔(東西型)	花崗岩	慶長2 (1597)	無	無	供養塔、周辺に殉死者五輪塔等	
新宮町	御島寺(曹洞) 戸次(立花)重宝	宝篋印塔	安山岩	天正13 (1585)	無	灯	船輪・塔身欠	
福岡市	菊池神社	菊池12代武時 塚(墓塚) + 自然石	緑泥片岩	元弘3 (1333)	有、天保2年	神社	伝幕府、城武直造立、墓塚六角形	
福岡市	菊池墓	菊池12代武時 自然石(散状)	緑泥片岩	元弘3 (1333)	有、昭和7年	神社	伝幕府	
太宰府市	菅原城跡	高嶺墓	塚(墓塚)	花崗岩	天正14 (1586)	有、18c末	碑・灯	戦死地、墓塚周知組、碑は三池浦6代立花種国(忠臣蔵)建
筑紫野市	般若寺跡近く	高嶺墓	塚(墓塚)	花崗岩	天正14 (1586)	有、18c末	無	伝幕府、墓塚切込跡さざみ
久留米市	千光寺(曹洞)	熊貞親王	安山岩	弘和3 (133)	有、16c	櫛・灯	千光寺は伝埋葬地(大原原の戦い)	
久留米市	千光寺(曹洞)	熊貞親王	塚(墓塚) + 自然石櫛み	弘和3 (133)	有、近代欠	櫛・灯	灯籠は久留米商工会事務所	
柳川市	福福寺(真浄)	戸次直道	寿塔形式	花崗岩	天正13 (1585)	有、延宝2年	覆	福福寺は代主土佐氏が延宝2年中興
柳川市	天受寺(曹洞)	高嶺墓	安山岩	天正14 (1586)	有、江戸前期	無	供養塔、周辺に殉死者五輪塔等	
大田原市	法輪寺跡(真浄)	高嶺墓	異形有角五輪塔	凝灰岩	天正14 (1586)	有、寛政元年	碑(寛政元年)	碑の撰文は鎌倉者
みやま市	宗教寺(真浄)	鎌池供養	有角五輪塔	安山岩	天正20 (1592)	無	無	
みやま市	真弓神社	真弓顕有	実願方柱形	凝灰岩	正平24 (1369)	有、明治元年	櫛	南朝の忠臣、五百年遠忌造立
朝倉市	御蔭城跡	小寺(聖田) 重隆	有角五輪塔(真前型)	花崗岩	永禄7 (1564)	有、享和2年	櫛・燈・灯・覆	塔・燈・灯は福岡産
朝倉市	山山城跡近く	小寺(聖田) 重隆	五輪塔	曹崗石	天正13 (1585)	無	櫛・灯・覆	二百年遠忌造立、櫛・灯は福岡産
佐賀県								
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺10代宗隆	宝篋印塔	安山岩	13c	有、戦国期	鎌倉期に佐賀郡村中の地頭職継任	
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺11代宗氏	有角五輪塔	安山岩	戦国期	有、16c末	後家合せ	
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺12代隆家	宝篋印塔	安山岩	永禄7 (1510)	無	無	
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺13代家右	有角五輪塔	安山岩	享禄元 (1528)	有、江戸初期	後家合せ	
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺14代龍久	五輪塔	安山岩	天正8 (1539)	無	後家合せ	
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺15代龍興	五輪塔	安山岩	天文17 (1548)	無	無	
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺16代隆信	有角五輪塔	安山岩	天正12 (1584)	無	無	
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺親明	有角五輪塔	安山岩	天文14 (1545)	有、16c後	無	
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺家純	有角五輪塔	安山岩	天文14 (1545)	有、江戸中後期	無	
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺隆家	有角五輪塔	安山岩	天正14 (1545)	有、戦国→江戸初期	川上・萩原家で戦死、後家合せ	
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺隆家	有角五輪塔	安山岩	天文14 (1545)	有、江戸初期	川上・萩原家で戦死、後家合せ	
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺朝綱	有角五輪塔	安山岩	天文14 (1545)	有、江戸初期	川上・萩原家で戦死	
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺家門	宝篋印塔	安山岩	天文14 (1545)	無	川上・萩原家で戦死	
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺家泰	宝篋印塔	安山岩	天文14 (1545)	無	川上・萩原家で戦死	
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺家重	宝篋印塔	安山岩	天文15 (1546)	無	無	
佐賀市	高伝寺(曹洞)	波多吉	有角五輪塔	安山岩	慶長3 (1598)	無	鎌倉意、波多氏に養子	
※高伝寺の龍造寺等は、明治4年(1871)、龍造藩主直大が湖内各地にあったものをまとめたもの。								
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍崎清久	笠塔婆(仏舎利内納り)	安山岩	天正21 (1552)	有、江戸前期	小櫛	江戸以降の墓域とは別区画
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍崎清河	有角五輪塔	安山岩	天正13 (1585)	有、17c中	櫛	龍崎、江戸以降の墓域とは別区画
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍岡尼	笠塔婆	安山岩	慶長5 (1606)	無	無	龍造寺墓域とは別区画
佐賀市	龍岡寺(曹洞)	龍岡尼	石祠形	安山岩	慶長5 (1606)	有、江戸前期	小櫛・灯	龍造寺隆信実弟、龍崎直次親弟
佐賀市	本行寺(日蓮)	龍造寺胤家	宝篋印塔	安山岩	享禄4 (1531)	無	櫛・灯	塔身銘(匿名)は遺刻
小城市	門通寺(臨濟)	千重宗親	自然石(無銘)	安山岩	永正2 (1294)	有、江戸期	無	隣りに自然石の墓所跡(江戸後期)
多久市	尊称寺(時)	小次政直	重創無銘塔	安山岩	明徳6 (1496)	無	無	無
多久市	尊称寺(時)	小次政元	重創無銘塔	安山岩	天文5 (1536)	無	無	無
白石町	興興寺(曹洞)	平井経由	宝篋印塔	安山岩	天正2 (1574)	無	無	無
武雄市	龍見神社	菊池5代経政	実願方柱形	安山岩	文治2 (1186)	有、昭和9年	ブロッコ塚	龍見神社惣門に死去と伝わる
武雄市	円心寺(曹洞)	後藤純明	宝篋印塔	安山岩	天文22 (1553)	無	無	無
武雄市	円心寺(曹洞)	後藤貴明	五輪塔	安山岩	天正11 (1583)	無	無	遊移塔
武雄市	光明寺(曹洞)	後藤貴明	自然石(無銘)	砂岩	天正11 (1583)	無	櫛・灯	無
伊万里市	山ん寺聖寺	源(龍造)久	宝篋印塔	砂岩	弘安4 (1488)	有、戦国期	無	遊移墓
伊万里市	山ん寺聖寺	源(龍造)直	宝篋印塔	砂岩	承安2 (1372)	有、戦国期	無	遊移墓
伊万里市	山ん寺聖寺	源(龍造)清	宝篋印塔	砂岩	正治2 (1200)	有、戦国期	無	遊移墓、船輪欠
長崎県								
能登町	出苑院寺(曹洞)	源(龍造)久	自然石	玄武岩	弘安4 (1488)	有、江戸中前期	小灯	無
能登町	伝 伝 龍造 隆 己	自然石散碑	玄武岩	天文11 (1542)	無	遊移塔	無	無

所在地	被葬者・対象者	形態（形式）	石材	没年	型式番号、造立年	江戸以降の付帯物	備考	
松浦市	志茂利高	有角五輪塔	安山岩	天正20（1592）	無			
松浦市	松浦 定	有角五輪塔	玄武岩	文禄2（1593）	有、17世紀初頭		「文禄の松浦宗義供養塔」にある	
比々町	兼光寺（曹洞）	宝篋印塔	玄武岩	文明11（1479）	無	門	門は礎石のみ残	
長崎市	西院寺（曹洞）	宝篋印塔	安山岩	16c	無、遊移塔		深堀彌高家墓、天正14年造	
長崎市	浄土寺（臨濟）	宗義遺	笠付方柱形	砂岩	永正17（1521）	有、江戸中期	宝珠・義賢文	
長崎市	太平寺（曹洞）	宗義遺	宝篋印塔	砂岩	天正16（1589）	無	灯	天正17年造
平戸市	松浦 勝	宝篋印塔	玄武岩	応永6（1399）	応永（感念のみ）		後家合せ	
平戸市	西門寺（臨濟）	松浦 義	自然石	玄武岩	文明12（1470）	有、江戸前期小	水（安永8年銘）	
平戸市	西門寺（臨濟）	松浦 弘定	自然石	玄武岩	天正12（1515）	有、江戸前期小	水（天保13年銘）	
五島市	浄土寺（曹洞）	宇久純徳	五輪塔（関西型）	花崗岩	天正15（1587）	有、17c中後	灯	キラシタン
五島市	大門寺（曹洞）	五島（宇久）純玄	宝篋印塔（関西型）	砂岩	文禄3（1594）	有、寛永11年小	石祠（寛永11年銘）	当初は御野真康寺建造廟
大分県								
日出町	松原寺（曹洞）	朝日岡	五輪塔	安山岩	慶長3（1598）	有、16c前		日出藩家定・秀吉堂お山の母
大分市		長宗我部信親	摩訶輪塔	凝灰岩	天正14（1586）	無		塚・鳥居・碑
津久見市	大友宗廟公願	大友宗廟	笠付方柱形	安山岩	天正15（1587）	有、寛政期	木願・覆	戦死地付道、碑は2基（明治・昭和）
津久見市	大友宗廟公願	大友宗廟	キリスト教墓石	石灰岩	天正15（1587）	有、昭和52年銘	願公命造	遺臣地蔵の石灯籠等造
伊作市	判明寺跡	大友義興	願形宝塔	凝灰岩	天文19（1550）	無		願公命造
竹田市	西光寺（浄土）	小川清秀	宝塔	凝灰岩	天正11（1583）	有、17c前		石祠（明治60年銘）
竹田市	西光寺（浄土）	小川清政	宝塔	凝灰岩	天正20（1592）	有、17c前		15代義興（明治元年没）塔の系譜
								通拝墓
								通拝墓
福岡県								
西都市	大安寺跡（曹洞）	伊東6代祐尚	伊東塔	凝灰岩	文明17（1485）	無		
西都市	大安寺跡（曹洞）	伊東8代伊祐	異形五輪塔	凝灰岩	大永3（1523）	無		同一区画にあり、
西都市	大安寺跡（曹洞）	伊東9代祐光	伊東塔	凝灰岩	天文2（1533）	無		近くには家臣墓（水崎原戦死）、
西都市	大安寺跡（曹洞）	伊東12代義隆	伊東塔	凝灰岩	永禄12（1569）	無		11代義隆墓は西郷
西都市	家岸寺跡	米良初代重文	自然石	砂岩	天文20（1551）	有、嘉永4年		
西都市	家岸寺跡	米良2代重頼	自然石	砂岩	永禄2（1559）	有、江戸前期		子孫米良（勘定）同墓造
西米良村	新立寺跡（真言）	米良重為	自然石	砂岩	天正2（1574）	有、江戸末期		子孫米良14代宗叙、
								現守世神社（昭和14年移転）
西米良村	新立寺跡（真言）	米良重為ほか	五輪塔	凝灰岩	永享7（1574）	有、慶安5年銘		子孫米良10代宗隆造（元永寛政）、
								現守世神社（昭和14年移転）
小林市	伊豆安（昌年寺跡）	伊豆安文	五輪塔	凝灰岩	元龜4（1572）	有、慶安9年 碑（文化庁）		水崎原戦死、島津宗久（五代代）造
宮崎市	清武城跡	伊東6代祐尚	伊東塔	凝灰岩	文明17（1485）	有、天永4年	籠 願碑（大永4年）	
宮崎市	清武城跡	伝伊東10代祐吉	伊東塔	凝灰岩	天文5（1536）	無		同一区画（墓塚上）に並立、
宮崎市	清武城跡	伊東7代祐光	伊東塔	凝灰岩	文明17（1485）	有、江戸後～		同区画に家臣墓（宮田氏）あり
宮崎市	清武城跡	伊東8代伊祐	伊東塔	凝灰岩	大永3（1523）	有、江戸後～		
宮崎市	天昌寺跡	島津久	伊東塔	凝灰岩	天正15（1587）	無		
宮崎市	天昌寺跡	島津豊久	伊東塔	凝灰岩	慶長5（1600）	無		関ヶ原戦死、同戦死の家臣墓群近く
日南市	般若寺跡（臨濟）	伊東11代義祐	願形塔	凝灰岩	天正13（1585）	有、17c		源代藩主墓と同じ大形墓塚上
日南市	長持寺跡（曹洞）	伊東義賢	伊東塔	凝灰岩	文禄2（1593）	無		キラシタン
日南市	長持寺跡（曹洞）	伊東祐勝	伊東塔	凝灰岩	文禄2（1593）	無		キラシタン
中間市	西林院（臨濟）	秋月掃丈	宝篋印塔	凝灰岩	慶長元（1596）	無		灯（寛永元年）、籠
								籠は他2基との共有
鹿児島県								
出水市	感応寺（臨濟）	島津初代忠久	宝篋印塔	凝灰岩	嘉禄3（1227）	有、14c		大形墓塚・籠・水
出水市	感応寺（臨濟）	島津2代忠時	宝塔	凝灰岩	文永9（1272）	有、戦国期		分骨壺、基礎地蔵、神号追討碑
出水市	感応寺（臨濟）	島津3代久経	宝塔	凝灰岩	弘安7（1284）	有、戦国期		大形墓塚・籠・水
出水市	感応寺（臨濟）	島津4代忠宗	宝塔	凝灰岩	正中2（1325）	有、戦国期か		神号追討
出水市	感応寺（臨濟）	島津5代尚久	宝塔	凝灰岩	貞治2（1362）	有、戦国期か		大形墓塚・籠・水
								塔身等後築、神号追討
								感応寺の初代～5代「五願寺」は光元の共有墓塚上に並立。水廻りは2基とも享和4年銘（この時に整備か）。
出水市	龍光寺跡（曹洞）	薩州島津初代尚久	宝塔	凝灰岩	長祿3（1459）	無		
出水市	龍光寺跡（曹洞）	薩州島津2代尚久	宝塔	凝灰岩	明応7（1498）	無		
出水市	龍光寺跡（曹洞）	薩州島津3代重久	異形宝篋印塔	凝灰岩	天文5（1536）	無		初代用久～7代忠宗等は同一区画内
出水市	龍光寺跡（曹洞）	薩州島津4代忠興	異形宝篋印塔	凝灰岩	大永5（1525）	無		（墓塚）にあり、
出水市	龍光寺跡（曹洞）	薩州島津5代実久	異形宝篋印塔	凝灰岩	天文22（1553）	無		内内から移転、整備（宝永6年）、
出水市	龍光寺跡（曹洞）	薩州島津6代義興	宝塔	凝灰岩	天正13（1585）	無		5・7代塔は相輪文
出水市	龍光寺跡（曹洞）	薩州島津7代忠辰	宝塔	凝灰岩	慶長12（1597）	無		
出水市	龍光寺（曹洞）	薩州島津忠兼	異形宝篋印塔	凝灰岩	永禄8（1565）	無		碑・灯
日南市	舞天寺跡（曹洞）	島津久	平頭方柱形	凝灰岩	天正15（1587）	有		近くには水吉土塙中、明治4年銘の灯籠
日南市	天昌寺跡	島津豊久	自然石	花崗岩	慶長5（1600）	有		13灯、水入木桶「貞徳」は光元期の入
姪良市	龍岸寺跡（曹洞）	豊州島津初代季久	宝塔	山吹石	文明9（1477）	無		籠・灯
姪良市	龍岸寺跡（曹洞）	豊州島津6代親久	宝篋印塔	凝灰岩	文禄2（1593）	無		籠・碑・覆

墓石類からみた江戸時代における幕臣の墓形・葬儀・葬儀後之・美濃口雅明

所在地	施主者・対象者	形制（形式）	石材	没年	型式名、造立年	江戸以降の付帯物	備考	
鹿児島市	川田幸四郎長算邸	北土島墓型	宝塔	鹿児島	13c	有、14c	角落堂（永三郎） 次代川田盛貴以降の供養塔あり	
鹿児島市	福昌寺（曹洞）	高津島津6代承久	宝篋印塔	鹿児島	永和2（1376）	無	灯	神名造形
鹿児島市	福昌寺（曹洞）	大隅島津6代承久	宝塔	鹿児島	嘉慶元（1387）	無	灯	神名造形
鹿児島市	福昌寺（曹洞）	島津7代元久	宝篋印塔	山田石	応永18（1411）	無	灯	大形基礎 後家合せ、神名造形
鹿児島市	福昌寺（曹洞）	島津7代元久	方型石	鹿児島	応永18（1411）	有、文化10年	欄	大隅宗隆により新造
鹿児島市	福昌寺（曹洞）	島津8代久澄	宝篋印塔	山田石	応永32（1425）	無	灯	大形基礎 後家合せ（宝珠文）、神名造形
鹿児島市	福昌寺（曹洞）	島津9代忠国	宝篋印塔	山田石	文明2（1470）	無	欄	後家合せ（相輪文）、神名造形
鹿児島市	福昌寺（曹洞）	島津10代元久	宝篋印塔	山田石	文明6（1474）	無	灯	神名造形
鹿児島市	福昌寺（曹洞）	島津11代忠良	宝篋印塔	山田石	永正5（1508）	無	灯	後家合せ、神名造形
鹿児島市	福昌寺（曹洞）	島津12代忠治	宝篋印塔	山田石	永正12（1515）	無	灯	神名造形
鹿児島市	福昌寺（曹洞）	島津13代忠隆	宝篋印塔	山田石	永正16（1519）	無	灯	神名造形
鹿児島市	福昌寺（曹洞）	島津14代勝久	宝篋印塔	鹿児島	天正元（1573）	無	灯	宝珠文、神名造形
鹿児島市	福昌寺（曹洞）	島津15代賢久	宝篋印塔	山田石	元龜2（1571）	無	灯	大形基礎 神名造形
鹿児島市	福昌寺（曹洞）	島津久保	宝篋印塔	山田石	文祿2（1593）	無	灯	大形基礎 神名造形
世福昌寺跡の島津6代承久～島津久保墓は、江戸時代に市内各地にあったものをまとめたもの。								
鹿児島市	大川寺跡（曹洞）	川田義秀	宝篋印塔	鹿児島	16c	無		川田義興撰文
鹿児島市	大川寺跡（曹洞）	川田義朝	宝篋印塔	鹿児島	文祿4（1595）	無	灯（方2寸）	
鎌倉市	朝快法華堂近く	島津初代忠久	五輪塔	安山石	嘉禄3（1227）	有、享保10年小 崩・火・水・碑等		後家合せ、神号遺照 8代徳土重盛の造形参照（安永8年）
熊本県（菊池市除く）								
鹿屋市	浄業寺（浄土）	小代行平など墓	五輪塔	鹿児島	13c	有、14c		鎌倉初期3代の供養塔、松浦氏三代墓
鹿屋市	浄業寺（浄土）	小代重政	五輪塔	鹿児島	明徳2（1391）	不明		地輪のみ（後家合せ）
鹿屋市	浄業寺（浄土）	小代弘行	五輪塔	鹿児島	永享7（1435）	不明		地輪のみ（後家合せ）
鹿屋市	浄業寺（浄土）	小代奉弘	五輪塔	鹿児島	文亀元（1501）	無		空風陶瓦
船岡町		山本大和助	自然石	鹿児島	天正15（1587）	有、江戸後期	欄、灯（文祿5年銘）	同一宗匠、耳の神様として信仰対象
玉名市		宇佐公満	五輪塔	鹿児島	承久元（1219）	有、文化元年		空風大輪は後家合せ、文化元年改葬
玉名市	頼行寺（時）	能満寺隆隆	五輪塔	鹿児島	天正12（1584）	無		後家合せ、高瀬川に目を遊覧（伝承）
玉東町	西安寺（天台）	北山相良頼平	五輪塔	鹿児島	13c	無		徳寺等（後家合せ）
山鹿市	日輪寺（曹洞）	島津12代武時	五輪塔	鹿児島	元弘3（1323）	有、13c	欄	地輪正面に銘「肥後守武時入道」
山鹿市	常盤寺跡（天台）	宇野親治	五輪塔	鹿児島	文治2（1186）	有、14c	欄（近現代）	
山鹿市	徳栄寺（浄土真）	城親永	方柱状碑	鹿児島	16c後半	無		
山鹿市	皇地公園	御旗親永ほか	五輪塔	花崗石	天正16（1588）	有、現代	灯	肥後国東一揆にて死没
山鹿市	内古間神社	自然石	チャート		天正16（1588）	有、江戸中後期		肥後国東一揆にて死没
山鹿市		小西行長	自然石（板状）	安山石	慶長5（1600）	無、17c		記銘成者・基礎アロエ文
南小国町	眞彌寺（真言）	北条時定	五輪塔	鹿児島	元弘3（1290）	無		縁やかな塚上に五輪塔
南小国町	眞彌寺（真言）	北条定宗	五輪塔	鹿児島	永仁3（1295）	無		縁やかな塚上に五輪塔
南小国町	眞彌寺（真言）	北条時頼	五輪塔	鹿児島	元亨元（1321）	無		縁やかな塚上に五輪塔
高森町	合藏寺（曹洞）	高森修直	有角五輪塔	安山石	天正14（1586）	有、18c	欄・灯	高森高城自月、五輪等は世賢平野道
高森町	合藏寺（曹洞）	三浦能因	圭形方柱形	安山石	天正14（1586）	有、18c		高森武家臣、高森高城自月
熊本市	大慈寺（曹洞）	川尻泰明	圓形	安山石	鎌倉後期	有、18c		記銘不明
熊本市	熊島神社近く	内古間基吉	異形五輪塔	安山石	永享4（1432）	有、18c	灯、地敷	地敷縁は元文3年・三尊方基銘、 近くに家臣供養塔2基
熊本市		阿蘇修益	自然石板碑	安山石	16c	無、永禄12年銘	灯	17cに造形（俗名・牛神様）
熊本市	内田家墓所	内田綱勝	自然石板碑	安山石	天文15（1546）	有、17c		阿河に子孫の自然石板碑群
熊本市	真心さんの塚	徳子木頼昌（信心）	自然石（板状）	安山石	天文18（1549）	有、弘化4年		没年無記記、子孫松前藩後等造立
熊本市	益福寺跡（曹洞）	田尻景安	五輪塔	鹿児島	天正22（1553）	無		
熊本市		石殿石見守	五輪塔	安山石	16c前～中	無、天文15年銘		
熊本市	東福寺跡	石殿武治	華嚴宗宝篋印塔	鹿児島	元龜2（1571）	無		基礎記年銘は追題
熊本市	空古間神社	内古間親賢	宝篋印塔	鹿児島	天正3（1573）	無	欄	
熊本市	品林寺（曹洞）	城親賢	五輪塔	安山石	天正9年（1581）	有、江戸後期	灯	
熊本市		佐々宗徳	石圓形	鹿児島	天正15（1587）	有、近代か		帆死地、地元白粉村石工造
熊本市	本妙寺（日蓮）	小西行長	笠形墓形	安山石	天正15（1587）	有、昭和28年銘		遺臣の子孫と伝わる家が造立
宇土市	宗福寺（曹洞）	名和行直	宝篋印塔	鹿児島	元龜2（1571）	無		
御船町	本寿寺（天台）	平栗宗直	不明	鹿児島	天正12（1584）	不明	欄	寄臺の（相輪・宝篋印塔基礎など）
山鹿町	華藏寺跡	阿蘇修忠	圭形方柱形	鹿児島	文明17（1485）	有、近代		
山鹿町		阿蘇修豊	宝篋印塔	安山石	永禄2（1599）	無		相輪・基台の他は平成2年の後築
山鹿町		阿蘇修徳	宝篋印塔	安山石	天正12（1584）	無	欄・灯（明治40年）	石殿の華嚴宗塔名（4名）は姓無し
山鹿町		甲斐宣光	宝篋印塔	大木3（1523）	無			後家合せ、縁やかな塚、板碑を伴う
八代市	惟良親王御塚	惟良親王	宝篋印塔	鹿児島	弘和3（133）	無、天授2年銘	欄・鳥居	塚あり、額は大規模な方形相輪
八代市	正福寺（浄土真）	島津14代武士	自然石	砂岩	応永8（1401）	有、江戸期	欄	背面銘名

所在地	被葬者・対象者	形態（形式）	石種	没年	型式名、建立年	江戸以降の付替物	備考	
八代市	下相良18代義興	押柱（圓蓋重形）	凝灰岩	天正9（1581）	有、延宝7年	櫛・灯・碑	戦死地。灯籠は明暦5年・文政12年 狀、碑は四百年忌	
八代市	奉勝院跡（臨濟）	圓柱石	凝灰岩	天正10（1582）	有、14c		圓形坐佛坐、遺跡（寛永18年誌）	
八代市	顯成寺（真言）	下相良1代前額 方柱形	安山岩	建長6（1254）	有、明治19年	大形基壇・櫛・灯	西国競争以前に建（金堂）	
八代市	顯成寺（真言）	下相良2代前額	五輪塔	凝灰岩	文永元（1264）	有、14c	2～19代は共有基壇上	
八代市	顯成寺（真言）	下相良3代前額	五輪塔	凝灰岩	基壇（1310）	無	空輪火	
八代市	顯成寺（真言）	下相良4代良氏	五輪塔	凝灰岩	正平7（1352）	無		
八代市	顯成寺（真言）	下相良5代前額	五輪塔	凝灰岩	延文元（1356）	無		
八代市	顯成寺（真言）	下相良6代定頼	五輪塔	凝灰岩	文中元（1372）	有、15c		
八代市	顯成寺（真言）	下相良7代前額	五輪塔	凝灰岩	明徳5（1394）	無		
八代市	顯成寺（真言）	下相良8代実長	五輪塔	凝灰岩	応永24（1417）	無		
八代市	顯成寺（真言）	下相良9代前額	五輪塔	凝灰岩	嘉吉3（1443）	無		
八代市	顯成寺（真言）	下相良10代前額	五輪塔	凝灰岩	文安5（1448）	無		
八代市	顯成寺（真言）	下相良11代統統	五輪塔	凝灰岩	応仁2（1468）	無		
八代市	顯成寺（真言）	下相良12代為純	五輪塔	凝灰岩	明応9（1500）	無		
八代市	顯成寺（真言）	下相良13代良氏	五輪塔	凝灰岩	永正15（1518）	無		
八代市	顯成寺（真言）	下相良14代長祿	五輪塔	凝灰岩	大永5（1525）	無		
八代市	顯成寺（真言）	下相良15代良定	五輪塔	凝灰岩	享祿4（1531）	無		
八代市	顯成寺（真言）	下相良16代義遠	五輪塔	凝灰岩	天文15（1548）	無		
八代市	顯成寺（真言）	下相良17代晴広	五輪塔	凝灰岩	弘治元（1555）	無		
八代市	顯成寺（真言）	下相良18代義興	五輪塔	凝灰岩	天正9（1581）	無		
八代市	顯成寺（真言）	下相良19代忠房	五輪塔	凝灰岩	天正13（1585）	無		
年顯成寺の下相良2～19代五輪塔は長方形の同一基壇上を建立。明らかに御内より移動したものであり（地輪の記録方位まちまち）。元禄碑、3代徳土頼昌の整備と考えられる。								
八代市	顯成寺（真言）	下相良14代長祿	方柱形	安山岩	大永5（1525）	有、明治25年		
八代市	顯成寺（真言）	石田三成	五輪塔	凝灰岩	慶長5（1600）	有、16c	後家合せ、見立て	
多良木町	普善寺（真言）	上相良1代前額	五輪塔	凝灰岩	13c前	有、13c本壇	成名遺跡（徳勝寺「江戸後期」）	
多良木町	蓮華寺跡（真言）	上相良2代前額	五輪塔	凝灰岩	1290年代	有、応仁2年	遺跡（俗名「正三三」）市川北記	
多良木町	蓮華寺跡（真言）	上相良3代前額	五輪塔	凝灰岩	正安3（1301）	無	後家合せ、遺跡（俗名「鎌武甲平 成（千支路）」）	
多良木町	蓮華寺跡（真言）	上相良4代前額	五輪塔	凝灰岩	延文3（1358）	有、13c後	後家合せ、遺跡（俗名「延文三三」）	
多良木町	蓮華寺跡（真言）	上相良5代前額	五輪塔	凝灰岩	応永7（1400）	有、14c前	後家合せ、遺跡（俗名「藤木七三」）	
多良木町	蓮華寺跡（真言）	上相良6代前額	五輪塔	凝灰岩	正長元（1428）	有、14c前	遺跡（俗名「正長元中」）	
井蓮華寺跡の上相良氏五輪塔は、もろは頼昌の遺業を契機として建造された大形の石層基壇上を建立する（現在の基壇は移築復元）。								
天草市	本戸城跡	木造正額（佛正）	門首板形	砂岩	天正17（1589）	有、18・19c	櫛	戦死地。記録俗名
熊本県菊池市								
菊池市	伝宮前跡「龍之城」	菊池1代明徳	有角五輪塔	安山岩	永保元（1081）	有、文化15年	櫛・灯（文政8年説）	石層は大規模な基壇を囲繞
菊池市	若宮神社	伝 菊池2代経徳	社殿（櫛）		12c	有、文化12年	社殿は近代文化	
菊池市	秋吉院跡（天台）	菊池13代武重	龜狀塔	安山岩	辨圓2（1341）	有、文化13年	櫛、碑2基	青南千光記に「辨圓三年甲巳」、 圓形は徳氏武重建立（明治27年附本）
菊池市	正観寺（臨濟）	菊池15代武光	龜狀塔	砂岩ほか	文中2年（1373）	天明2年	櫛・灯	塔身は砂岩・龜狀は安山岩、青南碑文
菊池市	正観寺（臨濟）	菊池16代武政	翁髻型宝篋印塔	凝灰岩	文中3（1374）	有、塔身15～6c	櫛	後家合せ、天明9年に俗名遺跡
菊池市	正観寺（臨濟）	菊池16代武政	翁髻型宝篋印塔	凝灰岩	正平12（1357）	有、塔身15～6c	櫛	後家合せ、塔身に成名遺跡
菊池市	正観寺（臨濟）	菊池武圓	翁髻型宝篋印塔	凝灰岩	14c後小	有、塔身16c	櫛	後家合せ、天明9年に俗名遺跡
菊池市	東福寺（天台）	菊池寛勝	五輪塔	凝灰岩	元弘3（1333）	有、16c	櫛	後家合せ、地輪遺跡「口弘三年東西 （1333）→三六（歳）打死」
菊池市	東福寺（天台）	菊池武村	五輪塔	凝灰岩	建武3（1336）	有、14・15c	櫛	後家合せ、地輪遺跡「建武三年一足 判録被大渡損上段」
菊池市	碑方城跡	菊池17代武朝	方柱形（笠形火）	凝灰岩	応永14（1407）	有、大正7年		右側面に建立者銘「菊池郡大字碑方 一」、左側面に4行の事項碑文
菊池市	真徳寺跡（臨濟）	菊池20代為邦	有角五輪塔	安山岩	応永14（1407）	有、昭和37年		菊池文化財部調査文
菊池市	正善寺	菊池18代善明	球心宝篋印塔	凝灰岩	文安元年（1444）	無	櫛・灯・水	後家合せか、灯籠・水盤は明治28年銘
菊池市	光善寺	菊池19代持邦	球心宝篋印塔	凝灰岩	文享3年（1446）	無	櫛・供台	供台は「皇紀二千五百九十五年」銘
菊池市	碧峯寺（曹洞）	菊池20代為邦	有角五輪塔	安山岩	長享2年（1488）	有、18c中後	櫛	
菊池市	玉拝寺（曹洞）	菊池20代為邦	翁髻型宝篋印塔	凝灰岩	長享2年（1488）	無	階段・櫛・灯	とくに輪軸火、同一基壇内、石層は 天明7年銘、行龍記銘「宗氏・圓山氏」
菊池市	玉拝寺（曹洞）	菊池21代重朝	翁髻型宝篋印塔	凝灰岩	明応2年（1493）	無	櫛・明・灯	
菊池市	実相院跡（臨濟）	菊池22代重運	五輪塔	凝灰岩	永正元（1504）	無	櫛・灯・碑（文政0）	後家合せ
菊池市	安国寺（天台）	菊池23代政隆	笠狀塔	安山岩	永正6年（1509）	有、19c	櫛・灯（最永4年説）	白灯地
菊池市	安国寺（天台）	菊池23代政隆	笠狀塔	安山岩	永正6年（1509）	有、18c前	櫛・灯（最永4年説）	龜狀基壇にあり、記録成名のみ
菊池市	西福寺（臨濟）	赤星有勝	球心宝篋印塔	凝灰岩	嘉禎2（1327）	有、15c小	櫛	後に浄土宗、同一石層（文政7年 銘）区画内にある
菊池市	西福寺（臨濟）	城 武吉	球心宝篋印塔	凝灰岩	正和3（1314）	有、15c小	櫛	
菊池市		城 武重	翁髻型宝篋印塔	凝灰岩	16c後	無、弘安4年		遺跡

※菊池7代経定（1185年没、菊池市、相輪・宝篋印塔など部材の寄贈者）と菊池武藏（1341年没、大分県宇佐市、明治24年造の龜狀塔）は異地にあるため未見。

第2表 九州の亀状碑類一覧

凡例 ①場所 ②概要/対象者の没年 ③造立者 ④造立年 ⑤題字(篆額・碑文頭銘など) ⑥碑文の有無 ⑦碑文の撰書者等 ⑧亀状等の形態 ⑨碑身・塔身等の形態 ⑩石材 ⑪備考
※碑身・塔身の左右は向かって見たもの。原則、亀状のみで碑身・塔身が無いものは扱っていない。

佐賀県

唐津藩大久保初代忠職碑 ①場所:唐津市,大久保緑地(小丘陵上),丘陵中腹には忠職藩主期の日蓮宗の大形墓石群あり(明暦一寛文期跡) ②概要:唐津藩大久保初代忠職の事績碑/寛文10年(1670)設 ③造立者:2代忠朝「孝子唐津城主従五位下出羽守大久保忠朝立」 ④造立年:碑文は寛文12年(1672)「寛文十二年壬子四年十九日」 ⑤篆額:「從四品唐津城主大久保君碑銘」 ⑥碑文:2面(正・背),背面は林家が忠朝の建碑を賞賛する碑文(追刻) ⑦撰文:正面は忠朝が、背面は林風岡「弘文院學士整宇林懸誌」 ⑧亀状:立方形の基礎正面に鼻唇(正面向き)、他3面に波濤を線刻 獸首…首は直にもたげる。耳有り、口開け、牙有り/養尾…意匠的に拡がる/甲羅…如意頭形,亀甲文(3本一單位沈線,区画内に簡略化した十字花文) ⑨碑身:方柱形,頭部弧状の笠,正面は碑面(額内)周囲に瑞雲線刻,笠(正面表)に双龍線刻(赤彩) ⑩石材:花崗岩 ⑪備考:本墓は京都府本神寺(法華宗)の五輪塔/忠朝は後に老中首座、「土芥寇騒記」(各藩の藩主・政治状況を備載道徳に基づき辛辣に評した書)で良將と評される

「大宝聖林碑」 ①場所:多久市現西溪公園(孔子廟近く,当初は武富氏邸) ②概要:城下武富成亮邸にあった聖堂「大宝聖林」を記念 ③造立者:武富成亮 ④造立年:碑文は正徳3年(1713)「大日本正徳三歳在癸巳秋八月初日」 ⑤篆額:正面「大寶聖林碑」,背面「萬古長春石」 ⑥碑文:3面(正・背・左は部分的) ⑦撰文:武富成亮「後學一部西門武富成亮情言百首」 ⑧亀状:9個のパーツを組み合わせる 獸首…首は直にもたげる。耳有り、口開け、牙有り/養尾/甲羅…自然石の緑部を一部打ち切った彫形,無文/その他…右前足甲に四角の小さいホヅ穴 ⑨碑身:首…欠欠(破面の形状から首を高くもたげてはいない)/養尾/甲羅…亀甲文(単沈線),甲羅後方に骨状帯(単沈線)/基台…平面八角形 ⑩碑身:自然石板状(略光背形,側面を粗く彫形) ⑪石材:安山岩

石長寺の中興記念碑 ①場所:佐賀市石長寺(曹洞宗) ②概要:石長寺の中興記念,豪商柿久氏良悦居士「本土豊貴饒於柿久氏」が私財を投じ再興(堂宇・山門等を新築,本尊を補修) ③造立者:石長寺大龍「大龍和尚以求子之誓文故作此中興記念」 ④造立年:碑文は享保14年(1729)「享保十四龍集巴西孟夏穀旦」 ⑤題字:正面「石長寺」,背面「中興記」ともに題書 ⑥碑文:2面(正・背) ⑦撰書:甘露菴主僧法沙門天淳性敬撰并書 ⑧亀状:首…欠欠(破面の形状から首を高くもたげてはいない)/養尾/甲羅…亀甲文(単沈線),甲羅後方に骨状帯(単沈線)/基台…平面八角形 ⑨碑身:自然石板状(略光背形,側面を粗く彫形) ⑩石材:安山岩

佐賀鹿島支藩2代直條碑 ①場所:鹿島市,普明寺(黄檗宗)鹿島支藩主家墓所(直條の兄斯橋岡山),直條夫婦墓(備教形穴墓石)の前 ②概要:2代藩主(父直朝を初代とする)直條の事績碑/宝永2年没(1705) ③造立者:再造は孫4代直朝,当初は子3代直堅「孝子従五位下和泉守藤原朝臣直堅立」(碑身背面) ④造立年:宝暦4年(1754)再造,碑文は正徳元年(1711)「正徳元年辛卯五月日」 ⑤篆額:「故朝散大夫權前朝史藤公墓銘碑」 ⑥碑文:1面(正) ⑦撰文:林風岡「前侍諱學士朝散大夫關子監祭酒藤原朝臣直堅誌」 ⑧亀状:立方形の基礎正面に波濤と鼻唇(左下向き)を浮彫り 獸首…首は右下方に伸ばす。耳有り、口開け,牙無し/養尾…長い/甲羅…亀甲(3本一單位沈線)・骨状帯(2本一單位沈線) ⑨碑身:方柱形,頭部弧状の笠,笠妻に懸鳥,笠下位に・双龍・瑞雲浮彫り ⑩石材:安山岩 ⑪備考:直條は黄檗立・婦立・儒者と親交(江戸在勤時に林家の詩会に参加し人見竹洞とも昵懇),直條は前備藩河内静海に節事/当初の碑は大災により焼失(木製か),篆額の地はピシャン仕上げ(18世紀中頃以降の技法)

佐賀小城支藩6代室塔 ①場所:小城市,玉壺寺(黄檗宗)小城支藩主家墓所 ②概要:6代直貞正室松の墓石,石壘・石門あり/文化2年(1805)没 ③造立者:不明(没年時の藩主は孫の9代直實) ④造立年:一周忌の灯籠(文化3年跡)奉獻以前,塔身背面「文化二年乙丑五月廿二日」 ⑤篆額:正面「静明院殿清賢悠然大姉塔」 ⑥碑文:無し ⑦亀状:獸首…首は斜め上方にもたげる。耳有り、口少し開く、唇有り(口角付近に沈線),牙有り、眉上隆起が前方に張り出す/養尾…やや跳ね上がる/甲羅…亀甲文(2本一單位沈線) ⑧塔身:方柱形,頭部平坦開切 ⑩石材:安山岩 ⑪備考:9代直實は藩校興譲館を改革,京都萬福寺7世悅山揮毫の扁額を玉壺寺に奉納するなど人材育成・文化振興に尽力。

焼山の聖田碑 ①場所:武雄市,武雄から聖田へ抜ける山道沿い ②概要:享和年間に相賀照宗が行なった水野村南荒原(武雄市の開田・造池事業を記念) ③造立者:不明(藩が関与,背面石工名「堀田馬場下村/石工/筒井参右エ門」) ④造立年:碑文は天保10年(1839)「天保己亥復月」 ⑤篆額:「聖田碑」,男谷孝揮毫(忠孝,幕府の衣衾筆・能筆家・儒者) ⑥碑文:1面(正) ⑦撰書:撰は草葉 碑(額川,多久鍋島家儒臣宮・漢詩家,後に藩校弘道館教授),書は川上(由書家,古賀牧堂稿の書など) ⑧亀状:碑身の左側面(聖田地の武雄平野部)を向く,写實的 獸首…首は斜め上方にもたげる。耳有り、口開け,牙有り/養尾…やや跳ね上がる,下面にも養毛表現(線刻)あり/甲羅…亀甲文(横断面弧状の突帯) ⑨碑身:板状,頭部は正面側に頭部弧状の庇を設ける,正面上位に水面と単龍の浮彫り ⑩石材:安山岩 ⑪備考:墓田男谷忠孝の篆額から藩の仲介と深い関与が想定される/亀状の造形は白石町蔵島神社放生碑(追加資料)に近似

長崎県

大門寺聖慮盧藏闍碑 ①場所：五島市、大門寺（曹洞宗）福江藩主家北墓所（元は毘盧藏闍があった）②概要：毘盧藏闍を記念し藩主（5代盛暢・6代盛住）の弘功を称えた碑③建立者：不明④建立年：碑文は元禄8年（1695）「元禄乙亥八年夏四月中浣吉旦」⑤碑文頭：「廣嶽山毘盧藏闍誌」⑥碑文：4面⑦撰文：高泉性教「支那國 佛臨濟三十四世現住黄蘗山萬福禪寺／陽兼 沙門致高泉撰」⑧亀趺：碑身の側面側を向く 獸首…顔は獅子顔様。首は斜め上方にもたげらる。耳有り、口閉じ、牙有り／鬚尾／甲羅…板状（小めの、ほぼ平坦）。無文／基台…平面八角形⑨碑身：方柱形、笠（宝形）・露盤・宝珠あり。碑山下に請花あり ⑩石材：安山岩 ⑪備考：高泉性教は福建省出身の黄蘗叢（萬福寺5世、紫衣、京都弘国寺に性教の亀趺碑あり）／大門寺墓所6代盛住墓前の灯籠に亀趺が見られるが、後家合せて本来灯籠に用いられたかは不明。獸首・鬚尾、安山岩製。形状は毘盧藏闍碑の亀趺と近似し、その小形品といえる。

邑主諱早鍋島家経塔（右）「談誦大乗妙典卷万部之塔」 ①場所：諫早市、高城跡主郭（亀城とも、中世西郷氏の山城）、現高城神社、経塔（左）と並立 ②概要：大乗妙典（法華経）一万部の説誦成就記念、説誦は正徳3～5年の2年に及ぶ ③建立者：7代鍋島茂晴 ④建立年：碑文は正徳5年（1715）「正徳五年十一月十二日」 ⑤主銘：正面「談誦大乗妙典卷万部之塔」（赤彩） ⑥碑文：1面（左） ⑦撰文：7代茂晴「諫早豊前藤原茂晴誌焉」 ⑧亀趺：獸首…首は直にもたげらる。耳有り、口閉じ、牙有り／鬚尾／甲羅…側縁に挟りを入れた花弁形、亀甲文（突帯） ⑨塔身：方柱形（縦側縁は丸く仕上げる）、宝形笠あり（本来は異形相輪が乗る） ⑩石材：安山岩 ⑪備考：近くに菩提寺（曹洞宗天祐寺）／高城跡の下には大亀がいるとの伝説

邑主諱早鍋島家経塔（左）「談誦法華經一萬部塔」 ①場所：邑主諱早鍋島家経塔（右）と並立 ②概要：法華経一万部の説誦成就記念と諫早家の事績碑 ③建立者：8代鍋島茂行 ④建立年：寛保元年（1741）（案内板記載） ⑤主銘：正面「讀誦法華經一萬部塔」（赤彩） ⑥碑文：3面（左一背一右） ⑦撰文：8代茂行「邑主諱早石見藤原茂行謹誌」 ⑧亀趺…⑪備考：経塔（右）「談誦大乗妙典卷万部之塔」に同じ

大音寺伝芸上人碑 ①場所：長崎市、大音寺（浄土宗）僧侶墓域 ②概要：開山僧伝芸開徹の事績碑／慶安4年（1651）没 ③建立者：不明 ④建立年：安永5年（1776）「大清乾隆四十四年十月」 ⑤題字：篆額「開山報徳之碑」、碑文頭「崎陽大音寺開山傳芸上人之碑」 ⑥碑文：1面（正） ⑦撰文：获生徂徠、享保5年（1720）撰「享保庚子歲冬十月 東都物茂卿撰」 ⑧亀趺：首と胴は別石 獸首…首は直にもたげらる。耳有り、口閉じ、唇有り（沈線）、牙有り／鬚尾…下面にも鬚毛表現（線刻） ⑨甲羅…側縁に挟りを入れた花弁形、亀甲文（3本一単位沈線） ⑩碑身：板状、平頭平坦隅丸。左右に縦方向の龍（左右で双龍）・瑞雲を浮彫り ⑪石材：ピンク花崗岩（瀬戸内系花崗岩の可能性大） ⑫備考：大音寺は歴代長崎奉行が帰依／撰者获生徂徠は儒者、林家に師事し柳沢吉保に仕える。徂徠派開祖

〔亀趺を持つ水盤〕市杵島神社水盤 場所：諫早市市杵島神社拝殿前 願主：武富戸味三（肥前砥川石工、制作も本人か） 建立年：銘は文政7年（1824）「文政七年申八月吉良日」 形態：肥前地方に通有する平・基礎を持つ形態、盤は荷葉形・平は円柱形 亀趺：獸首…首は直にもたげらる。耳有り、口少し開け、牙無し、顎肥有り（中国からの情報を反映）／鬚尾…甲羅側面にも鬚毛あり／甲羅…亀甲文（横断面弧状の突帯） 石材：安山岩 備考：盤の内縁に蛙を作出するなど石工の創意が見られる。水盤近くに文政7年銘灯籠あり（2基一対）、武富戸味三作の水盤は佐賀県太良町留岡八幡宮にもあり（天保3年銘）

大分県

井上並古碑 ①場所：豊後大野市、井上並古隠居後の野宅近くの丘陵地、並立する並古・並増親子の備式墓の間 ②概要：井上並古の事績碑／寛政10年（1798）没 ③建立者：子並増「孝子源並増建之／石工／渡邊方殷」（右側面） ④建立年：文政8年（1825）「文政八年乙酉夏五月一建之」（右側面） ⑤篆額：「井上並古有源君之碑」 ⑥碑文：2面（正・背）、背面は草書 ⑦撰文：唐楓君山「唐唐書評鑑」 ⑧亀趺：獸首…首は短く直にもたげらる。耳有り、口閉じ・下唇有り（沈線）、牙無し／鬚尾…短く跳ね上がる。下面にも鬚毛表現（線刻）／甲羅…無文（手弁痕を意図的に残す） ⑨碑身：板状、頭部平坦隅丸、正面単龍・背面瑞雲浮彫り ⑩石材：凝灰岩 ⑪備考：井上並古は一代家老、8代藩主中川久貞の備式墓（小富士山墓所）を造営／唐楓君山は藩儒（藩校博濟館で医学・漢学・詩文を教授）、『豊後国志』編纂

文殊仙寺一字一石法華経塔 ①場所：国東市、文殊仙寺（天台宗） ②概要：一字一石法華経塔（地上標識） ③建立者：末廣光善・岡光長「功徳主/末廣甚助一尉光善/末廣忠二郎光長」（背面）、武士・名主階層 ④建立年：年紀銘無し、背面の名前・正面主銘の筋取りから19世紀前～中頃? ⑤主銘：「ソ（種子）一字一石法華経塔」（ソは弁財天・妙見菩薩）、右側面「取親頼山文殊標寺」 ⑥碑文：無し ⑦亀趺：獸首…首は直にもたげらる。耳有り、口閉じ、牙有り／鬚尾／甲羅…亀甲文（3本一単位沈線。区画内ピシヤン仕上げ） ⑧碑身：方柱形、頭部圓形 ⑩石材：安山岩 ⑪備考：弁財天神使は亀、妙見菩薩神使は玄武でこれを台座とする作例多い／同寺には亀趺を乗駒とする小形の水天候あり、獸首・鬚尾、安山岩製。

鹿児島県

宮之城島津4代久通碑 ①場所：さつま町、宗功寺跡（臨濟宗）宮之城島津家墓所、4代久通墓（石祠形）の前 ②概要：宮之城島津4代久通と宮之城家の事績碑／延宝2年（1674）没 ③建立者：子5代久竹（久鳳）「島津久鳳立之」 ④建立年：

碑文は延宝6年(1678)「延寶戊午之春」⑤碑文頭:「鳥津久通祖先世功碑并銘」⑥碑文:3面(右一正一左)⑦撰文:林 鷲峰「弘文院學士林史撰」⑧龜趺:写実的・丁寧 龜首…首は斜め上方にもたげる。耳有り、口閉じ、牙有り/鬚尾/甲羅…亀甲文(2条一単位突帯)、甲羅後方に背伏帯(楕円形を連続させた帯状突帯)/その他…足は水かきの表現あり、基台は龜趺と一石で四隅を切り込み平面雲形⑨碑身:方柱形、頭部櫛形、正面上位に双龍浮彫り⑩石材:安山岩⑪備考:久通は本藩家老。藩主光久の命で家譜「鳥津世祿記」編纂

江夏友賀墓石①場所:始良市、実忠寺跡付近(鳥津義弘室菩提寺)②概要:江夏友賀墓石/慶長15年(1610)没「慶長十五庚戌七月廿三日」(碑身右面)③造立者:不明④造立年:元禄頃(桐原正左衛門墓石など周辺資料との類似から)⑤主銘:「口翁瑞漢先生江夏氏墓」(口は「黄」、上6文字は殿かれる)⑥碑文:無し⑦龜趺:獸首…首は斜め上方に短くもたげる。耳有り、口角僅かに開く、牙有り/尾無し(甲羅の後端が尖る)/甲羅…無文⑧碑身:板状、頭部櫛形、主銘(額内)周囲に瑞雲浮彫り(雜)/碑首…碑身上部を正面側に張り出す、方角あり、瑞雲・双龍を浮彫り⑨石材:凝灰岩⑩備考:友賀は福屋省江夏郡の人。易に精通。鳥津義弘一家に重用される(朝鮮出兵従軍、鹿児島城塞城時の古いや頼張り、薩南学派(朱子学)の高僧と親交。「瑞漢」号は聖護院門跡より贈号/形態は桐原正左衛門墓石と類似

桐原正左衛門墓石①場所:始良市植原(塾居地)②概要:桐原正左衛門墓石(2代藩主鳥津光久御近。軍学・兵道・剣術に優れ門弟多し)/没年不明③造立者:門弟「…為師孝立」(左側面)、子「…孝子口白」(背面)④造立年:元禄2年(1689)「元禄二己巳二月七日為師孝立」(左側面)⑤主銘:「且か空かて人居土桐原正左…」(文字は殿かれる)⑥碑文:無し⑦龜趺:首…次失(版面形状から首を高くもたげていない)/鬚尾/甲羅…無し⑧碑身:板状、頭部櫛形、主銘(額内)周囲に瑞雲浮彫り(雜)/碑首…碑身とは突帯で画す、方角あり、双龍浮彫りか⑨石材:凝灰岩

伊集院源次郎忠貞墓①場所:始良市、実忠寺跡付近(鳥津義弘室菩提寺)②概要:伊集院源次郎忠貞墓(住内の乱首謀、鳥津家に降るが後に誅戮される)/慶長7年(1602)没③造立者:木田杉森門名頭の新右衛門「…造立/新右衛門敬白」(右側面)④造立年:元禄8年(1695)「元禄八乙亥六月廿九日此石塔造立…」(右側面)⑤主銘:「心香良安庵主伊集院源次郎殿墓」(赤彩、下6文字は殿かれる)⑥碑文:無し⑦龜趺:獸首…首は斜め上方に短くもたげる。耳有り、口閉じ(口角は開く)、牙有り/鬚尾/甲羅…無文⑧碑身:板状、頭部櫛形、主銘(額内)周囲に宝相華唐草文線刻/碑首…碑身上部を正面側に張り出す。方角あり、瑞雲線刻⑨石材:凝灰岩

法印覚祐墓石①場所:薩摩川内市、栄源寺跡墓所(真言宗)②概要:法印覚祐墓石③造立者:不明④造立年:記銘は宝永3年(1706)「寶永三丙戌十一月八日寂」(塔身側面)⑤主銘:「法印覚祐」(篆書、赤彩)⑥碑文:無し⑦龜趺:簡易な作り、基台と一石 龜首…首は斜め上方にもたげる。耳有り(長い)、口閉じ(沈線)、牙無し/鬚尾…太い/甲羅…無文⑧碑身:円柱形、荷葉形並あり⑨石材:凝灰岩⑩備考:同墓所内に寛文7年・覚祐銘の板碑あり

法印覚祐墓石供養塔結束碑①場所:薩摩川内市、瑞瑞光寺跡墓所(真言宗)②概要:法印覚祐の供養塔造立の結束記銘碑③造立者:「権律師快珠」等26名④造立年:宝永3年(1706、覚祐没年)以降⑤題字等:無し、碑正面3段に26名の戒名連記、碑身右側面に墨書「覚祐□□」⑥碑文:無し⑦龜趺:簡易な作り、基台と一石 獸首…首は短くもたげる。耳有り(長い)、口閉じ(沈線)、牙無し/鬚尾…太い、先端丸くない、無文(鬚毛表現無し)/甲羅…無文⑧碑身:板状、笠・露盤・宝珠は後家合せ/⑨石材:凝灰岩⑩備考:同墓所内に大形の覚祐供養塔あり、塔身方柱形で塔身正面に種子カシマン(不動明王)・法印/覺祐/墓位。(年記銘無し)。

森山亨庵碑①場所:始良市、本誓寺跡(鳥津義弘創建)②概要:森山亨庵事績碑(名臣、薬種業を営み資産家)/享保7年(1722)没③造立者:不明、碑文に孫の漢詩あり④造立年:碑文は享保7年(1722)「維時享保七年玄黙□□格小春廿五費」⑤主銘:正面額内「…賢法橋」(赤彩、碑文に戒名「元哲親賢法橋」)、額外左右「享保…/七月二十五…」(赤彩)、「…」は殿かれ不明⑥碑文:3面(左一右一)⑦撰文:「洞雲院廓能作銘書」⑧龜趺:首…次失(首は斜め上方にもたげる。版面形状から細い)/鬚尾/甲羅…亀甲文(単沈線、後方は各亀甲の形・大ききを変え)⑨碑身:方柱形、頭部櫛形、上位に円孔あり⑩石材:凝灰岩⑪備考:碑文中の嫡孫漢詩に亨庵を「儒道盡精誠…取堪聽上卿」と評する

鹿児島藩5代島津重豪実母「愛染経百萬遍唱誦成就」碑①場所:鹿児島市、福昌寺跡(曹洞宗)鹿児島藩主家墓所、5代藩主継豊母須磨窟(宝印田塔)の前②概要:須磨の愛染経百萬遍唱誦成就を記念、子孫繁栄・国家安全を祈願③造立者:須磨か④造立年:碑文は享保10年(1725)「享保萬年第十二乙巳八月吉祥日」⑤主銘:「奉唱誦愛染明王咒一百萬遍成就所」⑥碑文:1面(背、赤彩)⑦撰文:福昌寺僧侶「沙門師一蓮志」⑧龜趺:獸首…首は直にもたげる。耳有り、顔の先端が欠失し口の閉開・牙の有無不明、口角は唇有り(沈線)/蛇尾/甲羅…亀甲文(2本一単位突帯文)/基台…龜趺と一石で四隅を切り込み平面雲形⑨碑身:方柱形(側縁は丸く仕上げ)、頭部平頭雲形、正面上位に月輪/ウーン(愛染明王、赤彩)/月輪下に蓮華座浮彫り⑩石材:凝灰岩

鹿児島藩8代島津重豪実母都美碑①場所:始良市、長年寺跡(曹洞宗、本藩菩提寺福昌寺の末寺)、都美墓(五輪塔)の

陶、石細あり ②概要：鳥津郡美(7代藩主重年室・8代藩主重豪実母)の33回忌供養碑「嗚呼惟我先太夫人既葬之三十有三年其子思昭(重豪)表於其阡…」/延享2年(1745)没 ③遺立者：8代藩主重豪 ④遺立年：碑文は安永6年(1777) ⑤篆額：「太夫人鳩津氏墓前」(赤彩) ⑥碑文：2面(正・背、正は赤彩) ⑦撰書：正面撰は思昭(重豪)「薩隅日三州守兼領琉球國源史昭記」、書は近臣山田明道「近侍掌務臣山田明道遠瀛沐拜書」、背面撰書は山本正誼「知學事臣山本正誼書其陰撰按」 ⑧亀趺：写実的 獣首…首は斜め上方に短くもたげる、眼珠は彩色(白目は黒・赤目は黒)、耳有り、口閉じ、唇有り(隆起)、牙有り/蛇尾/甲羅…側縁に挟りを入れ花弁形、亀甲文(3本一単位沈線)、後方に縦の稜線(骨状帯) ⑨碑身：方柱形(側縁は丸く仕上げ)、頭部平坦隅丸、正面碑面(額内)周囲に瑞雲浮彫り/碑首…碑身部とは突帯で両す、方孔あり、双龍・瑞雲浮彫り ⑩石材：凝灰岩 ⑪備考：山本正誼は藩儒、造士館初代館長/碑前の水盤銘も山本正誼(安永6年)

鳳山軒(明約)碑 ①場所：始良市、椿意寺跡(現加治木郷土館に移設) ②概要：椿意寺中興曾明約の事績・顕彰碑(朝鮮出兵時拈筆、椿意寺中興、隠居後の寛永4年頃に鳳山軒創建) ③遺立者：椿意寺19世元徹 ④遺立年：記銘は天明5年(1785)「天明五乙巳正月八日」(背面) ⑤題字等：無し ⑥碑文：1面(正) ⑦撰文：「開山十九代前椿意大藏元徹誌焉」(背面) ⑧亀趺：亀首…顔は亀様、首は斜め上方に短くもたげる、耳無し、口閉じ、牙無し/蛇尾/甲羅…側縁に挟りを入れ花弁形、亀甲文(3本一単位) ⑨碑身：板状、頭部平坦隅丸 ⑩石材：凝灰岩

鹿兒島藩8代鳥津重豪碑 ①場所：鹿兒島市、福昌寺跡(曹洞宗)鹿兒島藩主家墓所、重豪墓(宝篋印塔)の前、石細あり ②概要：8代藩主重豪の事績碑/天保4年(1833)没 ③遺立者：10代斉興か ④遺立年：天保10年(1839)「天保十年歲次己亥秋八月廿日建」 ⑤題字：碑首篆額「故從三位/大信公碑」、碑身文頭「皇祖考故從三位行左近衛中侍薩隅日三州國主兼領琉球國源大信公神道碑并序」 ⑥碑文：碑身4面、基台は2面(背-右) ⑦撰文：碑身は10代斉興「孫參議正四位下行左近衛中侍薩隅日三州國主兼領琉球國齊興撰撰」、基台碑文は五代秀堯「本府知國史館/事臣五代秀堯鑑/沐拜手撰撰」 ⑧亀趺：獣首…大人しい顔つき、首は斜め上方に高くもたげる、耳有り、口閉じ、牙無し/蛇尾/甲羅…側縁に挟りを入れ花弁形、亀甲文は隅丸の台形・五角形(緑線のある突帯により区画) ⑨碑身：方柱形(縦側縁は丸く仕上げ)、4面とも碑面(額内)周囲に瑞雲浮彫り/碑首…別石、碑身より幅広、頭部平坦隅丸、正面は篆額周囲に双龍・瑞雲を浮彫り、他3面は瑞雲浮彫り ⑩石材：凝灰岩 ⑪備考：基台「大信公碑陰記」の撰者五代秀堯は藩儒、碑造立に際し中国から亀趺に関する位階制度・形態を学んだとある

【亀趺を持つ灯籠】磯置原神社亀趺灯籠 場所：鹿兒島市、磯置原神社 寄進者：「愛甲次右衛門」等9名(赤彩) 遺立年：記銘は安永9年(1780)「安永九庚子十二月廿二日」(赤彩) 主銘：「奉寄進」(赤彩) 亀趺：獣首…首は斜め上方にもたげる、耳有り(現状欠)、口閉じ、唇有り(隆起)、牙の有無不明(顔の先端欠失)/蛇尾/甲羅…側縁に挟りを入れ花弁形、亀甲文(2条一単位突帯)、基台…亀趺と一石・四隅を切り込み平面雲形 竿：六角柱、記銘あり 中台：六角形、荷葉形 石材：凝灰岩 備考：火災より上部は欠失(中台上面に浅い例りのみあり)

金剛寺跡の西南戦争慰霊亀趺灯籠 場所：霧島市、金剛寺跡、西南戦争慰霊碑「丁丑戦込の家」の碑前 寄進者：「石塚七十郎」以下95名(赤彩、西南戦争戦没者氏名に一致無し) 遺立年：記銘は明治14年(1881) 主銘：「干城四番」・「慰霊燈(行書)」 亀趺：獣首…首は斜め上方にもたげる、耳有り、口閉じ、牙無し/蛇尾/甲羅…亀甲文(2本一単位突帯)、基台…平面六角形、記銘あり 竿：龍柱形、龍・瑞雲・波瀾(下位)を浮彫り、上位に宝珠(一石、円孔あり) 石材：凝灰岩

熊本県

菊池武敏亀趺墓(1341年没、大分県宇佐市、明治24年銘)は民地内であって未発見のため扱っていない。

菊池15代武光碑 ①場所：菊池市、正観寺(臨濟宗、武光開基)、墓標と伝わるクスノキの前 ②概要：武光事績碑(懐良親王を奉じ九州における南朝の最盛期を開く、九州都督将軍・百戦百勝の名将と称される、菊池五山を定めるなど文化振興に尽くす)/文中2年(1373)没 ③遺立者：宗伝次「菊池宗英監字得次撰建」(限府の豪商、慈善事業・文化振興・菊池氏顕彰に努める、菊池氏家臣の後裔) ④遺立年：安永9年(1780) ⑤題字：主銘「菊池正観公之碑銘」、碑文頭「菊池正観公神道碑」 ⑥碑文：1面(背、風化) ⑦撰書：撰は藪孤山「熊府府学祭酒義士厚撰撰」(名怨・字士厚)、書は洪江公豊「瀧江公豊子編撰書」(字子淵・号紫陽) ⑧亀趺：獣首…首は直にもたげる、耳有り、眉上隆起が前方に張り出す、口閉じ、唇有り(沈線)、牙有り/石材…別石、大きく高く跳ね上がる、下面は花弁状文(立体的)/甲羅…亀甲文(単沈線) ⑨碑身：方柱形、頭部彫形 ⑩石材：砂岩(観音岳産) ⑪備考：藪孤山は藩儒・藩校時習館学長/瀧江公豊は天地元水神社神職・儒者、菊池文教の祖といわれ私塾「集玄亭」で多くの門弟を教導、菊池氏の顕彰に努める

菊池13代武重墓 ①場所：菊池市、東福寺歓喜院跡(天台宗、菊池五山一位、武重は隠居後に創製して歓喜院と号す、本院で死去) ②概要：武重墓、石細あり(武時嫡男、父の功により後醍醐天皇より肥後守護に任じられる、菊池家室を定め内政安定を図る)/興国3年(1342)没 ③遺立者：一説には藩部代中村庄右衛門正幹 ④遺立年：文化13年(1816)年、年記銘は無し ⑤主銘：「菊池肥後守武重朝臣之墓」 ⑥碑文：無し ⑧亀趺：獣首…首は直にもたげる、耳有り、眉上隆起が前方に張り出す、口閉じ、唇有り(隆起)、牙有り/寶尾…別石、大きく高く跳ね上がる、下面は花弁状の模刻/甲羅…亀甲文(単沈線) ⑨碑身：方柱形、頭部彫形 ⑩石材：安山岩 ⑪備考：背面「興国三年辛巳八月三日卒去」(興国3年は壬午)

菊池 23 代政隆墓 ①場所：菊池市、安国寺（現天台宗、自刃地）②概要：政隆墓、石欄あり（本家最後の当主、肥後守護、再起をかけた久米原の戦いに敗れ陣所安国寺で自刃）／永正 6 年（1509）没〔永正六年閏八月十七日卒〕（背面）③造立者：不明④造立年：奉獻刻龍銘は嘉永 4 年（1851、それ以前の可能性）⑤主銘：「菊池公政隆之墓」⑥碑文：無し⑦亀趺：獸首…首は直にもたげる。耳有り、眉上隆起が前方に張り出す。口閉じ。牙有り／箕尾…高く跳ね上がる。下面是花卉状の線刻／甲羅…亀甲は扇状文（簡略化、単文様）⑧碑身：方柱形、頭部飾形⑨石材：安山岩⑩備考：同石欄内に政隆の笠塔婆墓石あり。主銘「嚴道院殿天仙源祐大居士」。18 世紀前半の型式／同石欄内に転葬集中、最後は矢尽き石を投げて戦ったとの伝承から石を供えることと南無が治るとの信仰による

菊池 17 代武朝碑 ①場所：菊池市、真徳寺跡（臨濟宗、正観寺末寺、武朝の菩提寺）、丘陵斜面の造成地に位置②概要：武朝事績碑（南朝退勢期の当主、託麻原の戦いに勝利、南北朝合一後に肥後守護）／応永 14 年（1407）没③造立者：小林次次郎「前市會議員小林次次郎氏ノ特志ニ依り此ノ碑ヲ建テ」④造立年：碑文は昭和 37 年（1962）「昭和三十一年十月十八日」⑤主銘：「菊池武朝公之碑」⑥碑文：1 面（背）⑦撰文：菊池文化顕彰会⑧亀趺：獸首…首は直にもたげる。耳有り、眉上隆起が前方に張り出す。口閉じ。唇有り（沈線）、牙有り／箕尾…高く跳ね上がる。下面是花卉状の線刻／甲羅…亀甲文（単沈線）⑨碑身：方柱形、銅線は小さく取厚、頭部飾形⑩石材：安山岩

追加資料（略記）

- 矢嶋家墓 4 基（1～4）** 場所：福岡県みやま市 概要：旧金仙寺（黄檗宗）より移転／矢嶋家は柳川藩士
- 1 陽泰院（行恒）墓 没年：元禄 4 年（1691） 造立年：元禄 5 年 碑文：2 面、「孝次子」行周撰文 亀趺：獸首、蛇尾（小） 塔身：花灯方柱形 石材：安山岩
 - 2 孤月軒（行周）墓 没年：享保 9 年（1724） 碑文：無し 亀趺：獸首、蛇尾（小） 塔身：花灯方柱形 石材：安山岩
 - 3 怡徳院殿大居士墓 没年：明和 2 年（1765） 碑文：無し 亀趺：龜首、裳尾 塔身：花灯方柱形 石材：凝灰岩
 - 4 覺院院殿大居士墓 碑文：無し 亀趺：獸首。尾部欠（現況から 2・3 と同様の小さい蛇尾と判断される） 塔身：花灯方柱形 石材：安山岩 備考：年記跡無し、18 世紀前半頃の型式

放生池碑 場所：佐賀県白石町観島神社 造立年：文化 10 年（1813） 碑文：有、東遠良恩撰 亀趺：獸首、裳尾 碑身：経巻形 石材：安山岩 備考：亀趺の造形は武雄市焼山の聖田碑に近似（同じ石工あるいは同系派の石工による制作）

祖霊社碑 場所：佐賀県鹿島市鹿島城跡 碑文：無し 亀趺：獸首、裳尾 碑身：自然石 石材：亀趺は安山岩、碑身は緑泥片岩 備考：年記跡無し、19 世紀後半造？（「衆家碑」など周辺石造物の造立年や主銘箱形から）

大乗寺跡亀趺 場所：鹿児島県日置市大乗寺跡（曹洞宗、日置薩摩家菩提寺・墓所） 概要：碑身欠、現状は石祠が乗る（後家合せ） 亀趺：龜首、蛇尾 石材：凝灰岩 備考：亀趺上面のホヅ穴から碑身は方柱形であったと考えられる

第 3 表 儒者による撰文事例一覧 ※アミかけは方柱形

年代	名称	場所	形制	造立者	撰者
寛文 12 年（1672）	龍	唐津藩大久保初代忠職碑	唐津市大久保緑地	亀趺碑	子2代忠朝 林鳳岡（背面追記）：幕府弘文院學士
延享 6 年（1678）	龍	宮之城馬場4代久孫碑	三つ町宗功寺跡	亀趺碑	子5代久竹 長野崎・幕府弘文院學士
元禄年間 寛政元年（1789）	再造	立花家祖高橋頼綱墓	大牟田市法輪寺跡（三池藩宗家墓所）	方柱形 平頭圓丸	6代頼綱 6代頼綱再造 元禄藩閩人安東春彦、柳川藩閩人「海西の巨魁」寛政頼綱再撰 芳賀 貞・三池藩儒
正徳元年（1711）	龍	佐賀県志木藩2代立塚碑	鹿島市菅明寺	亀趺碑	子3代智電 孫4代重徳再造 林鳳岡・幕府弘文院學士
宝暦 4 年（1754）	再造				
正徳 3 年（1713）	龍	聖賢「大空集林」記念碑	多良市西浜公園	亀趺碑	武家成亮 武家成亮・佐津藩儒、聖賢「大空集林」建設
享保 5 年（1720）		大言寺開山伝言上人碑	長崎市大言寺	亀趺碑	不明 佐生世徳・儒者、祖孫高橋徳
明和 8 年（1771）	龍	熊本藩家老初代井原康之碑	八代市彰光寺	櫛形方柱形	6代豊之 萩 孤山・熊本藩儒、藩校吟習館長
延享 2 年（1744）	没	唐津藩藩士3代利経墓石	唐津市安政寺	尖頭方柱形	藩4代利里 福森江奇・唐津藩儒、藩主家侍従
安永 6 年（1777）	龍	鹿児島藩藩邸東門碑	鹿児島市長年寺跡	亀趺碑	子9代重光 山本正徳（背面）：鹿児島藩儒、藩校造士部長
安永 8 年（1790）	龍	菊池 15 代武光碑	菊池市正観寺	亀趺碑	宗 松次 萩 孤山・熊本藩儒、藩校長 浪江公豊堂・儒者、菊池文藝の祖
寛政元年（1789）	龍	三池藩祖立花貞次碑	大牟田市法輪寺跡	方柱形 平頭圓丸	6代頼綱 芳賀 貞・三池藩儒
寛政 6 年（1794）	龍	立花家祖高橋頼綱墓	太宰府市前庭城跡	櫛形方柱形	三池藩6代頼綱 萩 孤山・熊本藩儒、藩校吟習館長
天明 3 年（1825）	龍	岡藩家老井上玄古碑	豊後大野市井上墓所	亀趺碑	子芝増 南條義山・岡藩儒、『豊後国志』編纂
天保 10 年（1839）	龍	焼山の聖田碑	武雄市	亀趺碑	不明 萩春藤川・本藩・多良島藩家領引 茶畑頼徳之弟公忠孝・幕府書指筆、儒者
天保 10 年（1839）	龍	鹿児島藩8代島津重豪碑	鹿児島市福昌寺跡	亀趺碑	孫10代奇典 五代春徳・鹿児島藩儒、記録奉行



4 大牟田市法輪寺跡 高橋紹雲塔



3 柳川市天叟寺 高橋紹雲塔



2 姫路市御着城跡 小寺重暲塔・灯籠(糸島花園岡緑岩)



1 柳川市福藏寺 戸次道雪塔



8 竹田市 中川清秀・秀政塔



7 平戸市普門寺 松浦弘定墓石類



6 佐賀市高伝寺 鍋島清房塔



5 柳川市福藏寺 戸次道雪塔



12 西都市栄岸寺跡 米良重次墓石類・嘉永4年銘



11 八代市 下相良義陽塔



10 宮崎市清武城跡 伊藤祐国塔



9



16 熊本市 鹿子木涙心墓石類



15 熊本市 内古園基貞塔



14 高森町 高森惟直塔



13 和水町 由布大炊助墓石類

第1図 九州における中世領主・武将の墓石類(1)



19 鹿児島市福昌寺跡 中世島津氏宝篋印塔整備



18 山鹿市 小西行長墓石類



17 津久見市 大友宗麟塔



22



21



20

岩路市功山城跡近く 小寺重隆塔・灯籠(糸島花園閃緑岩)

人吉市願成寺 中世下相良氏五輪塔整備



26



25



24



23

山都町 阿蘇権種塔・石櫓銘「村役人世話人ノ氏子中」

鹿児島市大川寺跡 川田義朗塔・灯籠



30



29



28



27

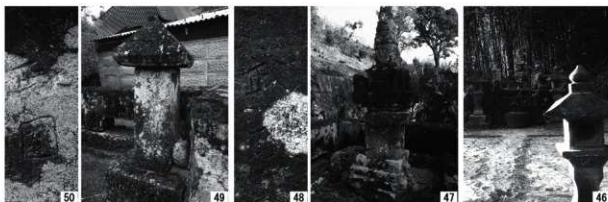
八代市泰勝院跡 織田信長供養塔・地輪追刻銘

大分市 長宗我部信親塔・明治22年銘慰霊碑

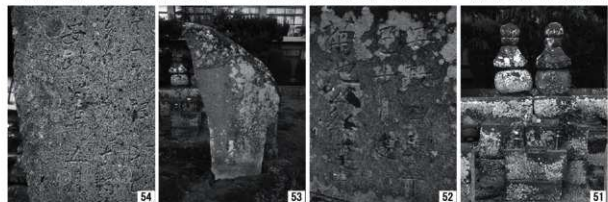
第2図 九州における中世領主・武将の墓石類(2)



第3図 菊池氏の墓石類(1)



菊池市正観寺 菊池武国塔・塔身追刻銘 (50) 菊池市正観寺 菊池武政塔・塔身追刻銘 (49) 菊池市正観寺 菊池武政塔・塔身追刻銘 (48) 菊池市正観寺 菊池武政塔・塔身追刻銘 (47) 菊池市正善寺 菊池兼朝墓城 (46)



菊池市美相院跡 菊池能運塔 (51) 同石群記銘 (52) 同墓前顕彰碑 (53) 年記銘 (54)



美相院跡 菊池武時等遙拝所碑 (58) 菊池市若宮神社 伝菊池経隆廟 (55) 顕彰碑・筑江公正銘 (56・57)



菊池市菊之城跡 菊池則隆墓前灯笼年記銘 (61)・標柱 (62) 歡喜院跡 菊池武重墓顕彰碑 (60) 正観寺 菊池武光碑前灯笼 (59)

第4図 菊池氏の墓石類 (2)



66 給良市長年寺跡 島津重豪実母都美碑・龜趺尾部(蛇尾)



64 北九州市 小笠原忠真墓石



63 福岡市崇福寺 黒田如水墓石



70 唐津市 大久保忠職碑



69 給良市 鳳山軒碑(龜首)



68 給良市能仁寺跡「道之墓」



67 給良市 江夏女實墓



74 鹿島市普明寺



73 鍋島直條碑(72・73), 同「寿塔」



72 形式墓石(74)



71 大久保忠職碑・基礎線刻



78 五島市大円寺 毘盧藏闍碑



77 多久市 大宝聖林碑

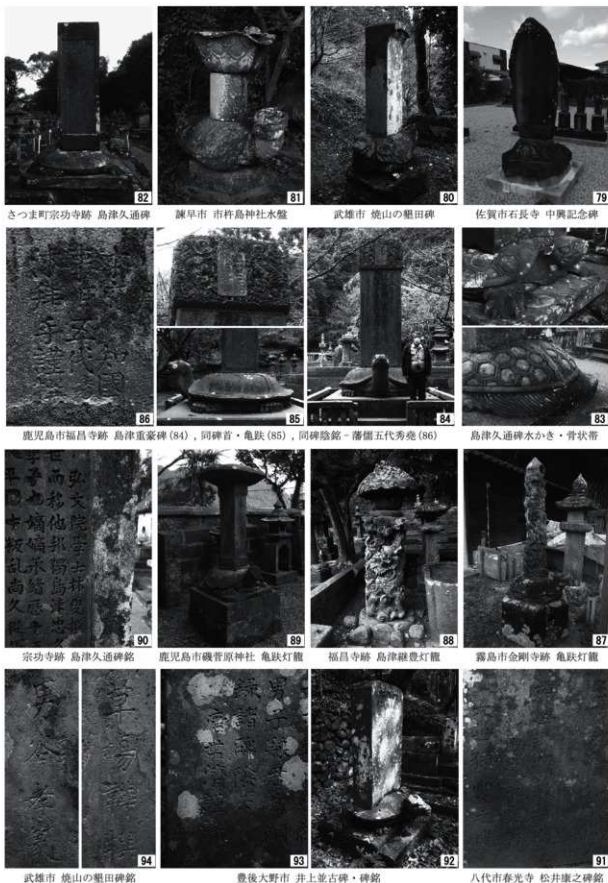


76 長崎市大音寺 伝誉上人碑



75 小城市玉竜寺 鍋島直員室墓石

第5図 九州の雙趺碑類(1)



第6図 九州の臺趺碑類 (2)



98 菊池氏正観寺

97 菊池武光碑

96 神戸市湊川神社

95 楠木正成碑・亀首



102 菊池市歡喜院跡 菊池武重墓(100-101), 同龜趺・尾部(102)

99 正観寺 菊池武光碑尾部



106 菊池市真徳寺跡 菊池武朝碑

105 菊池市安国寺

104 菊池政隆墓

103 獸首, 武光碑(上)・武重墓(下)



109 『八代妙見宮祭礼巻絵』(八代市立博物館 2011)

108 真徳寺跡 菊池武朝碑(107), 同獸首・尾部(108)

第7図 菊池氏の亀趺碑類

石造物からみた菊池一族について—菊池市巨輪足山松林院東福寺を中心として—

高橋 学

はじめに

近年、菊池一族が注目されている。これには昨今の南北朝人氣の高まりもあるがそれだけではなく、菊池市による継続的な取り組みも一つの要因だと考えられる。その菊池市による菊池一族研究のテーマを見てみると、文献史学、民俗学、考古学と幅広いテーマで研究が進められている。その考古学の分野の1つに石造物研究がある。従前、石造物の研究は石造美術に代表される美術史の一分野と捉えられがちであった⁽¹⁾。しかしながら、近年、石造物を考古学的な研究テーマとすることが増加している。過去二回の菊池一族の研究課題を見ても、石造物からのアプローチはない。今回、石造物を切り口として、菊池一族について迫るのが論旨である。具体的な手法として、菊池一族に関係すると推測される主に中世期の石造物を対象とし、他の石造物と比較することで、石造物からみた菊池一族の特徴や背景を考察していきたい。

一、対象について

菊池市内の石造物に関しては『菊池市史』などに記述があるが、残念ながら総体の把握までは至っていないのが現状である。本来、市内の悉皆調査を行い、それぞれ資料化を進めることが本義とは思われるが、今回は

時間的な制約もあり検討資料を限定することですすめたい。

まず、主に対象とする石造物については、熊本県菊池市巨に所在する輪足山松林院東福寺⁽²⁾（以下、東福寺と略す）境内の石塔・石碑等とする。これらの資料化を計り、歴史資料として位置づけることを目的とする。

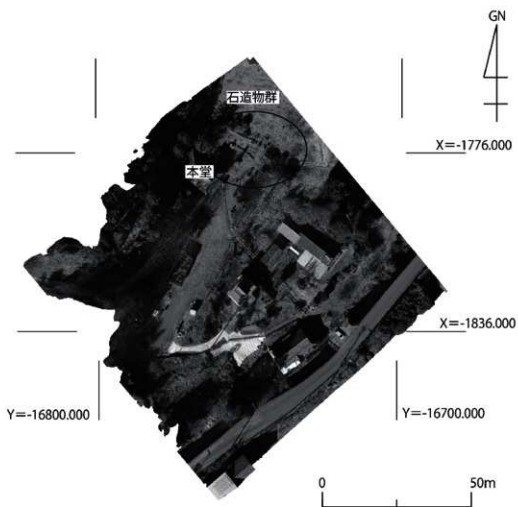
二、東福寺石塔群の調査

●東福寺について

東福寺は、天台宗延暦寺正覚院の末寺で、『肥後国誌』によると天慶元年（九三八）證慶法印の開基とされ、かつては寺領二十五町歩、末寺も十五カ寺以上を数えた。寺の前面に広がる巨集落付近は寺に関係する屋敷地が広がっていたと言われ、現在の寺の門前あたりは墓地であったとされる⁽³⁾。菊池武光の代、京都・鎌倉の五山にならって菊池におかれた菊池五山の1つである⁽⁴⁾。寺の立地は菊池市の中央西部にある阿蘇溶結凝灰岩で形成された城山台地の東斜面に位置する（第1図参照）。現在の寺の門前を加藤清正により作られたと伝わる築地井手により導水された水が流れている。境内は北西から南東開けた城山の谷部に展開しており、現在の本堂は、標高86mの平場に建てられている（第2図参照）。熊本県の遺跡地図によれば、東福寺遺跡として本堂裏から平安・中世期の青磁・白磁、骨磁器の壺などの発見が記録に残るが、詳細は確認できなかった。



第1図 城山台地と東福寺（北東から ドローン撮影）



第2図 東福寺境内オルスー図

また周辺には古墳時代の築地横穴群があり、築地井手に面して露頭する岩壁を掘削して構築されている。
東福寺の本尊は平安時代末期の作とされる千手観音菩薩立像。他に、室町時代作の不動明王立像、同毘沙門天立像や紺本着色不動明王画像もあり、併せて熊本県指定文化財である。

● 石塔群について

境内の石造物の主立ったものについては個別に番号を付与し調査を行った(第3図参照)。寺伝によると先述の築地井手の構築の際に、墓地が整理され、墓石関係は境内内(現在の場所)に移築された。石造物は本堂の北側に上下段の二段の平場に分かれて設置されている。上段の石造物は東から1番、28号、東端の標柱を29号とした。下段の石造物は五輪塔が並ぶ30号、43号、それ以外のものを49号とした。上段の石造物の帯磁率と石材についての詳細は、表2を参考にしたい(頁5)。

第1号(図4、図15)

境内から園路沿いに低い階段を一段上がった平坦面の東に位置する。外柵に囲まれた中心に後家合わせの五輪塔が所在する。高さ1.15m。幅0.46m(幅は石塔を構成する部材の最大幅とする。以下同じ)。地輪が2つ重ねてあり、一番下の地輪には元弘三年(1333)の紀年銘があるとされてきた。この石塔は菊池覚勝(第十二代武時の弟、菊池三郎覚勝)の墓と伝わっている。銘文に関しては「菊池市史」を参考にした。現状が明らかに市史作成調査時よりも石造物の状態が悪化しているため、すでに判読不能な字がある。具体的には、地輪上部に近い所が雨水による侵食・剝離により毀損が進んでおり、一行目の弘の字は下部しか残っていない。



第3図 東福寺石塔 配置図(南から)

同行三月以下の「十三日」は読むことが厳しい。また、三行目の三十六の「三」は現状では二にしか読めない。下から2つの地輪について、本来は同墓所の他の石塔と同様に石材保護のため下に敷いていたものと考えられるが、現在は上下逆転して設置すべきと考える。読めない箇所を補填しても、遠の地輪の上下を逆転して設置すべきと考える。読めない箇所を補填しても、遠「基入道寂正」という銘文があったのかは現状では不明である。さて水輪だが、これは上下逆転して据えられている。後世に手を入れた際に見た目の安定感から往々にしてこのような逆転現状が認められる。水輪四面に金剛界四仏の種子が彫られている。種子は薬研彫りでなく、また彫りが浅く字体に丸みがあるため、中世後期のものと推定できる。種子構成から金剛界四仏を表したものと理解できるが、本来「アク（不成成就如来）」であるはずが、種子の右側に涅槃点が無いため「ア（胎藏界大日如来）」になっていることに特徴がある。なお水輪の現在の正面は本来、西にあたる阿弥陀となっている。火輪は軒反りが比較的薄く軒も厚くなく、屋根の勾配も緩やか。同塔内では下から2つ目の地輪が凝灰岩の他は、阿蘇溶結凝灰岩の黒が使われているが、この火輪には赤みを帯びたものが使用されている^(六)。空風輪は風輪部に蓮華文を彫り出している。空風輪と水輪は表面を細かく削って平滑に仕上げしており、中世後期のものと考えられる。また地輪に銘文を刻字する行為は鎌倉時代段階では一般的でないため、この地輪の銘文は年号そのものの時期ではなく、後世に刻まれたものと考えられる。地輪のみから年代を考察するのは難しいが、十六世紀代との意見もある^(七)。よってこの五輪塔は時代が下つてから作られたいわゆる顕彰碑に類するものと位置づけられる。また五輪塔の周辺には石で囲いがされているが、石材の加工技術から近代以降のものと考えられている（池田氏）^(八)。指示。

第2号（図5、図15）

第1号の背後にある無縫塔。高さ1.38m。基礎石の幅1.04m。明和八年（1771）の銘が入っている。種子は「ア」で胎藏界大日如来と思われる。慈光院大堅者法印光尹霊塔とあり、光尹という名の僧の墓である。

第3号（図15）

第2号の奥で、平坦面の奥にある位牌塔形近世墓。高さ2.41m。幅0.79m。正面に、火灯窓形の彫り込みがあり、そこに種子は「ア」法眼妙光秀望和尚と彫る。右側には、圭頭形の彫り込みがあり、そこに文化四（丁）卯李。文化四年は1807年。左側に同様の彫り込みがあり、そこに十一月十日寂、裏面は何も彫られていない。秀望という名の僧侶墓と考えられる。

第4号（図15）

第2号の西側にある櫛形近世墓。高さ0.82m。幅0.58m。正面に火灯窓形の彫り込みがあり、そこに二列戒名が彫られている。向かって右に、種子「ア」捨院日頭信士。左は、種子「ア」妙教院法山信士。右面には櫛形の彫り込みはあるが刻字はない。背面は手を加えていない。左面には「天明六丙午年 八月十日 俗名近藤平八」と彫られている。天明六年は、1786年である。

第5号（図5、図15）

石碑。高さ1.11m。幅1.24m。自然石の荒積みの上に薄い平石を据え、その上に石碑を差し込み安定させている。碑は安山岩製。享保八年（1723）の銘あり。第35代東福寺住職大阿闍梨焉立大和尚の供養碑か。焉立大和尚は東福寺中興の祖で、享保元年（1716）に本堂南側にある乙護法堂を建立したと伝わる^(九)。

第6号（図6、図15）

五輪塔の後家合せ。高さ0.98m。幅0.42m。地輪の銘文によると第二十二

代任職権大僧都澄性法印の墓。在世七十歳。享徳三年（1454）甲戌七月十二日に逝去。地輪中央の種子は、**マ**に空点と莊嚴点がついている。**三**アンで胎藏界大日如来を表す。水輪には種子**ム**パーが一字のみ葉研彫りで刻まれている。火輪はやや軒反りし、軒裏も丸みを持つ。火輪のみ赤い阿蘇溶結凝灰岩製で、他は同種の黒い石材を使用している。

第7号（図6、図15）

五輪塔の体裁をとっているが、後家合せ。高さ0.98m。幅0.44m。一番下に敷かれている地輪は阿蘇溶結凝灰岩で阿蘇2か3と見られる。これは地面からの水の吸い上げを止めるためにあえて設置されてもので、石材の物理風化を防ぐ効果を期待して設置されたものと考えられる。その上の地輪には有名な建武三年（1336）の銘文がある。銘文の内容から菊池武村（別名、重富与一、十代菊池武房の末子の供養塔と伝えられている。石塔造立者と推定される沙弥空寂は、名前こそ出していないが（配慮してか）、京都の大渡橋で足利尊氏との戦いで亡くなった武村を悼んで彫った銘文かと考えられている。但し、第1号石塔と同じく銘文の年号と同時期のものではなく、後の時代に追刻が行われた物と考えられている。水輪は赤い阿蘇溶結凝灰岩で、四面に**マ**ア（胎藏界大日如来か）の種子を葉研彫りで勇壮に彫っている。水輪は上部を乱雑に割られており、完形ではない。火輪は軒が厚く、端で反り、軒裏も厚く反る。東福寺五輪塔の中では古相を示し鎌倉期のものと考えている。空風輪は中世後期の新しいものが乗っている。

第8号（図7、図15）

宝篋印塔で後家合せ。高さ2.02m。幅0.50m。最下部は菊鹿型宝篋印塔の基壇。六段基礎ではなく五段の階段状基礎で一石形成。最下段は基礎を意識してか他より高い。その上の銘文が彫られているのは菊鹿型ではな

い普通の宝篋印塔の基礎部で、上部に二段の上部段形が確認できる。銘文から順善という僧の逆修のためのもので、天文三年（1543）に作られている。その上部に、菊鹿型宝篋印塔の笠部がある。馬耳状隅飾りは縦三連でやや外反している。露盤は三段で、上部に深い柄穴が穿たれている。最上部には菊鹿型宝篋印塔の相輪が乗る。しかし、柄が上手く合わないのが本来の組み合わせではない。この東福寺石塔群では珍しい宝篋印塔の相輪として貴重である。

第9号（図7、図15）

縦長の塔身が自然石の上に載せられている。高さ0.47m。幅0.26m。笠塔婆の塔身か。最上部は欠損しているが、最上部の一部に円形の盛り上がり確認できるため、凸柄の跡かと思われる。中央上部に月輪があり、その中心に種子**ヨ**キリク（阿弥陀如来）がある。僧侶の逆修墓と考えられる。紀年銘は不明。大の字は確認できるので、石造物の特徴から、大永年間（1521-1527）と推定しておきたい。

第10号（図8、図15）

五輪塔の後家合せ。高さ0.84m。幅0.37m。地輪部に銘文あり。永享七年（1435）。種子は**マ**ア（胎藏界大日如来か）。種子の周辺は文字がわずかに残存しているが、意図的に削られているかのように判然としな。水輪は赤い阿蘇溶結凝灰岩だが、その他は黒い阿蘇溶結凝灰岩である。

第11号（図8、図16）

五輪塔の後家合せ。高さ0.91m。幅0.54m。敷かれた地輪の上に、銘文入りの地輪（蓮華座付き）が据えられている。その上部には水輪、火輪となる。上下逆転して据えられた水輪には四面に、**マ**ア（胎藏界大日如来か）の種子を葉研彫りで彫っている。また火輪の上部には露盤のような段が付けられている。ここでは水輪だけが赤い阿蘇溶結凝灰岩である。應永（応

永(八)年は、1401年。木庭城主越前守为重(号元仙)の墓とされている。¹⁴⁾

第12号(図8、図16)

後家合せ。高さ0.78m。幅0.29m。下に2つ地輪を転用して地ならし用に敷いている。その上に薄い地輪を置き、その上部に菊鹿型宝篋印塔の笠部を据える。一番上には、五輪塔の空風輪を据える。風輪には蓮華文が彫られている。中世後期か。低い地輪のみ赤い阿蘇溶結凝灰岩を使用している。

第13号(図8、図16)

後家合せ。高さ1.16m。幅0.45m。下段に菊鹿型宝篋印塔の基礎(6段一石彫成)を据えて、その上に笠塔婆の塔身を逆転させて据えている。その塔身の上に五輪塔の火輪と空風輪を据えている。風輪は蓮華文が彫られているもので中世後期か。笠塔婆の塔身には、第9号と同じ中央上部に月輪があり、その中心に種子 三三三 キリク(阿弥陀如来)が彫られている。僧妙能による第二〇代東福寺住職長能阿闍梨の供養墓か¹⁵⁾。紀年銘の判読は難しいが、残された文字から永祿九年(1566)の可能性を指摘しておく。

第14号(図9、図16)

銘入りの地輪の上に、菊鹿型宝篋印塔の基礎(5段一石彫成)が乗せられている。高さ0.54m。幅0.47m。地輪は、中央上部に種子 ムア (胎蔵界大日如来か)が彫られているが、後に意図的に削られている。応永三十年(1423)の年号は元号部分が削除されて無いため、三〇年と長く続いている元号に干支を組み合わせて整合するものを提示した。隆盛大僧侶の供養塔か¹⁶⁾。

第15号(図10、図16)

下部に菊鹿型宝篋印塔の基礎。高さ0.49m。幅0.42m。四段一石彫成。上部に菊鹿型宝篋印塔の笠部が乗る。笠部の上端部は破砕しているが、方形の柵穴が残存している。馬耳風隅飾は中央よりの下部が省略されていることから新しい段階のものと考えられる。

第16号(図9、図17)

菊鹿型宝篋印塔の塔身。高さ0.20m。幅0.30m。ここでは唯一となる貴重なもの。上部が破損しているが、下段段形が現状で一段、痕跡から判断して二段ついていた可能性がある。銘文から、文明十三年(1481)八月に逝去した佛乗院の住持大阿闍梨雄絃の供養塔だと考えられる。

第17号(図17)

第17号は五輪塔の空風輪のみ。高さ0.20m。幅0.17m。

第18・19号は基礎の敷石のため除外する。

第20号(図9、図17)

銘文入りの五輪塔地輪と、菊鹿型宝篋印塔の笠部を重ねている。高さ0.52m。幅0.32m。地輪は中央部に種子 三三三 キヤンが彫られている。文明五年(1473)五月に70歳で逝去した僧侶の供養塔か。

第21号(図9、図17)

地輪のようなものを2つ並べて敷いている。高さ0.62m。幅0.60m。その上に菊鹿型宝篋印塔の基礎を乗せており、この基礎は5段一石彫成である。最下段の軒に銘文が彫られており珍しい。宝徳二年(1450)に七十七歳で入滅した僧侶の供養塔。中央に「X」マークあり。

第22号(図10、図17)

後家合せ。高さ0.789m。幅0.35m。基礎の敷き石の上に、宝篋印塔の基礎が乗る。基礎には銘文あり。右に、天真長尊法□(印か)。中央に「X」マークあり、左に大永八年戊子とあり干支は合っている。大永八年は西暦では

1528年。銘文の最後を敬白とするのは新しい要素で、東福寺石造物ではこれのみ。僧侶の供養塔と考えられる。

第23号(図10、図17)

後家合せ。高さ0.73m。幅0.33m。地輪に水輪が2つ乗せられ最後は火輪が乗る。

第24号(図10、図17)

後家合せ。高さ1.12m。幅0.48m。基礎部に風化が進んで破損がひどいが、窟型宝篋印塔の笠部がある。その上に水輪が2つ重ねてあり、火輪、空風輪が乗る。

第25号(図10、図17)

後家合せ。高さ0.87m。幅0.36m。下の地輪の上部に蓮華座がつく。その上に水輪、火輪、空風輪と乗せられている。

第26号(図10、図18)

後家合せ。高さ0.78m。幅0.41m。下から地輪、火輪、空風輪。

第27号(図11、図18)

石碑。高さ0.95m。幅0.37m。二面に種子による真言が刻まれ、両側は銘文が彫り込まれている。右側面には空海撰『即身成仏義』の「二頌八句」の前四句が彫られている。正面には種子で、五輪塔四方五大の四字かが刻字されている。本覚讀は天台宗の勅行で使われるものであり、本来は境内に建てられていた碑であったと推測される。『即身成仏義』は真言宗のイメージが強いが、天台宗にも取り入れられていたのだろうか。今後の検討課題である。

第28号(図12、図18)

石碑の一部か。高さ0.44m。幅0.36m。上部に種子「ア」キヤが確認できる。可能性としては、上部にあと4文字あり大日如来真言の一種として、「ア、

ラ・カ・キヤと続くものと推測する。また、下部には僧の供養墓を思わせる文字が確認できる。寛正年間(1460/1466)の銘が入る。

第29号(図18)

第1号の東に位置する。角石柱。高さ0.99m。幅0.19m。内容から東福寺築池一族の顕彰碑である。明治30年(1897)。鳥崎石製。

第30号、第31号(図12、図13、図14、図18)

石造物群下段の五輪塔群。本来の組み合わせかどうかは不明。帯磁率的には一般的な範囲に収まる阿蘇溶結凝灰岩で阿蘇4と推定できる。目視レベルでは石材が柔らかい印象であり、手に取ると粉がつくようなレベルである。地輪が低いもの高いものに分けられる。第33号の水輪には種子「ア」(胎蔵界大日如来か)が彫られている。第38号の水輪にも四面に種子「ア」(胎蔵界大日如来か)が彫られている。同38号の火輪は他のものとは違い、阿蘇4でも硬質な石材を使っている。残念ながら種子の途中で上端分が割れて欠損しているが、残されている種子が「ア」(涅槃門(北))を示しており、残り種子からも五輪塔の三角「火」の四門種子であることが理解できる。通常の五輪塔に四門の種子を刻字する例は多いがここでは極めて稀である。第40号の地輪中央部には「永憲」と二字刻字されているが人名か。

第44号(図18)

五輪塔の部材の集積である。東西長2.78m。南北長2.14m。高さ1.67m。多くは水輪だが、一部空風輪、火輪、地輪が混じる。表に見える個数だけでも50基以上はある。地元の方の話ではこの辺りは元々竹林で鬱蒼としていたが、近年、寺の整備を地元で積極的に進めて、いまのように明るい景観となった。しかし平成二十八年(2016)の熊本地震で多くの石造物が崩壊してしまった。それらは出来るだけ元に戻したが、分からない

いものや軀がついていた石塔は集積してまとめておいた。それが44号の集積であるとのことだった。

第45号(図19)

後家合せの五輪塔が2基と石製銘板あり。銘板によると、左の五輪塔が東福寺十七坊歡清坊管守の元能大阿闍が寛正七年(1456)三月歿したことを示している。この部材は地輪に見えるが上部に方形の窪みがあり方形に塔身が組み合わされる可能性がある。また、十五世紀中頃にこのような刻字をするのかという疑問が残る。

第46号(図19)

圭頭状近世墓。

第47号(図14、図19)

石碑。高さ1.98m。幅0.85m。中央上部に月輪に囲まれた中心に種子・ア(胎藏界大日如来か)を刻み、その下部に蓮華座を彫る。また中央銘文の下部にも同様に蓮華座を彫っている。銘文によると、元禄三年(1690)庚午八月吉祥日に製作されたことがわかる。内容としては東福寺中興に係わった大阿闍梨の顕彰碑と推定できる。阿蘇溶結凝灰岩だが、阿蘇4ではなく非常な堅緻な阿蘇2・3を使用している。そのため、表面しか文字を刻み込めず文字の彫りが浅い。寺の住職にお聞きしたところ、平成二十八年(2016)の熊本地震で倒壊しておりその際に折れてしまったとのこと。現在、補修を施して立て直されている。

第48号(図19)

笠塔婆形石塔。高さ2.26m。1.29m。正面に、大乗妙典二石一字一部之塔。向かつて右側に安ノ永二突巳年春三月。安永三年は1773年。背面には、施主中嶋屋勝九郎。左手には、為両親菩提とある。つまり、江戸時代後期に建てられた両親の供養塔である。

第49号(図20)

巨大な石塔。高さ4m以上。幅2.22m。正面に應感塔と刻字されている。應感と感応と意味は同じで、仏が人に応じたはたらきかけ(応)と、人がそれを感じとる心のはたらき(感)を示しており、仏または仏と関わりをもつものを示す。塔身右側に安政三年(1856)丙辰とあと塔身左側には四月十八日と造立日が分かる。背面には願主として、隈府東本町 益田又七長廣 壽六十有六 益田彌三衛門 齡二十三とあり、益田一族により発願されたことがわかる。また基礎石に奉納して多くの名前が刻まれているため地域の人々も結縁して協力したことがわかる。

三 東福寺石塔群の分析

前項で石塔群の個別資料調査について記述してきた。ここでは、それら総体としてどのような傾向が抽出できるか検討していきたい。まずは紀年銘として、古い方から元弘3年(1333)、建武3年(1336)、応永8年(1401)、永享7年(1435)、宝徳2年(1450)、宝徳3年(1451)、文明5年(1473)、文明13年(1481)、寛正年間(1460/1466)、大永8年(1528)、元禄3年(1690)、安永3年(1773)、享保8年(1886)、天明6年(1786)、文化2年(1805)、安政3年(1856)、明治20年(1887)となる。これを表に纏めたのが表1となる。

表1から読み取れるのは、五輪塔の紀年銘は十四世紀代と十五世紀代に集中しており、とくに十五世紀は継続して確認が出来る。逆に十四世紀代の2例は時代が下つてからの追刻の可能性が高い。宝篋印塔は菊鹿型

表1 東福寺石塔群の消長

形態	14世紀	15世紀	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	備考
五輪塔	■ ■	■ ■ ■ ■					
宝篋印塔		■ ■ ■	■				■ 通常のもの
笠塔婆			■ ■ ■				
近世墓					■ ■		
近世塔					■	■	
石碑		■ ■		■ ■			
標柱						■	

凡例 ■ 紀年銘のあるものが存在
 ■ ■ ■ 紀年銘はあるが幅をもつもの

宝篋印塔が主でわずかに通常の宝篋印塔が混じっている。これら五輪塔と同様に十五世紀に分布の中心がある。この菊鹿型宝篋印塔については後述する。十六世紀は資料が少ないが笠塔婆が主となる可能性がある。十六世紀後半から十七世紀中頃まで紀年銘資料が確認できないのは、寺伝とよく整合しており中世から継続してきた寺の活動が、近世大名となった加藤清正による所領没収や井手開発行為に伴う境内地の改変などで寺の存続が危ぶまれたのではないかと推測される。その停滞した時期には、石造物の築造がみとめられないと考えられる。その反動とも言えるが、十七世紀後半、十八世紀前半に東福寺中興に係わる顕彰石碑が建てられたと考えられる。数は少ないが、近世墓、無縫塔、近世塔などが十八世紀後半、十九世紀中頃まで境内に建てられ、寺の活動が盛んになったことを感じさせる。また明治期には菊池一族の顕彰を表す標柱なども建てられている。以上は紀年銘資料の分布から考えられる流れである。紀年銘がない五輪塔などはその形や大きさ、種子の入れ方から判断して、東福寺や菊池氏に係わる人々の墓であり、その年代は十四世紀、十六世紀のものと考えられる。

四、菊池一族と石造物 東福寺の事例より

東福寺の石造物を調査・分析した結果、何点かの成果と課題が抽出できた。以下、簡条書きで表したい。

【成果】

① 東福寺石塔群の資料化を進めることができた。残念ながらこれらの石造物は原位置を保っておらず、当初の石材の組み合わせでもないなど、

直接的な資料価値は低いと考えられ放置されてきた。しかしながら部材ごとに考古学的調査手法で調査研究することで、歴史資料として新たな光を当てることができた。漠然と菊池氏関係と考えられていたこれら石造物群について、菊池氏に明確に関係すると思われる資料は、石塔第1号、第7号だけであるが、これらには時代は下るものもの強い供養や顕彰の意図が現れていると考えた。

② 銘が入る石造物の多くは東福寺の僧侶関係であることがわかった。それらは十五世紀のもので東福寺がその時代に栄えたことが推定できる。

③ 菊池一族への顕彰活動が何度か行われていることがわかった。古くは十五世紀段階、その後おそらく江戸時代に何度か、また明治から昭和の太平洋戦争に突入していく軍国教育に伴い忠臣菊池一族の顕彰が進められた。十五世紀段階の顕彰は供養とセットになったもの。石塔第1号、第7号が代表である。江戸時代の菊池一族の顕彰活動で特に東福寺に関係しているのは、東福寺の正面石段と石垣を、正徳二年(1712) 第35代住職馬立大阿闍梨の時に、渋江公実氏が限府中から寄付を集めて造られたと伝えられている^{〔三三〕}。この時期かは不明だが、江戸時代に石塔なども下に敷きならし用の石材をおいて主立ったもの(銘文があるもの)を列状に並べたのではないかと想像する。近代に至り、石塔第1号、第7号をとりかむ外柵が整備された。上の段に銘文入りと菊鹿型宝篋印塔を並べたのは、江戸時代に入り、寺の経営が安定した頃(十七世紀後半ぐらいか)に墓の整備をし、その段階に菊池一族に関係するというイメージが形成されており、それに準じたのではないだろうか。それらの要素がない五輪塔は、下段に揃えただろう。

【課題】

① 菊鹿型宝篋印塔の位置づけ、分布と型式編年(寛書)

今回の調査で同一地点から部材とはいえ、菊鹿型宝篋印塔が13点確認できた。これは近隣でも別格の正観寺を除くと群を抜いて多い^{〔三四〕}。菊池氏と石造物の関係を考えるうえでもこの菊鹿型宝篋印塔が大きな鍵になることがわかった。そのため第五章で個別に考察を加えてみたい。

五. 菊池一族と菊鹿型宝篋印塔について

菊鹿型宝篋印塔については多田隈豊秋氏により、「六段式宝篋印塔」と定義された。定義では「基壇が六段。二石又は三石より成り、再下段より最上段までその高さはわずかな差で漸次しながらも、(略)ほぼ同じ高さのものを積み上げている。蓋石の四隅に刻出された馬耳形隅飾は三弧式をとっているが、弧と弧の間に稜角を降だし、その間を匙形にしゃくついている」としている(多田隈1975)。その後、前川清一氏による研究がまとまったものとしてあげられる(前川1995)。熊本県山鹿市・菊池市を中心に43例を報告し、分布の北限は福岡県八女郡の3例、南限は熊本市の1例を上げている。紀年銘資料は、23例で正平十六年(1361)から天正十二年(1584)が確認されている。おおよそ、十五世紀中頃～十六世紀としている。ここで前川氏は菊鹿型宝篋印塔という定義ではなく、特徴的な塔身を菊鹿型塔身と定義していることに注目したい。塔身に二段の段形がつくのだが、それが上部付くとⅠ型と下部につくとⅡ型と分類されている。ちなみにⅠ型は39例、Ⅱ型は4例とこのこと。その後、積極的な研究はなかつたが、美濃口雅朗氏により熊本城飯田丸石垣出土石造物の菊鹿型塔身の分析を進めるなかで触れられて

いる(美濃口2017)。興味深いのはその出土資料は紀年銘「至徳元年(1384)」と東福寺資料よりも古いことや、塔身上部につく段形も三段と特異な姿を呈していることである。塔身につく三段の段形は他の資料にはない。古い型式が2段を遵守しているため、この資料自体は新しく、古い年号が追刻された可能性も考えられるのではないだろうか。また、美濃口氏により前川氏の事例に新規に三基の事例を追加されている。最近では九州古文化研究会の例会で原田昭一氏から「九州における宝篋印塔の出現と展開」という研究発表が行われた。発表資料のなかで、九州の宝篋印塔の展開期に、いわゆる六段式基礎を持つ宝篋印塔は、熊本県山鹿市川西宝篋印塔(正和三年(1314)銘)から菊池市寺尾野宝篋印塔(天授四年(1378))に繋がり、戦国期に至るまで熊本県北部で流行したとする。また、原田氏はこの特徴的な宝篋印塔を菊池氏に関係すると位置づけている。それは大智という僧が、鎌倉時代末、南北朝時代初期に菊池氏の要請により、菊池市の山深い聖護寺に入山し、後に玉名の広福寺に移り、曹洞禅を広めた地域がちょうどこの宝篋印塔が展開していると原田氏は説明している。つまり、大智の庇護者である菊池氏の勢力圏で、禅宗の教線拡大が行われた地域と鎌倉時代末、南北朝時代の宝篋印塔の分布域が重なることがその証左とする。

さて、用語の定義を行いたい。菊鹿型宝篋印塔とは、まず①基礎が六段階式である(ただし、その構成は一段一石六段、二石三段六段、三石二段六段、一石六段とバラエティに富むのが興味深い)。時代が下るとこの六段階の規制が明確に認められるのが特徴である。また時代が下るとこの六段の規制が緩み、五段、四段と段数が減るもの確認できる。次に②笠部の下段二段が別石作りである(これも時代が下ると省略され塔身側に段形が付きかわゆる菊鹿型塔身と呼ばれているものになる)③笠部の

隅飾りは馬耳形(羽状)で基本三弧式(二弧も少数あり)を呈し、それぞれ稜線をつけて中を挟んでいる(これも型式変遷で退化して行く要素)。また石材は阿蘇溶結凝灰岩を使用する。

菊鹿型宝篋印塔の型式変遷については第21・22図に型式変遷案をまとめた¹⁵⁾。現在の山鹿市域で誕生した菊鹿型宝篋印塔は全国で見られる定型化した宝篋印塔ではなかった。非常に特徴があり、なぜその形になっただかが大変興味深い。現時点では明確な論拠はないが、笠部から露盤に至る六段の段形が、伏鉢を仏塔本体と見立てたときの基礎にあたる階段と考えたら、基礎部も同様に塔身に至る階段として六段の階段と見立てたのではないかと想定している。また、14世紀初めに建立された川西宝篋印塔を基点として以後、戦国時代末まで造られた菊鹿型宝篋印塔は、銘文によると当初は真言宗に深く関わるものであった¹⁶⁾。その後も塔身の銘文などを確認すると、明確に武士と言えるものはなく、僧侶の墓だったことがわかる。そのためか、五輪塔ほど多数残存しておらず、割合的には少数の部類になるだろう。

菊鹿型宝篋印塔の分布が、菊池氏の支配領域と重なる範囲で多く見られることを菊池氏の禅宗帰依と直接結び付けるのは現段階では慎重でありたい¹⁷⁾。菊池氏が支配した領域の中の寺院で、菊鹿型宝篋印塔を積極的に採用した理由に関しては、今後とも検討を加え考察を進めたい。菊池一族の顕彰活動として重要な動きは、正観寺で見られる菊池一族の墓¹⁸⁾、天明年間(1781-1789)に「再発見」されている菊池一族の墓¹⁹⁾、追刻などから判断して、菊鹿型宝篋印塔を利用した後世の顕彰活動と考えられる。菊池一族の顕彰は長い間に何度も行われており、その際に菊鹿型宝篋印塔を利用して菊池一族の墓として再構築した可能性を指摘できることが、今回の調査成果の一つとしてあげられる。

おわりに

以上、石造物から見た菊池一族との関わりを、東福寺石塔群の調査とそれに付随する菊鹿型宝篋印塔の検討を通して検討してみた。また今まで完形優品でないため石造美術の対象にならず、また銘文があるものだけが文献史学から注目されたきた石造物を考古学的手法により、再評価できることを指摘した。それに加えて地域の特徴ある石造物である菊鹿型宝篋印塔を新たに検討して一応の型式変遷の方向性を提示した。しかしながらコロナ禍の影響もあり、現地へ赴き、詳細な分布調査や個別石塔図面の作図まで至らなかったことは、今後の課題としたい。特に菊池五山の他の寺院例の検討は必須だと思われる。

本稿をきっかけに菊池一族に係わる石造物からみた研究が進み、学問的な見地から菊池一族の歴史が解明されることを期待したい。またこのような縁を頂き研究に参加させて頂いたことを感謝し、今後も研究を進めたいと考えている。

資料調査にあたっては、池田朋生氏（熊本県）を主に、木島幸太郎氏（熊本大学生）、原田信敬氏（熊本県）、西田京平氏（上天草市）に石塔の作図助力や現地での類例確認などサポートして頂き、大変お世話になった。特に池田氏には、石材の見方、帯磁率測定を始めとして協力して頂くことのみならずデイスカシオンを繰り返し石造物を考える機会を造って頂き、その度に多くの示唆を得た。また、日頃から永見秀徳氏（九州文化財計測支援集団）には三次元計測の指導助言、今回のドローン撮影の協

力など多岐にわたり助けていただき感謝を申し上げます。現地での石塔調査では東福寺住職である白石浄光氏に格段の配慮を頂き、感謝している。地元巨地区の自治会の方、東福寺を清掃されている方々にも昔の話を聞かせていただいた。

末筆になるが、本稿の執筆にあたって、上床真氏、狭川真一氏、末武希代子氏、関森惣氏、竹田宏司氏、西住欣一郎氏、美濃口雅朗氏、宮崎歩氏、山田元樹氏からご助言・資料提供など格別のご配慮を頂いた。末筆ながら感謝申し上げます。

追記

校正中に、藤島志考二〇二〇「熊本における中世宝篋印塔の様相―宇土半島以北を中心として―」「福岡大学考古学論集3―武末純一先生退職記念―」武末純一先生退職記念事業会の存在を見落としていたことに気付いた。藤島氏の論文は、熊本県内の中世宝篋印塔を網羅しタイプ分けし、編年案を提示された意欲作である。当然、菊鹿型宝篋印塔も取り上げられており、本来であれば評価すべきだが、今回は気付くのが遅く、取り上げることが叶わなかった。次回、菊鹿型宝篋印塔の再検討が行う機会が与えられた際には、是非参考にさせて頂きたい。

註

- (一) 川勝政太郎たちの研究グループが昭和七年(1932)頃に提唱した「石造美術」という用語だが、そもそもは石造物や石造遺物という言葉が固すぎ、市民にアピールするには難しいという判断で新たに提唱された可能性がある(山路裕樹氏ご教示)。その後、この用語は川勝氏らの活躍により地方史・郷土史の研究が進むなか、美術史の一分野として広く隆盛し、用語としても定着した(高嶋2021)。ただ美術史の一環として石造物の調査が行われると、写真やメモから推定が行われがちで、客観的なデータである実測図などが提示されないことが多かった。しかしながら、川勝(1982)では「遺品それ自体の様式・手法などの歴史考古学的研究によって、全国的に、または地方的に文化相を明らかにすることができるのである」と明記されているように、考古学的な手法での分析が石造物にとって有効的手法であることも間違いない。近年の研究史を振り返るに、考古学手法による石造物の研究は、考古学研究者が主導的に編集を行った『日本石造物辞典』(2012)の刊行が1つの大きな転換期であると捉えている。
- (二) 東福寺については『日本歴史地名大系』および『角川日本地名大辞典』を参考にした。
- (三) 寺伝は、菊池市教育委員会より昭和六十三年三月に設置された輪足山東福寺の文化財解説板による。また東福寺の石造物の由来は、境内の「東福寺の墓石群のご案内」という解説板を参照した。
- (四) 菊池五山は、京都・鎌倉の五山の制にならい、菊池武光により東福寺、西福寺、南福寺、北福寺、大琳寺とされ、その五山の上に、正観寺を置き、格付けを行った。
- (五) 表2の作成は池田朋生氏の調査成果によるものである。記して感謝申し上げる。石造物の帯磁率調査は近年盛んになってきた。しかしながら調査方法の限界等
- あり、またその適用についても考古学側が無作為に使うことは危険が伴う。それらを留意しながら今後積極的に活用されるべき調査方法だと考えている。なお今回の調査データにもし具合があれば、その責は筆者にある。
- (六) 今回の調査成果の1つに阿蘇溶結凝灰岩のなかで黒系統と赤系統が確認されたことがあげられる。一般的に色調は黒系統を示すのだが、ある程度の赤い阿蘇溶結凝灰岩が認められる。調査地点の近隣では、熊本県指定重要文化財である立門橋付近にこの赤い阿蘇溶結凝灰岩の川原石が確認できるほか、立門橋を後世する石材に黒い阿蘇溶結凝灰岩と赤い阿蘇溶結凝灰岩の両方が確認できる。現地での視認ではおおよそ3割程度が赤い阿蘇溶結凝灰岩である。以上、池田朋生氏のご教示による。
- (七) 美濃口雅朗、野村俊之両氏からのご教示による。
- (八) 乙護法堂には乙護大明神が祀っており、耳の神様、ボケ知らずとして信仰されている。乙護大明神は一般的には乙護童子として知られているもので、乙、和の2体の組み合わせで仏教や特に修験道に深く関わるものである。吉田扶希子氏のご教示による。
- (九) 境内の解説板「東福寺の墓石群のご案内」を参照した。
- (十) 境内の解説板「東福寺の墓石群のご案内」を参照した。
- (十一) 境内の解説板「東福寺の墓石群のご案内」を参照した。
- (十二) ただし熊本では近世期の大きな改変を他の多くの偉大な業績ゆえ、すべからく加藤清正がやったこととする傾向(池田氏教示)があるが、清正ではなくともたかとうが不明である。ここではそのような伝承があり、清正ではなくとも同じように大きな権力の変換期があり、東福寺が存亡の危機にあったことが想定できるとする。
- (十三) 石段入口右手にある碑文を参照した。同碑文では、洪江家は代々菊池一族の顕彰には特に熱心だったため、菊池一族の菩提寺の1つである東福寺の為に力添え

したのではないかと説明している。なお渋谷氏の墓は、東福寺の南西側の丘陵上にある。

(三) 正観寺では二十基以上の菊鹿型宝篋印塔を確認している。今後、調査の必要を痛感している。

(三) 簡単にまとめると、巨大なものから小さいものへ、複雑な構造を造りやすくするために簡略化していることがうかがえる。但し、戦国時代から近世にかけて再度巨大化していく可能性が考えられる。これは大名やその家臣が先祖顕彰のため、新しい時代に古い様式の石塔を造るためだと推定している。

(三) 川西宝篋印塔と元吾平神社宝篋印塔のどちらも路文に、「遍照金剛」とあり、真言宗に帰依したものによる建立である。

(三) 例えば、菊池五山のなかでも東福寺は天台宗である。もちろん、東福寺が元々天台宗であったとしても十四世紀中頃の菊池五山の段階で衰微しており、臨済宗の寺として復興したという理解も成り立たないこともない。ただ、寺伝にまつたかのような話が出てこないのと、江戸時代の地誌にも東福寺は祈禱所であったと記載されており、天台宗の密教系の様子がうかがえる。むしろ、それら宗派を越えて僧侶の墓として菊鹿型宝篋印塔が採用された要因を今後考えていかなければならない。

引用・参考文献

- 石田瑞麿 一九九七 『例文 仏教語大辞典』 小学館
『桶木町史』一九八一 桶木町
『角川日本地名大辞典』四三 熊本県 一九九八 角川書店
川勝政太郎 一九八一 『石造美術』 誠文堂新光社
『菊池市史』上巻第二版 一九九五 菊池市
高嶋賢二 二〇二二 『愛媛県の有形文化財』『石のクロニクル―黒川信義さん古稀記

念論集― 黒川信義さん古稀記念論集刊行会

日本石造物辞典編集委員会編 二〇二二 『日本石造物辞典』 吉川弘文館

多田限豊秋 一九七五 『九州の石塔』 上巻 西日本文化協会

原田昭一 二〇二二 『九州(宝篋印塔)』 狭川真一・松井一明編 『中世石塔の考古学―

五輪塔・宝篋印塔の形式・編年と分布』 高志書院

原田昭一 二〇一九 『九州における宝篋印塔の出現と展開』九州古文化研究会発表資料

『七城町誌』一九九二 七城町

前川清一 一九九五 『菊鹿の石造物』菊鹿町教育委員会

松本雅明編 一九八五 『日本歴史地名大系』熊本県の地名 平凡社出版

美濃口雅朗 二〇一七 『熊本城飯田丸出土の石造物』『熊本城調査研究センター年

報3』 熊本市熊本城調査研究センター

挿図出典

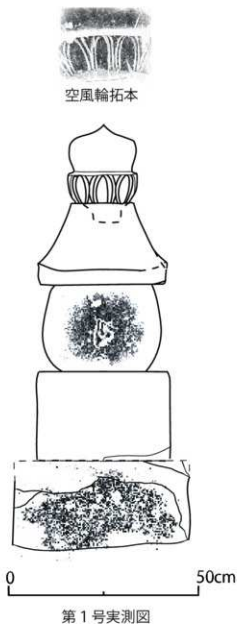
図版内の種子フナトについては、左記のサイトからD1として使用させていただいた。記して感謝する。

Wikipedia 種子密教 Blackhighlight 氏作成

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A8%AE%E5%AD%90-%E5%A%86%E6%95%99>

表2 東福寺石塔の帯磁率及び石材判定表

番号	塔号	名称	帯磁率(mG)	紀年誌	石材判定	備考
1		地輪	18.4	元弘3年(1333)	阿蘇4(帯磁率) 黒	「元弘」文輪
		地輪	6.74		凝灰岩	若しくは阿蘇4に似る。再度確認必要。
		小輪	23.9		阿蘇4(帯磁率) 黒	文字有り
		大輪	19.3		阿蘇4(帯磁率) 赤	赤みを帯びた阿蘇4
		空見輪	15.4		阿蘇4(帯磁率) 黒	
2		無縁礎	19.2	參確誌	島崎石	紀年誌のある石材のみ測定
3		位牌形石之世帯	19.2	文化2年(1805)	島崎石	紀年誌のある石材のみ測定
4		保存対象部材		天明6年(1796)		未測定
5		石碑	27.9	享保3年(1722)	安山岩	反照鏡レンズ状割線により取出した石材。島崎石ではない。
6		地輪	17.2	享保3年(1722)	阿蘇4(帯磁率) 黒	有り
		小輪	26.5		阿蘇4(帯磁率) 黒	
		大輪	25.1		阿蘇4(帯磁率) 赤	
		空見輪	21.7		阿蘇4(帯磁率) 黒	
7		保存対象部材か	32.7		阿蘇2~3	下部からの水の滲い上げによる物理風化を殆ど防除を期待したものでない。
		地輪	8.16	建武3年(1336)	阿蘇4(帯磁率) 黒	參確誌
		小輪	25.1		阿蘇4(帯磁率) 赤	
		大輪	8.44		阿蘇4(帯磁率) 黒	參確誌
		空見輪	7.47		阿蘇4(帯磁率) 黒	參確誌
8		基礎	16.4		阿蘇4(帯磁率) 黒	鞍馬型実置口石
		基壇	14.9		阿蘇4(帯磁率) 黒	笠置口石
		笠石	14.4		阿蘇4(帯磁率) 黒	鞍馬型実置口石
		地輪	9.74		阿蘇4(帯磁率) 黒	鞍馬型実置口石
9		地輪?	9.66		阿蘇4(帯磁率) 黒	
		笠石(礎石遺構か)	9.57		阿蘇4(帯磁率) 黒	
10		地輪	22.0	永享7年(1435)	阿蘇4(帯磁率) 黒	
		小輪	25.2		阿蘇4(帯磁率) 赤	
		大輪	18.4		阿蘇4(帯磁率) 黒	
		空見輪	13.6		阿蘇4(帯磁率) 黒	
11		地輪	7.74		阿蘇4(帯磁率) 黒	
		地輪	8.64	応永8年(1401)	阿蘇4(帯磁率) 黒	
		小輪	14.9		阿蘇4(帯磁率) 赤	
		大輪	14.0		阿蘇4(帯磁率) 黒	遺構残付き
12		地輪の転用材?	12.4		阿蘇4	地ならし用?
		地輪の転用材?	11.1		阿蘇4	地ならし用?
		地輪	25.4		阿蘇4(帯磁率) 赤	
		笠石	29.6		阿蘇4(帯磁率) 黒	鞍馬型実置口石
		空見輪	17.1		阿蘇4(帯磁率) 黒	
13	上段	基礎	14.0		阿蘇4(帯磁率) 黒	鞍馬型実置口石
		礎石?	20.0		阿蘇4(帯磁率) 黒	
		大輪	20.8		阿蘇4(帯磁率) 黒	
		空見輪	14.6		阿蘇4(帯磁率) 黒	
14		地輪	23.4	鎮入り	阿蘇4(帯磁率) 黒	
		基礎	15.7		阿蘇4(帯磁率) 黒	鞍馬型実置口石
15		基礎	13.6		阿蘇4(帯磁率) 黒	鞍馬型実置口石
		笠石	18.9		阿蘇4(帯磁率) 黒	鞍馬型実置口石
16		礎石?	17.1	文明13年(1481)	阿蘇4(帯磁率) 黒	鞍馬型実置口石
17		礎石?				
18		礎石?				残欠
19		礎石?				
		礎石?				
		礎石?				
20		基礎	16.8	文明5年(1473)	阿蘇4(帯磁率) 黒	五輪礎
		笠石	12.1		阿蘇4(帯磁率) 赤	鞍馬型実置口石
		地輪?	15.9		阿蘇4(帯磁率) 黒	
21		地輪?	23.2		阿蘇4(帯磁率) 黒	
		基礎	14.9	宝暦2年(1450)	阿蘇4(帯磁率) 黒	鞍馬型実置口石
		笠石			阿蘇4(帯磁率) 黒	鞍馬型実置口石
		空見輪			凝灰岩	
		保存対象部材か	6.46		阿蘇4	20番目?
22		基礎	27.0	大永6年(1528)	阿蘇4(帯磁率) 黒	笠置口石
		大輪	4.94		阿蘇4(帯磁率) 黒	
		空見輪	16.0		阿蘇4(帯磁率) 黒	
		地輪	22.8		阿蘇4(帯磁率) 黒	
23		小輪	21.2		阿蘇4(帯磁率) 赤	
		小輪	27.8		阿蘇4(帯磁率) 赤	
		大輪	28.8		阿蘇4(帯磁率) 赤	
		空見輪			阿蘇4(帯磁率) 赤	
24		基礎	13.4		阿蘇4(帯磁率) 黒	鞍馬型実置口石
		小輪	5.99		阿蘇4(帯磁率) 黒	
		小輪	13.7		阿蘇4(帯磁率) 黒	
		大輪	21.0		阿蘇4(帯磁率) 黒	
		空見輪	18.96		阿蘇4(帯磁率) 黒	
25		地輪	3.65		阿蘇4	遺構残付き
		小輪	43.1		阿蘇4(帯磁率) 黒	
		大輪	18.6		阿蘇4(帯磁率) 黒	
		空見輪	14.1		阿蘇4(帯磁率) 黒	
26		地輪	8.19		阿蘇4(帯磁率) 黒	
		小輪	17.3		阿蘇4(帯磁率) 黒	
		空見輪	8.32		阿蘇4(帯磁率) 黒	
		石碑	16.6		阿蘇4(帯磁率) 黒	
27		石碑	20.4	寛正(1460~1466)	阿蘇4(帯磁率) 黒	
28		石碑(礎石)	37.1	明和20年(1807)	島崎石	



空風輪拓本



水輪拓本 裏面



水輪拓本 左面



水輪拓本 右面



水輪拓本 正面

水輪種子 (金剛界四仏)

正面 (西) hrih 阿弥陀如来

左面 (北) a 大日如来

裏面 (東) hūṃ 阿閼如来

右面 (南) trāh 宝生如来



地輪拓本

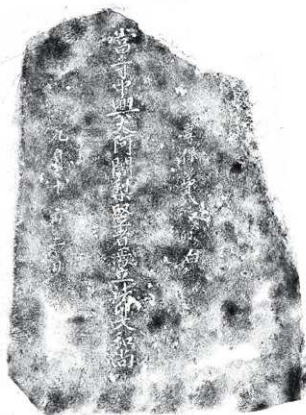
□	二	□	弘
□	力	□	力
□	十	□	三
□	六	□	年
□	将	□	西
□	死	□	三
□	□	□	月
□	□	□	□

地輪 銘文

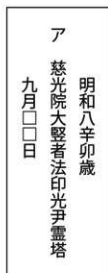
第4図 東福寺石塔 第1号実測図 (S = 1/10) (拓本は縮尺任意)



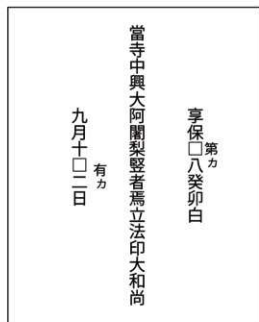
第2号石塔 拓本



第5号石塔 拓本



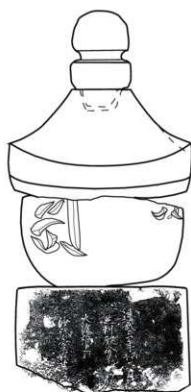
銘文



銘文



第 6 号石塔



第 7 号石塔



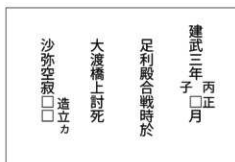
水輪拓本 (背面)



水輪拓本 (左)



第 6 号水輪拓本



第 7 号地輪銘文



水輪拓本 (正面)



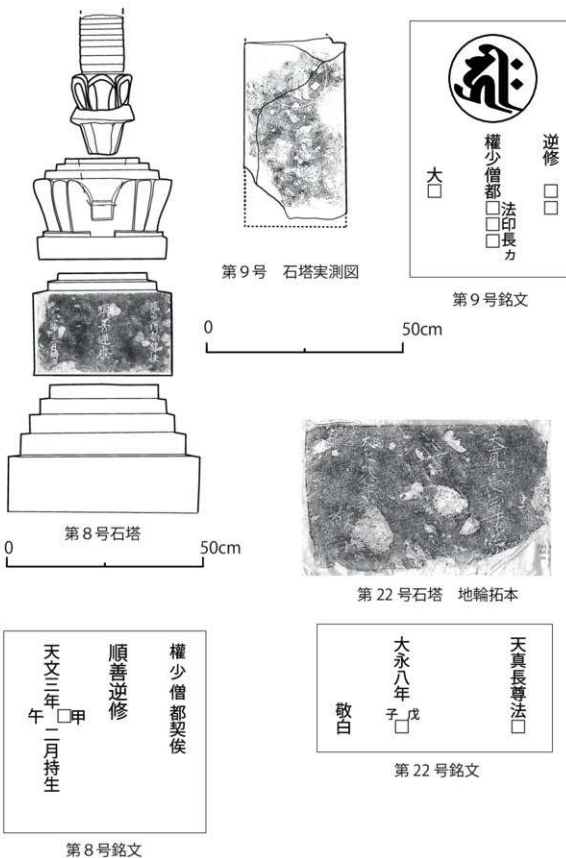
水輪拓本 (右)



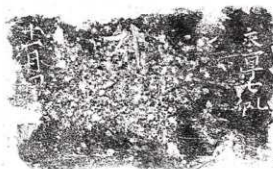
第 6 号地輪銘文



第 6 图 東福寺石塔 第 6 号・7 号実測図 (S = 1/10)



第7図 東福寺石塔第8号・9号実測図 (S=1/10)



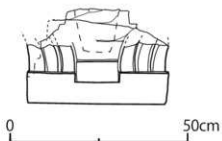
第10号 拓本



第10号 銘文



第11号
火輪拓本



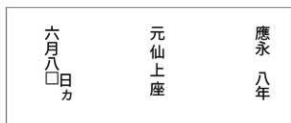
第12号 実測図



第13号 拓本



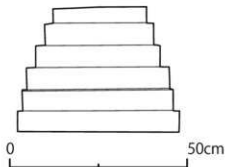
第11号 拓本



第11号 銘文

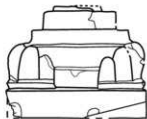
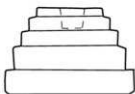


第13号 銘文

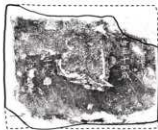


第13号 実測図

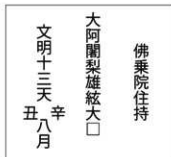
第8図 東福寺石塔第10・11・12・13号実測図



第16号 実測図



第14号 実測図



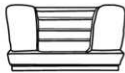
第16号 銘文



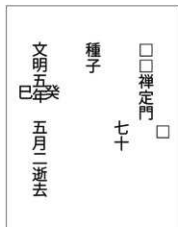
第20号 実測図



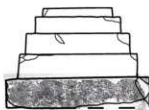
第14号 銘文



第21号 笠部
実測図



第20号 銘文



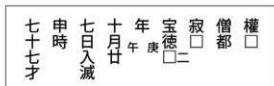
銘文



第21号 基礎最下段拓本

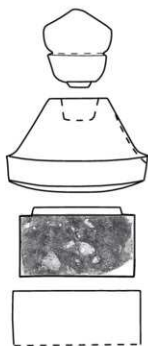


第21号 基礎 実測図

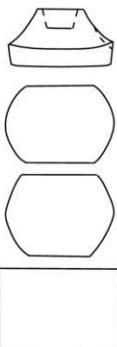


第21号 銘文

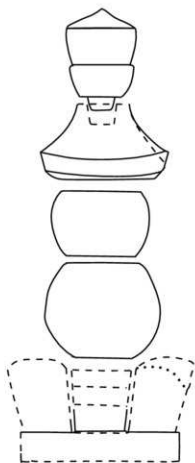




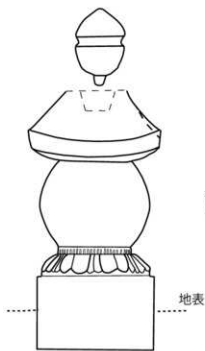
第 22 号 实测图



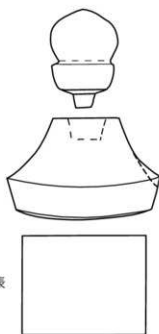
第 23 号 实测图



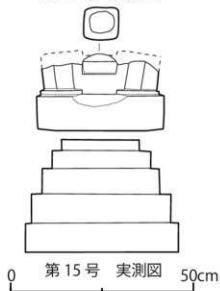
第 24 号 实测图



第 25 号 实测图

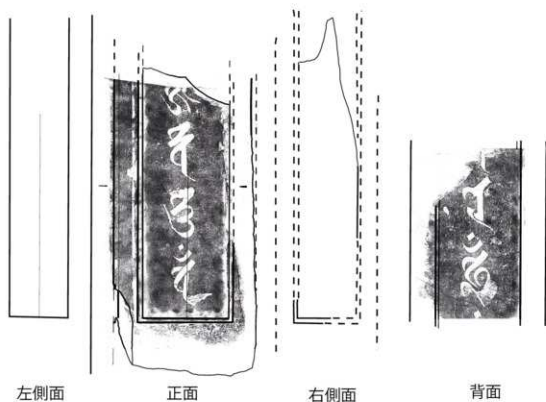


第 26 号 实测图



第 15 号 实测图 50cm

第 10 图 東福寺石塔 第 15·22·23·24·25·26 号实测图 (S = 1/10)



左側面

正面

右側面

背面

第 27 号 実測図

50cm



第 27 号左側面拓本

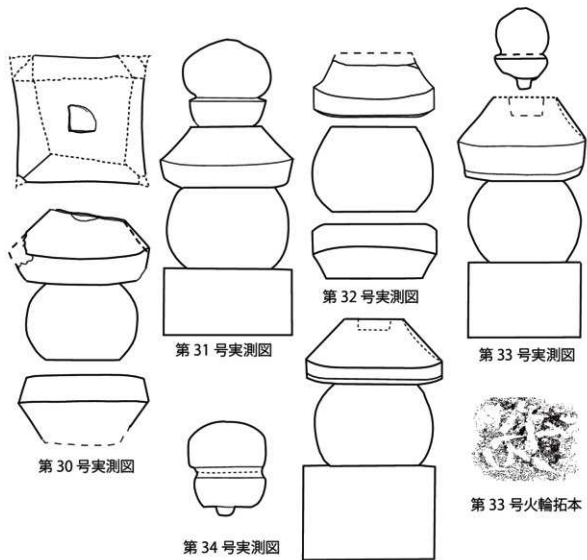
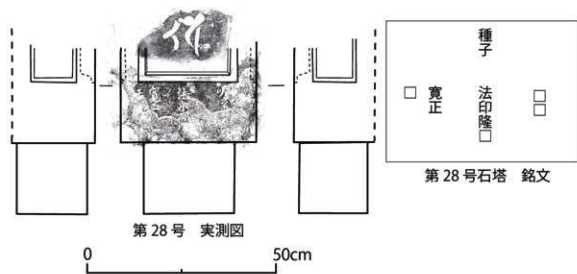
- 本
 来具足三身徳 三十七尊住心
 城
- 婦
 命本覚心法身 常住妙法心蓮台



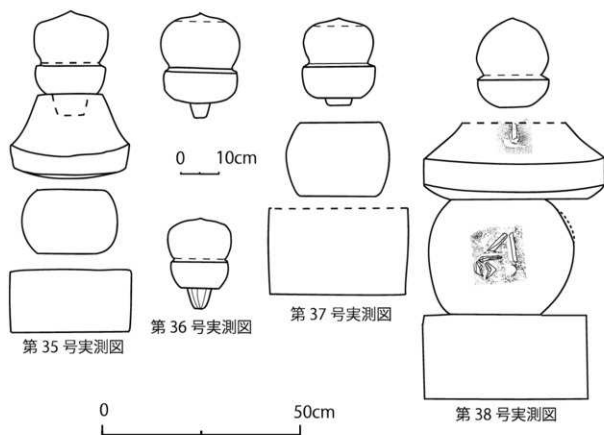
第 27 号右側面拓本

- 六
 大
 無礙常瑜伽 四種曼荼各不離
- 三
 密加持速疾願 重重帝網名即身

第 11 図 東福寺石塔第 27 号 実測図



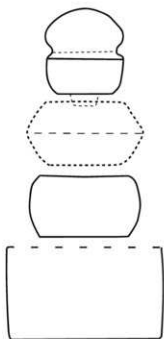
第12图 東福寺石塔 第28・30・31・32・33・34号 实测图 (S=1/10)



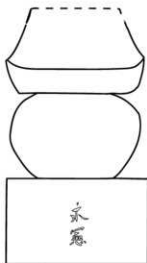
第 38 号日輪 拓本



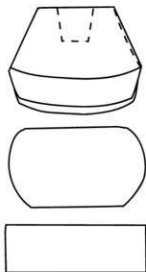
第 38 号水輪 銘文



第 39 号石塔



第 40 号石塔



第 41 号石塔



第 42 号石塔



第 47 号石碑拓本



逆
□修力

奉漸□大乘妙典六千餘部□四日報謝二世安樂
東福寺當住持中興大阿闍梨暨者法印快鎮大和尚
元祿三 庚午 天 八月吉祥日

第 47 号石碑銘文



第1号石塔（南から）



第2・3・4号石塔（南から）
向かって右手から2号、3号、4号



第5号石塔（南から）



第6号石塔（南から）



第7号石塔（南から）



第9号石塔銘文部（南から）



第8号石塔（南から）



第7号石塔銘文部（南から）



第8号石塔銘文部（南から）



第10号石塔（南から）



第11号石塔（南から）



第12号石塔（南から）



第13号石塔全景（南から）



第11号石塔地輪（南から）



第14号石塔（南から）



第15号石塔（南から）



第13号石塔塔身部
上下反転（南から）



第 16 号石塔（南から）



第 17 号石塔（南から）



第 20 号石塔（南から）



第 21 号石塔（南から）



石塔第 22 号（南から）



石塔第 22 号基礎（南から）



第 23 号石塔（南から）



第 24 号石塔（南から）



第 25 号石塔（南から）



第 26 号石塔 (南から)



第 27 号石塔正面 (東から)



第 27 号石塔側面 (東から)



第 28 号石塔 (北から)



第 38 号石塔 (南から)



第 40 号石塔 (南から)



第 29 号石塔
(南西から)



第 44 号石塔 (南から)



第45号石塔 全景（南から）



第45号左塔（南から）



第45号右塔（南から）



第45号 左塔地輪銘文（南から）



第46号石塔（南から）



第47号石碑（南から）



第48号石塔（南から）



第 49 号石塔 (南東から)



第 49 号正面 (南から)



第 49 号背面 (北から)



第 49 号右側面
(東から)



第 49 号左側面
(西から)



東福寺石塔 全景 (東から)



川西宝篋印塔
(1314年)

六段基礎（一段一石）
笠部下段形一石二段
隅飾り別石
馬耳状三弧



元吾平神社宝篋印塔
(1319年)

六段基礎（一段一石）
隅飾り別石
馬耳状三弧



相良寺元泉水宝篋印塔
(紀年銘なし)

六段基礎（二段三石）
隅飾り笠部と一体
馬耳状三弧



平重盛供養塔（紀年銘なし） 型的には（古）左塔⇒中央塔⇒右塔（新）

左塔	中央塔	右塔
六段基礎（二三三石）	六段基礎（上二段、中央三段、下一段）	①基礎四段 ②基礎六段一石彫成（画期）
笠部下段形一石二段	笠部下段形一石二段か	笠部下段形一石二段か
塔身方形	塔身方形	塔身上部二段付き（I型）
隅飾り笠部と一体型	隅飾り笠部と一体型	隅飾り笠部と一体型
馬耳状三弧隅飾り	馬耳状三弧隅飾り	馬耳状三弧隅飾り

第 21 図 菊鹿型宝篋印塔の型式変遷案 1



寺尾野宝篋印塔
(1378年)
基礎六段一石形成
塔身上二段段形
馬耳状三弧隅飾り
定型化



東福寺石塔第16号
宝篋印塔
(1481年)
塔身上二段段形
塔身のみ。小型化。



耳宝篋印塔
(無銘)
基礎六段一石形成
塔身上二段段形
馬耳状三弧隅飾りの
痕跡がわずかに残る。
小型化



東福寺石塔第21号
宝篋印塔
基礎五段一石形成



菊池兼朝墓

菊鹿型宝篋印塔の笠部と塔身に五輪塔の空風輪と水輪を組み合わせる形。近くに兼朝が建立した正善寺がある。元々、古墳があった場所を菊池一族の墓所として整備したものか。菊池兼朝は文安元年(1444)に63歳で死去している。菊鹿型宝篋印塔の笠部と六段基壇の特徴から判断して、この石塔群の年代観は15c～16cであってもおかしくないが、武将の墓ではなく正善寺の僧侶の墓を、後世に菊池一族の墓として再整備したものと考えている。



西福寺宝篋印塔

(1327年紀年銘 追刻か)
基礎五段一石形成
笠部の隅飾りの巨大化。
菊池兼朝墓などを菊池一族の墓であるという「モデル」として当初より混成塔を製作した可能性が考えられる。
16c～17c

北

北河原

虎
村

田

北河原



東

南

南

一田河渡更長七町五尺餘
赤子舟身八寸許

北河原五五九步
拾九町九尺餘

赤子村
出田村

今村
村

今村

春

今村
手記

今村